

西谷地遺跡第2次
西ノ川遺跡
発掘調査報告書

1995

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

にしやち
西谷地遺跡第2次

にしのかわ
西ノ川遺跡

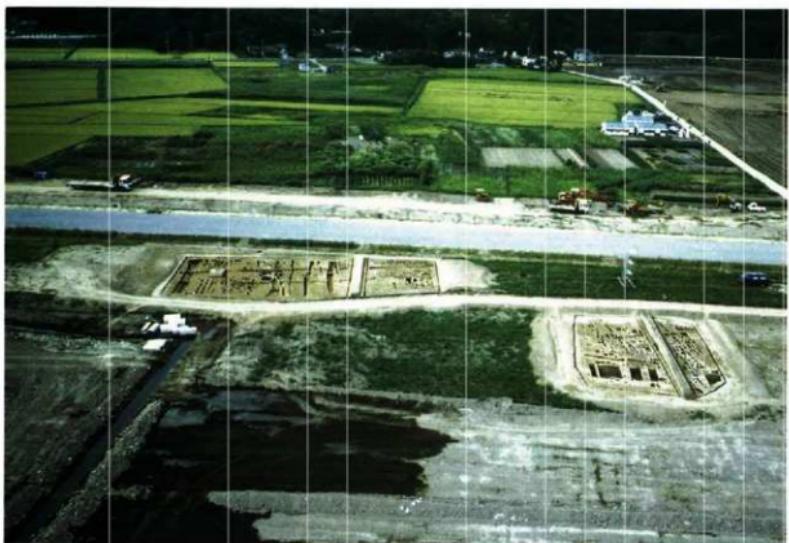
発掘調査報告書

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



西谷地遺跡北区全景（東方上空から）

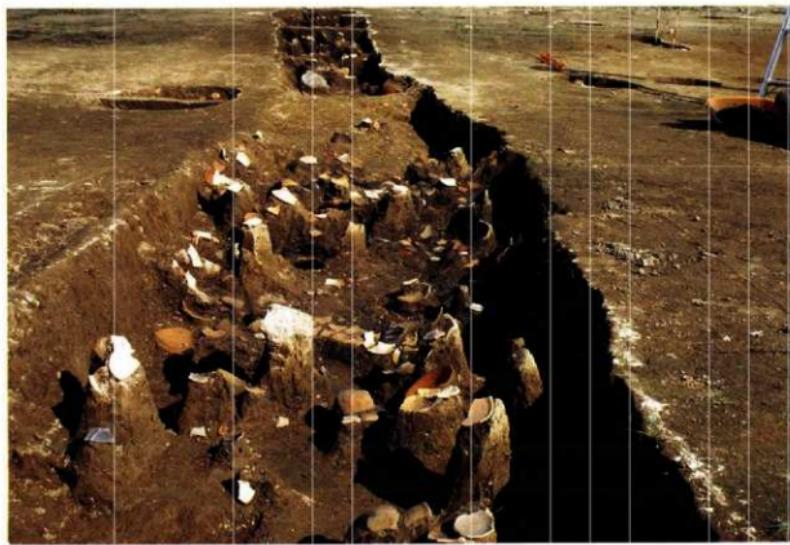


西谷地遺跡東区全景（東方上空から）

卷頭図版 2



西谷地遺跡遠景（北西から）



西谷地遺跡 S D 69遺物出土状況（西から）



西ノ川遺跡近景（北から、周囲の水田より一段高い畠地が調査対象区域、後方左が善宝寺）



西ノ川遺跡調査状況（A区・B区・C区）

巻頭図版 4



西ノ川遺跡調査状況（C区・D区）



西ノ川遺跡調査状況（E区）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、西谷地遺跡と西ノ川遺跡の調査結果をまとめたものです。

西谷地遺跡と西ノ川遺跡は山形県の北西部に位置する鶴岡市にあります。鶴岡市は古くから城下町として発展し、藩校致道館をはじめ多くの史跡や文化財があり、庄内平野の中心的な都市として今日に至っています。

調査では、鶴岡市街の西方約5kmにある善宝寺の北に広がる水田及び畠地から、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などの遺構と土師器・須恵器・赤焼土器などの遺物が検出され、古代から中世にかけて集落が存在したことがわかりました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

1 本書は県営は場整備事業（下川地区）に係る「西谷地遺跡第2次」「西ノ川遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は山形県教育委員会の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　西谷地遺跡（ATONY-2）　　遺跡番号　平成3年度登録

所在地　山形県鶴岡市大字下川字西谷地

調査期間　発掘調査　平成6年4月1日～平成7年3月31日

現地調査　平成6年5月9日～平成6年8月31日　76日間

調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当者

調査研究課長　佐々木　洋治

主任調査研究員　尾形　與典

調査研究員　高橋　敏

調査研究員　浅黄　喜悦

嘱託職員　飯塚　稔

遺跡名　西ノ川遺跡（ATONK）　　遺跡番号　平成4年度登録

所在地　山形県鶴岡市大字下川字西谷地

調査期間　発掘調査　平成6年4月1日～平成7年3月31日

現地調査　平成6年5月9日～平成6年7月27日　57日間

調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当者

調査研究課長　佐々木　洋治

主任調査研究員　尾形　與典

調査研究員　浅黄　喜悦

嘱託職員　飯塚　稔

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部赤川土地改良事務所、西郷土地改良区、庄内教育事務所、鶴岡市教育委員会、社団法人鶴岡市シルバー人材センター等関係機関、並びに鶴岡市の方々から協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

5 本書の作成・執筆は、西谷地遺跡については尾形與典、高橋　敏、浅黄喜悦、飯塚　稔が、西ノ川遺跡については浅黄喜悦、飯塚　稔が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

6 委託業務は下記のとおり実施した。

西谷地遺跡　遺構と一部の遺物の写真実測　株式会社シン技術コンサル

一部の遺物の保存処理 新日本製鐵株式会社釜石製鐵所
釜石文化財保存処理センター

西ノ川遺跡 遺構の写真実測 国際航業株式会社
自然科学分析 株式会社パレオ・ラボ

- 7 出土遺物、調査記録類については、財團法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S B……掘立柱建物跡	S P……柱穴	S D……溝跡
S E……井戸跡	S K……土壙	S X……性格不明遺構
E B……掘り方	R P……土器	R Q……石器・石製品
RM……金属製品	R W……木製品	S G……河川跡
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は、西谷地遺跡でN-49°50'-E、西ノ川遺跡でN-40°00'-Eを測る。
 - (3) 遺構配置図は1/100・1/200・1/250・1/400縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
 - (4) 遺構実測図は1/20・1/40・1/80・1/100・1/200縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
 - (5) 遺物実測図・拓影図は、土器については1/3（一部1/4）、土器以外の遺物については1/2を標準として採録し、各々スケールを付した。
 - (6) 遺物図版については任意の縮尺であるが、同一器種の縮尺はほぼそろえてある。
 - (7) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
 - (8) 土器実測図・拓影図の断面では、網点を入れたものが土師器、黒塗りが須恵器、無表示のものは赤焼土器及び中世以降の土器を表す。土器内外面の網点は黒色処理を、砂目スクリーンは、煤・油煙の痕跡を表している。
 - (9) 拓影図は、左側から外面・内面・断面を表している。
 - (10) 出土遺物観察表中の（ ）内の数値は、図上復元による推定値を示している。
 - (11) 遺構覆土の色調の記載については、1993年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

目 次

I 調査の経緯.....	1
II 立地と環境.....	3
1 地理的環境.....	3
2 歴史的環境.....	3
III 西谷地遺跡.....	4
1 調査の経過.....	4
2 遺跡の概観.....	4
3 検出された遺構.....	15
4 出土した遺物.....	39
5 まとめ.....	68
IV 西ノ川遺跡.....	69
1 調査の経過.....	69
2 遺跡の概観.....	69
3 検出された遺構.....	73
4 出土した遺物.....	81
5 まとめ.....	92
報告書抄録.....	94

表

表 1 西谷地遺跡 出土遺物観察表(1).....	62
表 2 西谷地遺跡 出土遺物観察表(2).....	63
表 3 西谷地遺跡 出土遺物観察表(3).....	64
表 4 西谷地遺跡 出土遺物観察表(4).....	65
表 5 西谷地遺跡 出土遺物観察表(5).....	66
表 6 西谷地遺跡 出土遺物観察表(6).....	67
表 7 西ノ川遺跡 出土遺物観察表(1).....	90
表 8 西ノ川遺跡 出土遺物観察表(2).....	91

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第31図 西谷地遺跡遺物実測図(8)	49
第2図 西谷地遺跡基本層序	5	第32図 西谷地遺跡遺物実測図(9)	50
第3図 西谷地遺跡調査概要図	6	第33図 西谷地遺跡遺物実測図(10)	51
第4図 西谷地遺跡北1区遺構配置図	7	第34図 西谷地遺跡遺物実測図(11)	52
第5図 西谷地遺跡北2区遺構配置図	9	第35図 西谷地遺跡遺物実測図(12)	53
第6図 西谷地遺跡水路敷遺構配置図	11	第36図 西谷地遺跡遺物実測図(13)	54
第7図 西谷地遺跡東区遺構配置図	13	第37図 西谷地遺跡遺物実測図(14)	55
第8図 西谷地遺跡遺構実測図(1)	22	第38図 西谷地遺跡遺物実測図(15)	56
第9図 西谷地遺跡遺構実測図(2)	23	第39図 西谷地遺跡遺物実測図(16)	57
第10図 西谷地遺跡遺構実測図(3)	24	第40図 西谷地遺跡遺物実測図(17)	58
第11図 西谷地遺跡遺構実測図(4)	25	第41図 西谷地遺跡遺物実測図(18)	59
第12図 西谷地遺跡遺構実測図(5)	26	第42図 西谷地遺跡遺物実測図(19)	60
第13図 西谷地遺跡遺構実測図(6)	27	第43図 西谷地遺跡遺物実測図(20)	61
第14図 西谷地遺跡遺構実測図(7)	28	第44図 西ノ川遺跡土層柱状図	70
第15図 西谷地遺跡遺構実測図(8)	29	第45図 西ノ川遺跡調査概要図	70
第16図 西谷地遺跡遺構実測図(9)	30	第46図 西ノ川遺跡グリッド配置図 遺構配置図	71
第17図 西谷地遺跡遺構実測図(10)	31	第47図 西ノ川遺跡遺構実測図(1)	76
第18図 西谷地遺跡遺構実測図(11)	32	第48図 西ノ川遺跡遺構実測図(2)	77
第19図 西谷地遺跡遺構実測図(12)	33	第49図 西ノ川遺跡遺構実測図(3)	78
第20図 西谷地遺跡遺構実測図(13)	34	第50図 西ノ川遺跡遺構実測図(4)	79
第21図 西谷地遺跡遺構実測図(14)	35	第51図 西ノ川遺跡遺構実測図(5)	80
第22図 西谷地遺跡遺構実測図(15)	37	第52図 西ノ川遺跡遺物実測図(1)	83
第23図 西谷地遺跡遺構実測図(16)	38	第53図 西ノ川遺跡遺物実測図(2)	84
第24図 西谷地遺跡遺物実測図(1)	42	第54図 西ノ川遺跡遺物実測図(3)	85
第25図 西谷地遺跡遺物実測図(2)	43	第55図 西ノ川遺跡遺物実測図(4)	86
第26図 西谷地遺跡遺物実測図(3)	44	第56図 西ノ川遺跡遺物実測図(5)	87
第27図 西谷地遺跡遺物実測図(4)	45	第57図 西ノ川遺跡遺物実測図(6)	88
第28図 西谷地遺跡遺物実測図(5)	46	第58図 西ノ川遺跡遺物実測図(7)	89
第29図 西谷地遺跡遺物実測図(6)	47		
第30図 西谷地遺跡遺物実測図(7)	48		

図 版

- 巻頭図版 1 西谷地遺跡調査状況（北区・東区）
巻頭図版 2 西谷地遺跡近景・S D69遺物出土状況
巻頭図版 3 西ノ川遺跡近景・調査状況（A区・B区・C区）
巻頭図版 4 西ノ川遺跡調査状況（C区・D区・E区）
図版 1 西谷地遺跡近景・調査状況（北区）
図版 2 西谷地遺跡調査状況（東区）・鍵入式
図版 3 西谷地遺跡調査状況（北区・東区・水路敷）
図版 4 西谷地遺跡調査状況
図版 5 西谷地遺跡調査状況
図版 6 西谷地遺跡調査状況・調査説明会状況
図版 7 西谷地遺跡基本層序
図版 8 西谷地遺跡遺構精査状況
図版 9 西谷地遺跡遺構精査状況
図版10 西谷地遺跡遺構精査状況
図版11 西谷地遺跡遺構精査状況
図版12 西谷地遺跡遺構精査状況
図版13 西谷地遺跡遺構精査状況
図版14 西谷地遺跡遺構精査状況
図版15 西谷地遺跡遺物出土状況
図版16 西谷地遺跡遺物出土状況
図版17 西谷地遺跡遺物(1)
図版18 西谷地遺跡遺物(2)
図版19 西谷地遺跡遺物(3)
図版20 西谷地遺跡遺物(4)
図版21 西谷地遺跡遺物(5)
図版22 西谷地遺跡遺物(6)
図版23 西谷地遺跡遺物(7)
図版24 西谷地遺跡遺物(8)
図版25 西谷地遺跡遺物(9)
図版26 西谷地遺跡遺物(10)
図版27 西谷地遺跡遺物(11)
図版28 西谷地遺跡遺物(12)
図版29 西谷地遺跡遺物(13)
図版30 西谷地遺跡遺物(14)

- 図版31 西谷地遺跡遺物⑩
- 図版32 西谷地遺跡遺物⑪
- 図版33 西谷地遺跡遺物⑫
- 図版34 西谷地遺跡遺物⑬
- 図版35 西谷地遺跡遺物⑭
- 図版36 西谷地遺跡遺物⑮
- 図版37 西谷地遺跡遺物⑯
- 図版38 西谷地遺跡遺物⑰
- 図版39 西ノ川遺跡基本層序・調査状況・調査説明会状況
- 図版40 西ノ川遺跡遺構精査状況
- 図版41 西ノ川遺跡遺構精査状況
- 図版42 西ノ川遺跡遺構精査状況・遺物出土状況
- 図版43 西ノ川遺跡遺物(1)
- 図版44 西ノ川遺跡遺物(2)
- 図版45 西ノ川遺跡遺物(3)
- 図版46 西ノ川遺跡遺物(4)
- 図版47 西ノ川遺跡遺物(5)
- 図版48 西ノ川遺跡遺物(6)
- 図版49 西ノ川遺跡遺物(7)
- 図版50 西ノ川遺跡出土植物遺体の植物珪酸体顕微鏡写真
- 図版51 西ノ川遺跡出土材の樹種顕微鏡写真

I 調査の経緯

今回の発掘調査は、県営ほ場整備事業（下川地区）に伴うものである。

西谷地遺跡は、平成3年春に県教育委員会がこの一帯の分布調査を行った際、平安時代の遺物の散布が確認されたことによって下川3遺跡として新規に登録されたが、平成5年3月に西谷地遺跡と改称された。

西ノ川遺跡は、同3年春の分布調査によって平安時代の遺物の散布が確認され、下川5遺跡として登録され、西谷地遺跡と同様、平成5年3月に西ノ川遺跡と改称された。

西谷地遺跡は、平成4年6月の表面踏査と同年10月の試掘調査による遺跡詳細分布調査の結果、土師器・須恵器・赤焼土器などの遺物、柱穴・溝跡などの遺構が広い範囲で検出され、現在の畑地を中心に東西200m、南北360mを遺跡範囲とする平安時代の集落跡であることが推定された。昨年（平成5年度）主要地方道酒田鶴岡線の道路改良工事に伴って発掘調査が行われ、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などの遺構とともに15箱ほどの遺物が得られ、それらの検討から古墳時代から中世に至る遺跡であることが明らかとなった。

今年度、この遺跡の一部に県営ほ場整備事業が実施されることになり、教育庁文化財課及び庄内支庁経済部赤川土地改良事務所等関係機関と協議を重ねた結果、西谷地遺跡については、止むを得ず削平される畑地部分の9,080m²について、西ノ川遺跡についても同様に削平される畑地部分の4,800m²について、財団法人山形県埋蔵文化財センターが、記録による保存を目的とした緊急発掘調査をすることになったものである。

西谷地遺跡については平成6年5月9日～同年8月31日まで、西ノ川遺跡については、平成6年5月9日～同年7月27日までの期間で発掘調査を実施した。

なお、西谷地遺跡については、平成5年度の発掘調査を第1次とし、この度は第2次の発掘調査となる。

1 調査の経緯



国土地理院発行 1 : 25,000 地形図「湯野浜」「鶴岡」を縮小して使用。(S = 1 : 50,000)

- | | | | | | | | |
|---|--------------|--------------|-------------|-----------|------------|----------|-----------|
| 1 西谷地(H5.6) | 2 西ノ川(H6) | 3 鍋置 | 4 五百刈(H5) | 5 西田面 | 6 八幡田 | 7 中野(H5) | 8 烟田(H5) |
| 9 山田(H1) | 10 矢馳A(S63) | 11 清木新田(S63) | 12 矢馳B(S63) | 13 助作(H2) | 14 田地田 | 15 二口 | 16 中京田 ● |
| 17 榎中堂 ● | 18 馬糞 ● | 19 大山崩 ● | 20 日本国 ● | 21 新形 ● | 22 畑田 ● | 23 井間號 ● | 24 楠荷山B ● |
| 25 後田(H6) | 26 大道下(H1.6) | 27 月記(H1) | 28 大東(H1) | 29 池之内 | 30 塚の原(H6) | 31 三ヶ水口 | 32 烏居上 |
| ※()は調査年度、●印は昭和53年3月以前に登録された遺跡であることを示す。 | | | | | | | |

第1図 遺跡位置図

II 立地と環境

1 地理的環境

西谷地遺跡は、山形県鶴岡市大字下川字西谷地にあり、鶴岡市街地の中心部から北西に約5kmの水田の中に位置している。庄内平野西縁の河間低地に立地し、標高10~11mを測る。すぐ西側を高館山地に限られ、東には金峰山麓に源を発する大山川が北流する。

高館山地は加茂台地とも呼ばれ、標高200~250mの定高性をもつ山地（最高点は荒倉山307m）である。花崗岩を基盤として、新第三紀中新世の固結堆積物である凝灰質シルト岩などからなり、広義の朝日山地の北西端に位置するとともに、新潟県から山形県にかけて海岸に平行して走る羽越山地の一部をも構成している。

高館山地の北端に始まる庄内砂丘は、長さ35km、最大幅約3kmという、国内有数の規模をもって庄内海岸を遊佐町まで伸びる。また中央部の高度は64.3mを測り、砂丘だけの高度としては日本一といわれる。庄内砂丘南端の、湯野浜カントリークラブの所在する付近は、高館山地北麓の低地を、海岸から吹き上げた砂が覆った、「てんぶら砂丘」と通称される被覆砂丘で、標高約100mと、庄内砂丘で最も高い標高を有する。この、被覆砂丘を越えた海岸地域には、含塩化土類弱食塩泉を湧出し、会津東山温泉や上山温泉と並んで、奥羽三楽郷の一つと言われた湯野浜温泉がある。

遺跡は、高館山地北端の、庄内砂丘が始まるあたりに位置しており、「西谷地」という遺跡の名が示すとおり、現在は低湿地帯となっている。

2 歴史的環境

西谷地遺跡及び西ノ川遺跡の所在する下川地区には、ほかに「西田面遺跡」「五百刈遺跡」「種渡遺跡」の3遺跡があり、周辺には八幡田遺跡、畠田遺跡、中野遺跡、矢馳A・B遺跡、助作遺跡、清水新田遺跡といった古墳時代から平安時代に至る遺跡が所在する。

このほか、周辺には6世紀前半代と考えられる「変形長持形組合式石棺」の出土によって、現在のところ庄内地方唯一の古墳として知られる「菱津古墳」や、「続日本紀」和銅2年7月1日条に初出する『出羽柵』の擬定地とされてきた「大山柵跡」などが所在する。五百刈遺跡や助作遺跡、矢馳A遺跡など6世紀中頃と考えられる集落は、菱津古墳の被葬者のような豪族層を育てるほどの生産性をもったムラであったと考えられ、その生産性の豊かさが、やがて和銅元年（708）の出羽建郡、さらには和銅5年（712）の出羽建国へと進展する北辺情勢の基盤をなしているものと考えられる。さらに遺跡の南方にそびえる金峯山の北麓には、延喜式内社の田川郡三座の内の二座、遠賀神社と由豆佐賣神社が座し、建国当初の出羽国の中でも、この周辺が中心的な地域であったことを物語っている。

また時代は少し降るが、天慶・天暦年間（938~957）の創建と伝えられ、曹洞宗三大祈福場の一つに数えられる名刹・善宝寺も、高館山地北縁に山を背負う形で東面しており、西谷地遺跡・西ノ川遺跡からは目と鼻の先である。

III 西谷地遺跡

1 調査の経過

調査は、平成6年5月9日に始まり8月31日までの実質76日間行った。

遺跡全面積約32,000m²のうち、本年度県営は場整備事業（下川地区）に係る9,080m²について精査の対象とした。

5月9日、発掘機材の搬入と現場事務所の設営を行い、翌10日には関係者により鉢入式を行った。その後調査区の設定を行い、11日から重機により、北区と水路敷の粗掘を実施し、併せて面整理を開始した。12日遺構精査についてのレクチャーを実施。17日から調査区に10m×10mを1区画とするグリッド（方眼区画）を設定し、面整理を継続した。6月1日面整理を継続しつつ北区・水路敷の遺構確認・マーキングを行い、3日から水路敷の遺構精査と北2区の測図を実施した。15日から水路敷の平板測量を行い、併せて断面図等の記録をした。20日水路敷の引き渡しを行う。28日から北2区の遺構精査を実施する。7月1日北1区測図開始。13日から北1区遺構精査を行う。19日から東区に重機導入し、粗掘を開始する。28日東区にグリッド設定し、面整理及び遺構確認・マーキングを行う。8月3日ラジコンヘリにより空撮を実施した。5日北区の引き渡しを行う。東区の遺構精査及び記録等の諸作業を開始する。8月24日現地調査説明会を一般参加者54名の参加を得て行った。25日ラジコンヘリにより東区の空撮を実施した。30日東区の引き渡しを行い、併せて発掘器材の整理作業をした。31日現場事務所の撤収を行い、発掘調査を終了した。

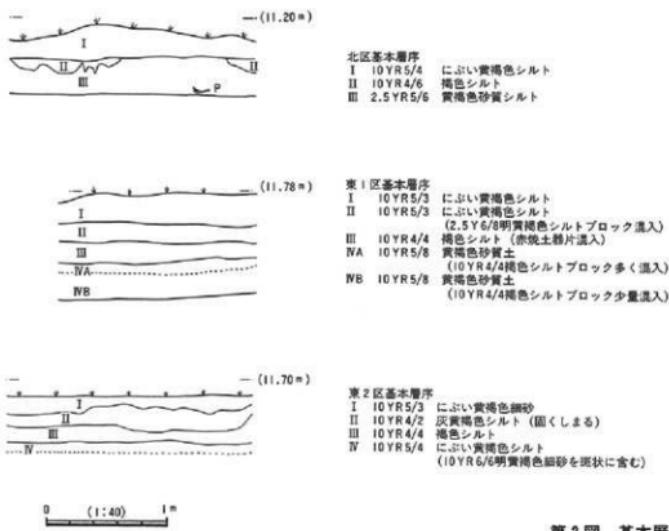
また、今回の調査では、工事の都合により、調査区を区切って引渡すことを申し合わせており、水路敷(1,190m²)は6月20日、北1区及び北2区(5,720m²)は8月5日に引渡しを行った。

2 遺跡の概観

基本層序

庄内地方の平野部の表層地質は、概ね第四紀完新世の沖積作用による未固結堆積物で占められており、西谷地遺跡の東側を北流する大山川や、その本流である赤川の流域は、泥あるいは砂が表層に位置している。西谷地遺跡周辺の表層地質は、土壤分類に拘れば泥である。これらは鉄分と結び付いて褐色を呈しているのが普通である。従ってこの周辺の基本的な土壤は褐色のシルトと言うことができる。しかしこれらの土壤は、微視的にはそれぞれ位置や深さによって、微妙に異なる条件で形成されるため、当然のことながらその粒子や土色に差異が認められる。このような差異を土色や土質によって分類した各調査区の基本層序は、第2図に示したとおりである。

なお、第I層は表土（畑の耕作土）であり、土器等の遺物は、第III層の深いところから出土する。



第2図 基本層序

遺構の分布

現在畠地となっている微高地に遺構が分布する。現在の地目が水田となっているところは、盛土がグライ化して青灰色となっており、遺構の検出がきわめて困難である。

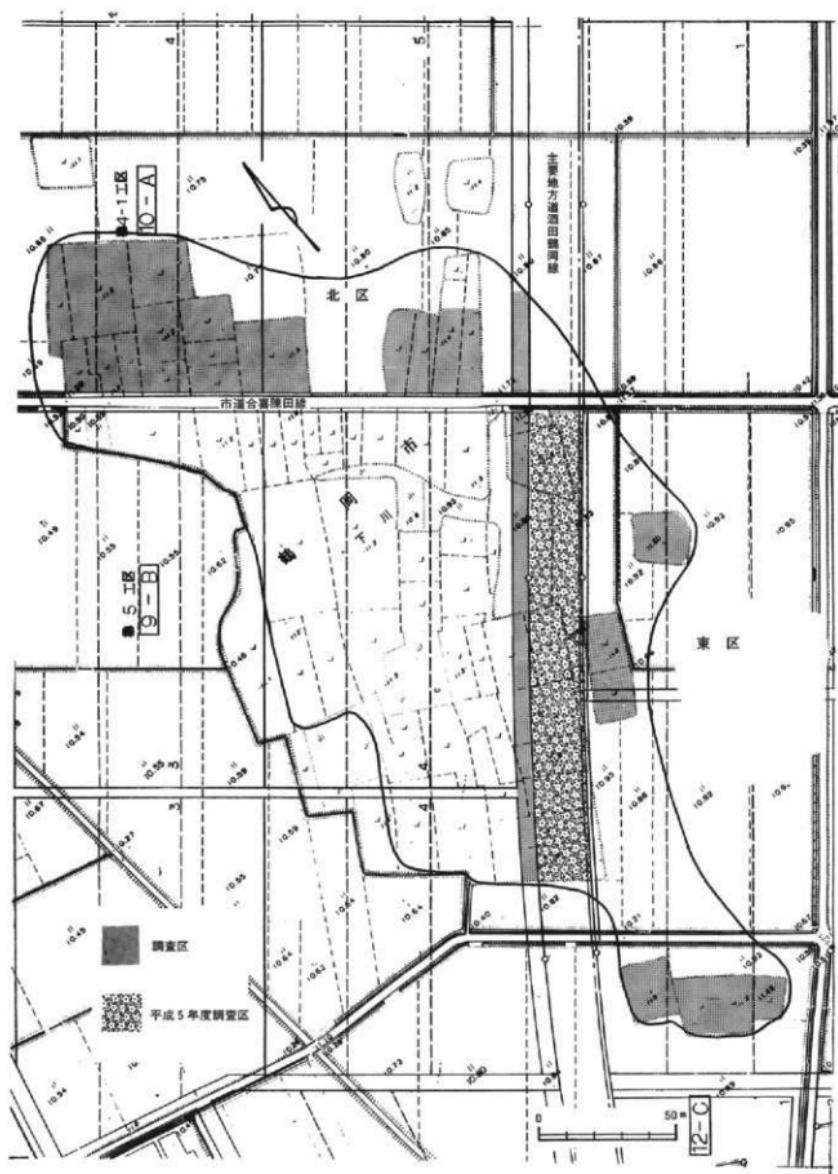
北1区では烟寄せによる搅乱が一部見られたが、概ね調査区全域にわたって遺構が分布し、掘立柱建物跡や溝跡、土壤など、古代に属するもの、歴跡など近世以降現代に属するものが同じ面で検出される。現代に属する遺構では、県道から下川の集落に上水を引いた時の、水位調節井と考えられる施設が検出された。また、平安時代の遺構が現在の畠境とほぼ一致し、古代の工作物が現在に至るまで土地利用に影響を及ぼす例も見られた。

北2区では、調査区の西側に大きく3時期の切り合いが認められる川跡が検出された。

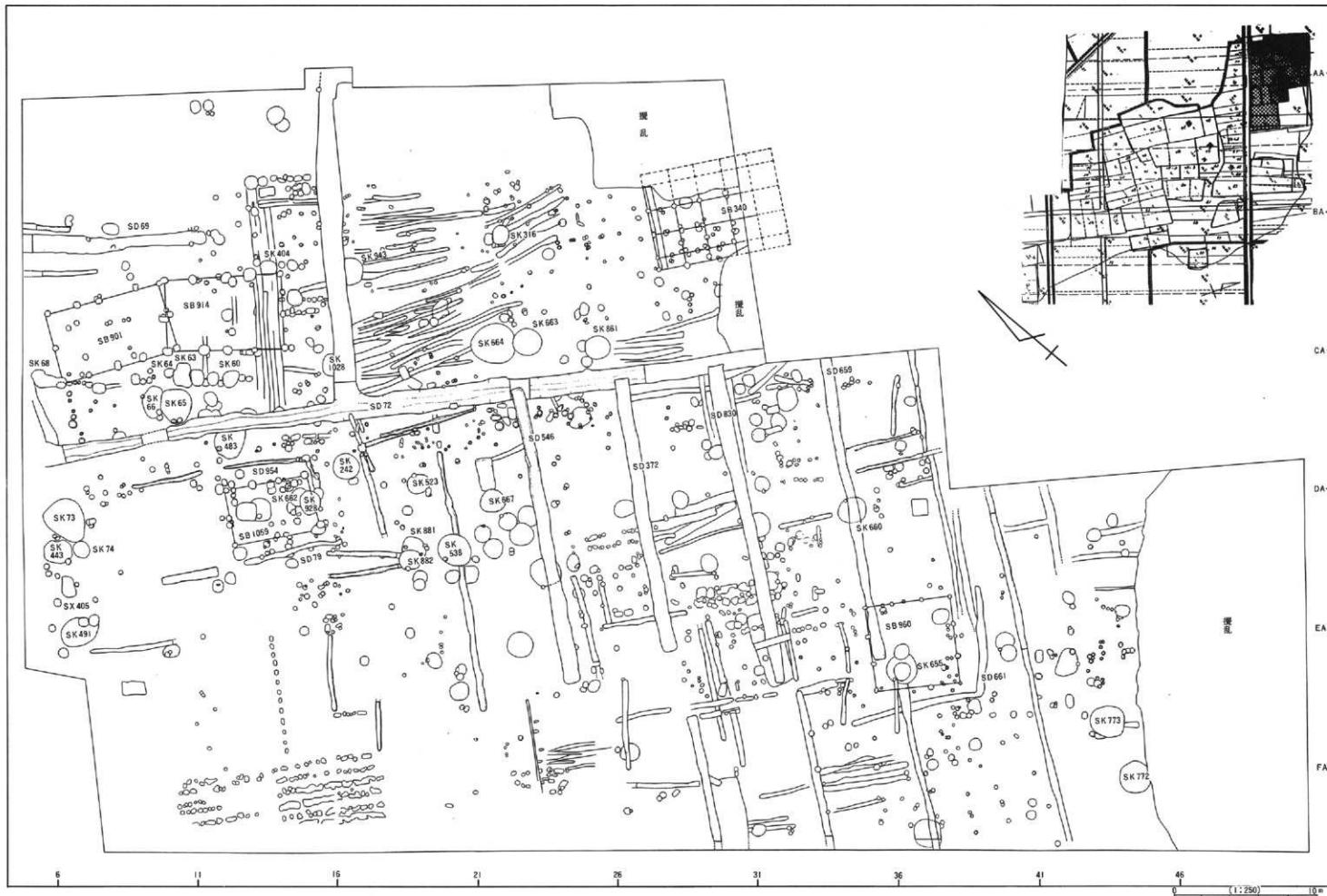
水路地区は、主要地方道酒田鶴岡線（平成5年度第1次調査地区）の西に隣接する調査区で、溝跡など、第1次調査で検出された遺構との関連がうかがわれた。

東1区、及び東2区は、周囲から孤立した畠地で、調査の結果、周囲を烟寄せによって搅乱されていることが判明した。北区と同じように古代から近世以降現代にいたる遺構が同一面を掘り込んで移しく重複している。東1区では幅3mを越える溝跡や多くの土壤などが検出されている。この地区では、ビットも多く検出されたが、建物跡を構成するには至らなかった。東2区では、井戸跡をはじめ、錯綜する溝跡や土壤、多くのビットなどが検出された。また東3区は、粗掘の結果全域に搅乱を受けていることが判明し、精査対象から除外することとした。

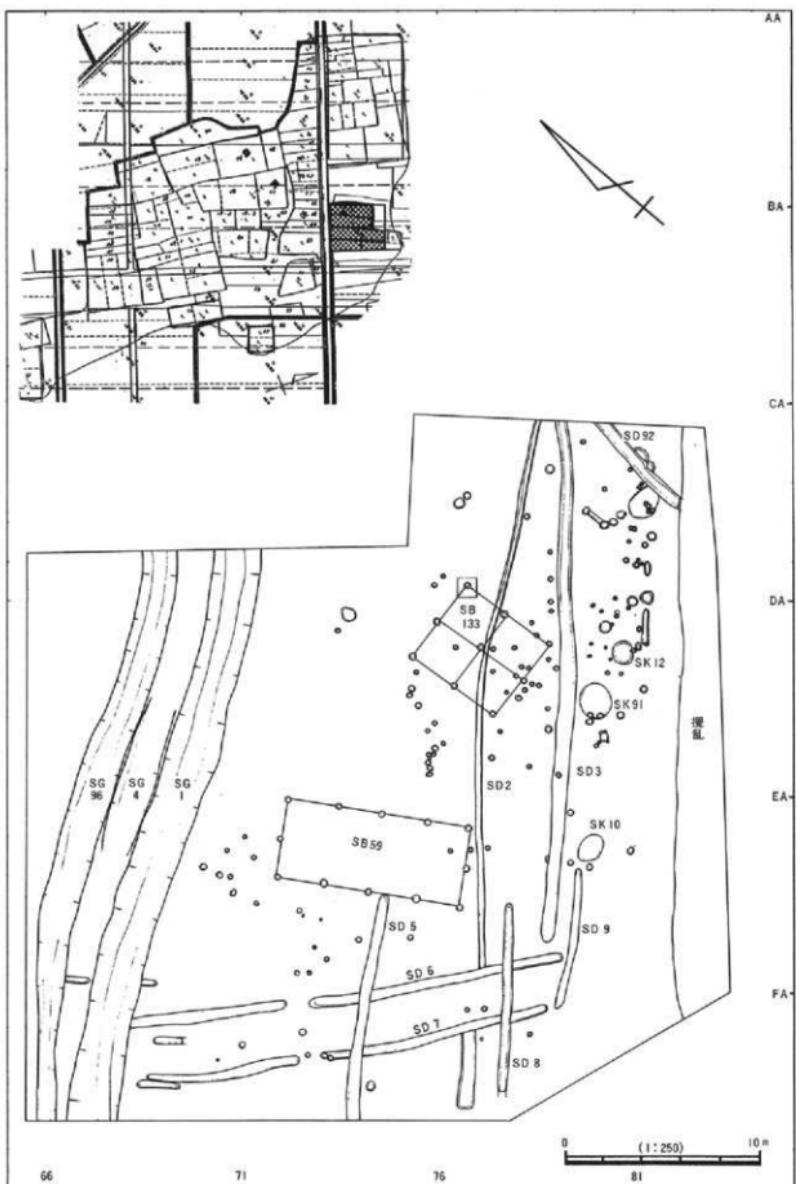
III 西谷地遺跡



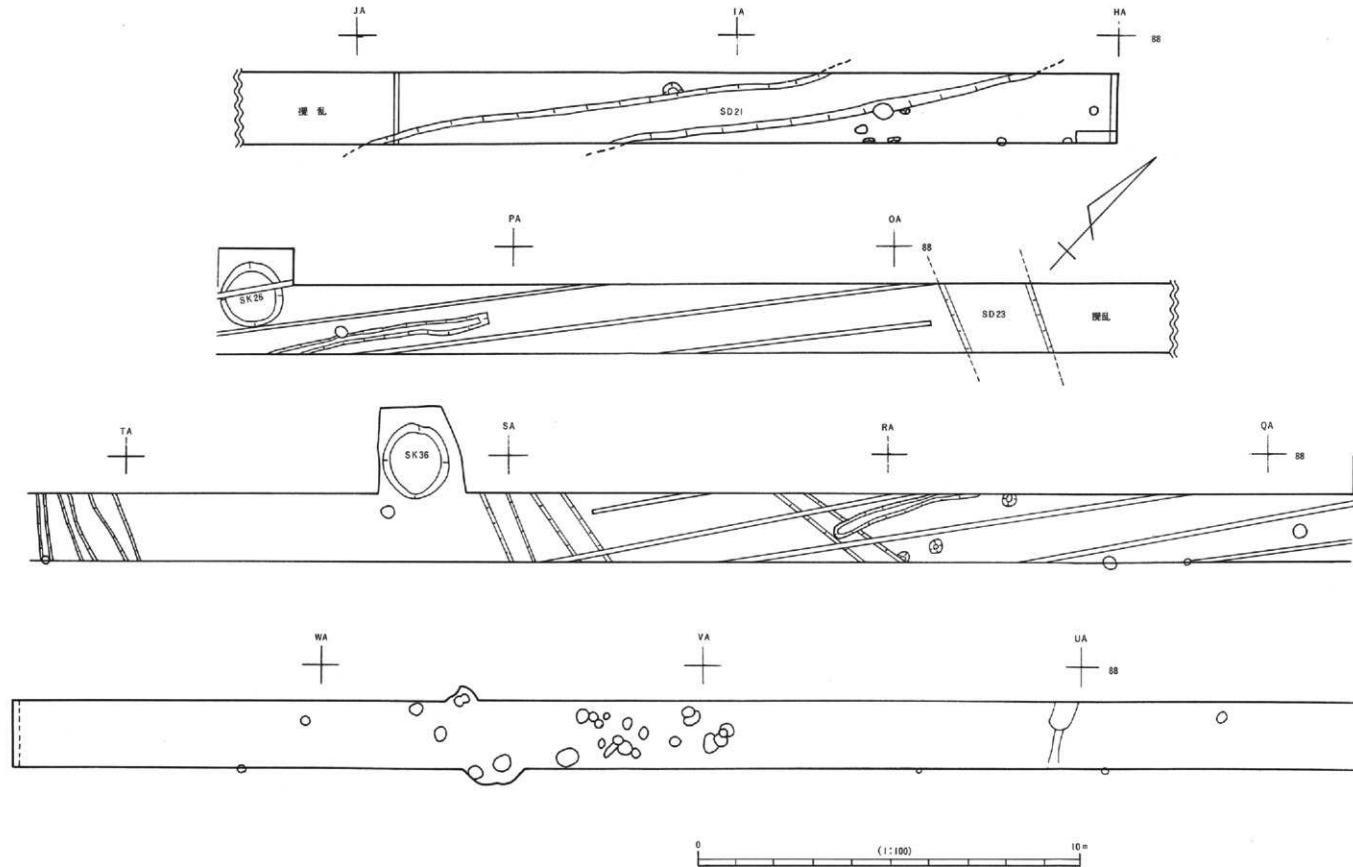
第3図 調査概要図



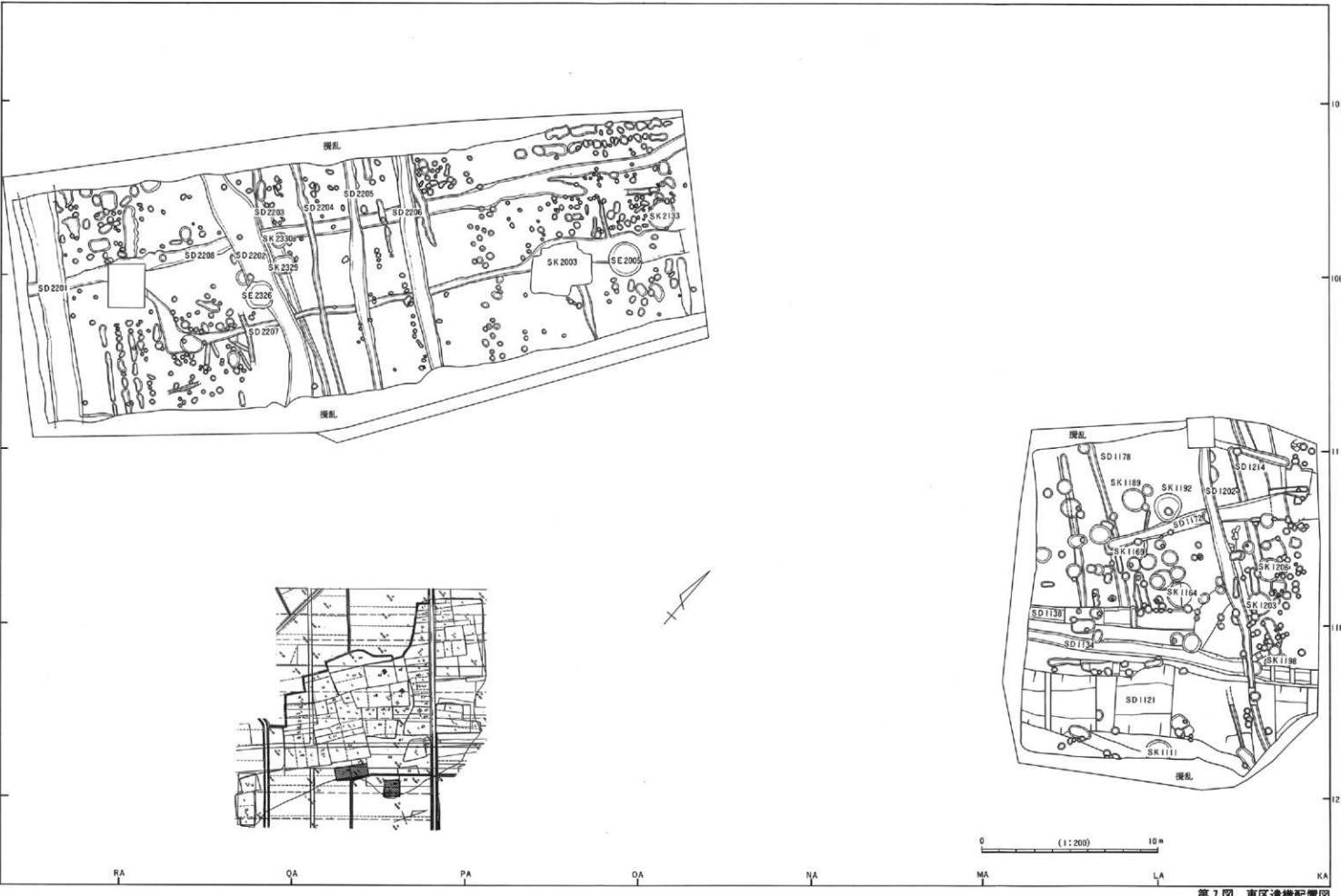
第4図 北1区遺構配置図



第5図 北2区遺構配置図



第6図 水路敷構配置図



第7図 東区遺構配置図

3 検出された遺構

今回の調査では、建物跡(7)や溝跡(87)、井戸跡(2)、河川跡(3)、土壙(43)など多数の遺構が検出された。次にその主なものについて概述する。調査用方眼地割りはN-49°50'-Eとなっているが、記述の煩雑さを避けるため、遺構配置図の上を北、下を南として記述を進める。従って東あるいは東南の表記は略方向であり、N-○°-Wの表記は、磁北からの振れという意味である。なお文中の尺換算は唐尺(0.2963m=尺)を用いたが、計測値からは必ずしも完尺とはならないので、近似値をもって換算している。

掘立柱建物跡

S B 901 (第9図)

北1区の北西隅に位置し、C B 6区に南西隅が、B C 10区に北東隅がある。桁行4間、梁間2間の東西棟で、桁行全長は北側軒面で8.5m、南側軒面で8.56mを測り、梁行全長は東妻で5.01m、西妻5.12mを測る。棟の方向はN-66°-Wを測る。掘方は径40~50cmの円形を呈し、深さは図上復元すると30cm前後となる。柱間は桁行が2.13m(7尺)、梁間が2.53m(8.5尺)を測る。この建物跡は、東の妻で後述するS B 914と棟方向を若干違えて重複しており、S B 914の廃絶後に建てられたものと考えられる。また、北側に位置するS D 69溝跡、東と南を画するS D 72溝跡とも密接な関連を持つと考えられる。

S B 914 (第9図)

北1区の北西隅、B C 10区からC A 14区にかけて位置する。梁間2間、桁行4間の東西棟で、桁行全長は北側・南側とも軒面で8.44m、梁行全長は東妻で5.25m、西妻5.12mを測り、東妻の柱間が幾分広めになっているが、S B 901とほぼ同様の規模を持つ。棟の方向はN-52°-Wを測る。柱穴は径50cm前後の円形で、深さは、図上復元すると約30cm前後と考えられる。柱間は桁行が2.11m(7尺)、梁間が両者の平均をとると2.66m(9尺)となる。前述したように西妻でS B 901と重複しており、柱穴の切り合いの観察から、S B 914の方が古いと判断された。

S B 340 (第11図)

北1区ほぼ中央北側のA E 27区からB D 30区にかけて位置する。東西棟と考えられるが、搅乱によって北側と東側が失われているので詳細は不明である。桁行3間梁間3間に相当する合計15本の柱穴跡が残っているので、それらの観察から概略次のようなことが言えよう。棟の方向はN-60°-Wを測る。柱穴は、深さ20cm前後、径35cm前後の円形を呈する。柱間は桁行が1.93m(6.5尺)、梁間は1.8m(6尺)を測るが最南列柱列のみが0.9m(3尺)と半幅になっており、この部分は、庇と考えるのが妥当と思われる。東側と北側で搅乱を受けているために建物の規模は不明であるが、残存部分から考えると、おそらくは桁行5間、梁間3間の身舎に両面庇をもつ建物と考えられる。ただ、柱穴の深さが20cmということを考えると、このような建物規模を想定するには躊躇するところもある。しかし純柱の建物であるということから、建物の強度は相対的に増すものと考えられ、このような柱で

も支障はないものと推測される。

S B 1059 (第11図)

北1区西寄りに位置し、D A 12区に北東隅がD B 15区に南東隅がある。桁行き3間、梁間2間の東西棟で、桁行全長は北側軒面で6m、南側軒面で6.2mを測り、梁行全長は東妻で4.1m、西妻で4.4mを測る。棟の方向はN-60°-Wを測る。柱穴は、径40~50cmの円形を呈し、東南隅の柱間の広がり(歪み)が見られる。柱間は桁行が2m(6.8尺)、梁間が2.1m(7尺)を測る。小ぶりな建物であるが、南北の軒下と東妻を幅30cm、深さ20cmほどの溝が取り囲んでおり、雨落ち溝とも考えられる。

S B 960 (第14図)

北1区東寄り、D E 35区からE C 38区にかけて位置する。ほぼ正方形を呈する3間×3間の建物跡で南北軸はN-23°-Eを測る。柱穴は径30cm前後の円形を呈し、柱間は南北列が2.06m、東西列が2.03mと若干の違いを示し、僅かに南北に伸びが見られるが、尺換算すると、いずれも7尺の等間である。S B 960は、東・南側と西側によって囲まれており、東・南側を限るカギ状の溝は、幅約50cm、深さ約20cmを測り、西側の溝は深さは同じ20cm前後であるが、幅はこれよりやや狭く、約30cmを測る。溝は囲まれた7尺等間の正方形の建物跡ということから、倉庫等の用途が可能性として挙げられる。

S B 133 (第13図)

北2区北東寄り、D B 77区を中心位置する2間×2間の総柱の建物で、この度検出された建物跡の中では唯一方向を異にし、南北軸がN-14°-Wと、ほぼ磁北に近い方向を呈する。平面形から宝形造りの屋根構造が想起されることから、いずれの柱通りをも軒面と表現する。柱通りの全長は、東側軒面と西側軒面が、ともに5.22mを測り、北側軒面と南側軒面も、ともに4.62mを測る。柱穴は径30cm前後、深さ30cm前後の円形を呈し、柱間は東西方向で2.61m(8.8尺)、南北方向で2.31m(7.8尺)を測る。2間×2間の総柱の建物跡ということから、倉庫跡と考えられる。

S B 59 (第13図)

北2区ほぼ中央のE B 72区からE C 76区に位置する。桁行4間、梁間2間の東西棟で、切妻造りの屋根を持つであろうことが推測される。桁行全長は北側軒面・南側軒面とともに9.48m、梁行全長は東妻・西妻とともに3.24mを測る。棟の方向はN-41°-Wを測る。柱穴は、径20~30cmを呈し、深さ20~30cmを測る。柱間は、桁行が2.37m(8尺)、梁間が1.62m(5.5尺)を測る。なお、S B 133との主軸方向の相違は、そのまま時期の相違を示すものであろうと考えられる。

土壤

S K 12 (第14図)

北2区のD B 80区に位置する。長径1.2m、短径1mの略円形を呈し、覆土は灰褐色シルト(7.5Y R 4/2)のブロックとカーボンの細粒が混入する褐色シルト(10Y R 4/4)1層で覆

土中に赤焼土器や須恵器の破片を含む。

S K73 (第15図)

北1区西端のDA5区からDA7区に位置する。長径3.3m、短径2.8mの不整三角形を呈し、覆土は1層で、覆土中から須恵器蓋・坏・椀・皿・赤焼土器坏・皿などが出土している。

S K74 (第15図)

北1区西端のDC6区からDC7区に位置する。長径1.3m、短径1.1mの略円形を呈し、覆土は3層からなる。覆土中から須恵器坏・赤焼土器坏・甕が出土している。

S K861 (第15図)

北1区中央北寄りのBE25区からCA25区に位置する。長径1.8m、短径1.7mの略円形を呈し、覆土は7層からなる。覆土中から須恵器の高台坏・甕などが出土している。

S K65 (第16図)

北1区北西寄りのBC11区からCC11区に位置する。長径1.1m、短径0.9mの楕円形を呈し、覆土は3層からなる。覆土中から須恵器蓋・坏・赤焼土器坏・皿などが出土している。

S K404 (第16図)

北1区の北西隅、BC13区に位置する。長径1.2m、短径1.08mの隅丸方形を呈し、覆土は8層からなる。覆土中よりヘラ切り無調整の須恵器坏が出土しており、大略8世紀後半代と考えられる。SK404はSB914の北側軒面と重複しているが、SB914は、SD69と密接な関係をもつものと思われ、SD69が9世紀代を通じてのものと考えられることから、SB914もその年代の中に納まると考えられ、従って両者の遺物の観察によれば、SK404の埋没後にSB914が営まれたものと考えて差し支えないと考えられる。

S K443 (第16図)

北1区西端のDC5区からDC6区に位置する。長径2.02m、短径1.58mの楕円形を呈し、覆土は8層からなる。覆土中から須恵器蓋・坏・椀・赤焼土器皿が出土している。

S K538 (第16図)

北1区ほぼ中央部のDC19区からDC20区に位置する。長径2.6m、短径2.16mの楕円形を呈し、覆土は略3層からなる。覆土中から赤焼土器坏が出土している。

S K1111 (第16図)

東1区のKE1119区からLA1119区に位置する。径1.5mほどの円形を呈し、東側は搅乱を受ける。覆土は4層からなり、須恵器蓋が1点出土している。

S K2075 (第17図)

NE106区に位置する。長径75cm、短径40cmの不整楕円形で、深さ約15cmで底面は平坦である。土師器片が出土している。

S K2079 (第17図)

NE106区に位置する。径40cmのほぼ円形で、深さは約10cmである。須恵器高台付坏が出土している。

S K 2080 (第17図)

N E 106区に位置する。長径約110cm、短径40cmの不整橢円形で、深さは約40cmである。赤焼土器の甕が出土している。

S K 2329 (第17図)

P E 105区に位置する。S D 2203を切る形となっている。遺物は出土しておらず、覆土の状況などから、ごく新しい時代のものと考えられる。S K 2369・S K 2387・S K 2394なども類似の様相を呈する。

S K 2330 (第17図)

P E 105区に位置する。径約90cmの不整円形で、深さ70cmを測る。遺物は出土していない。

S K 2300 (第17図)

Q B 109区に位置する。長径80cm、短径65cmの不整橢円形で、深さ約15cmで底面は平坦である。遺物は出土しておらず、覆土の状況などから、ごく新しい時代のものと考えられる。S D 2423・S K 2419なども類似の様相を呈する。

井戸跡

S E 2005 (第17図)

東2区N E 105区とO A 105区に位置する。ほぼ円形で径約2mと考えられる。深さは約1.8mである。

当初、土壤として精査に入ったが、掘り方の傾斜が急であること、最下層から湧水したことなどから、井戸枠などの施設は認められないものの、井戸跡と認定したものである。遺物は検出されていない。

S E 2326 (第18図)

東2区Q A 105区に位置する。掘り方は不整円形で径約160cm、深さは180cmほどである。

井戸枠は一辺約68cmの正方形で、側板は幅6~15cm、長さ30~58cm、厚さ0.5~1.5cmの板を一辺に10~15枚、縦位に二重三重に配列しており、それを内側から横桟で押える構造となっている。横桟は、長さ54cm(北面・南面)、64cm(西面・東面)、幅・厚さ約5cm前後の角材で、東西の材の両端にほぞ穴を穿ち、南北の材の両端を凸形に加工し、はめ込む形となっている。その四隅に溝を切った柱を立て(遺存していたのは、北東と北西の2本)、横板を段々に落とし込んだと考えられる。井戸枠内に倒れ込んだ状態の材が多数検出された(第18図)ものが、それらの横板とも考えられるが、原位置をとどめていないため詳細は不明である。

井戸枠のほぼ中央下部に二重の曲物を用いた井戸眼が配置されていた。内側の曲物は幅41cm、厚さ6~7mmの柱目板の内側に1cm前後の間隔で彫引を入れ、両端約8cmを重ね合わせて、内径約44cmに丸めてある。重ね目は幅約1cmの樹皮で縫い合わされている。外側にはほぼ同様に加工した曲物が取り巻く形で設置され、全体の外径は47cmとなっている。

この二重の曲物は、最下部から約1cmのところを木釘（径5mm、長さ1.7cm）十数本によつて固定されていた。全体に遺存状態は良好であった。

断面の観察では、掘り方と井戸枠内部の埋土とに明瞭な境界線を引くことができることから、上部まで井戸枠が組まれていたと考えられるが、廃棄の際に上部を取り去ったものと推定される。

溝跡

S D72 (第8図)

北1区のC E 5区からC A 30区まで、調査区の北寄りを東西に貫く溝で、両端は調査区の外に抜けているため、長さは不明である。途中C C 16区で北に直角に伸びる枝溝を持つ。枝溝も調査区の外に抜けており、長さは不明である。北1区で最も幅広く深い溝で、検出状況から相当大きな規模を持つと考えられる。検出面から推定すると、現在水田となっている区域でもこの溝は保存されていると考えられる。断面形は逆台形状を呈し、壁は急峻である。方向は、ほぼN-56°-Wを測る。覆土は4~5層からなるが、サンプリング地点によって土質は若干異なる。黄褐色ないし灰黄褐色のシルトで構成される第1層ないし第2層から須恵器や赤焼土器の破片が出土している。そのうち、ヘラ切り無調整の赤焼土器坏は、その年代を9世紀中葉に比定しうるもので、他の須恵器も同様の年代を示す。これらの出土遺物はこの溝の埋没年代を示唆する貴重な資料であると考えられる。幅は1.5m前後であるが、枝溝から西が狭くなり、西端で約1mを測る。深さは西端で約65cm、東端で約80cmを測り、西から東に下り勾配となっている。勾配はおよそ3/1,000程度である。この溝は、年代的に、前述した掘立柱建物跡群と並行して存在した可能性が大きく、これら建物群を何らかの形で区画する機能をもっていたものと考えられることができよう。

S D69 (第8・21図)

北1区北西隅にある。S D72溝あとに東と南を画されたS B901・914掘立柱建物跡の北側に、ほぼこれらと平行に走る溝跡で、これらの建物跡の北を画する施設ではないかと考えられる。B B 11区から西に向かい、調査区の西に抜けているため、長さは不明である。B B 7区のあたりで微妙に向きを変える。方向はB B 7以東ではN-56°-Wを測り、以西ではN-49°-Wを測る。幅は、B B 7以東では約80cm、以西では130cmを測る。深さもB B 7区周辺を境にして変化し、以東では5~10cm程度であるのに対し、以西では20cmを測る。覆土はカーボン粒を多く含む黒褐色を呈するシルトの單一層である。

S D69からは、第21図のように大量の遺物が出土した。遺物の出土状況を見ると、前述のB B 7区周辺に全く分布しない空間が認められ、ここを境にしてS D69溝跡の使われ方が異なっているようにも考えられる。ただ出土遺物を比較すると、両者には、目立った時期差は認められず、もしこれらの相違が作られ、使われた時期の相違に拠っているとしても、その時期差はきわめて短いものと考えられる。出土した遺物を見ると、赤焼土器が最も多く、しかも坏がその殆どを占める。赤焼土器壺や須恵器壺・坏等があるが、その数量

は少ない。他には、鍋など底の丸い煮沸形態の土器の支脚として使われたと考えられる「五徳形」と仮称している土製品もある。出土土器を概観してまず気付くのは、器の内外面に油煙の付着した坏が多いことである。灯芯の痕跡が明瞭についており、灯明皿として使用されたものが多くあったことが観察された。これらの土器は、使用され、消却されてから S D69に廃棄されたものと考えられることから、S D69溝跡は壊れた土器の廃棄場所として用いられていたと推察される。

S D21 (第20図)

水路敷調査区のトレンチ北端に位置する溝で、方向はN-42°-Eを測る。断面形は概ね逆台形を呈し、壁の立ち上がりは丸みを帯び、緩やかである。幅は1.2m、深さは54cmを測る。覆土は、大別すると上層の暗褐色土、中層の灰褐色シルト、最下層の黄褐色粘質土の3種からなるが、それぞれは、カーボン粒子の含み具合や黄褐色土ブロックの混入量、粘度などによって細別され、都合16層が識別された。堆積状況から、S D21がその役目を終えて廃棄された後、自然に埋没していったことが考えられる。第3層から赤焼土器の破片が出土している。

S D23 (第20図)

水路敷調査区のほぼ中央部に位置する溝で、方向はN-60°-Wを測る。幅は約2.3m、深さは80cmを測る。覆土は29層を識別し得たが、大まかに5回ほどの使用が認められる。即ち幅2.3m、深さ約60cm程度の溝がまず使用され、廃棄されて埋没した後、南寄りに幅約1.6m、深さ約80cmの溝が設けられ、これが埋没した後、ほぼ中央部に幅約70cm、深さ約30cmの溝が切られ、その後幅1.9m、深さ20cmの浅く広い溝が設けられ、これが溝らしい時に幅が1.3mに縮小されたものと推測される。S D23溝跡の東延長上に、1次調査で検出されたS D28溝跡があり、規模の共通性などから同じものと考えられる。調査者によればこの溝は東から西に流れていたという。

S D1121 (第22図)

東1区の東端、LD118区からKA117区にのびる溝で、南北とも調査区の外に抜けてるので長さは不明である。また底面が若干蛇行しているように見受けられることから、方向も概ね40度前後東に振れていることが観察される。幅は3m内外、広いところでは4mを越える。深さは概ね1mを測るが、北から南にわずかに下り勾配となっている。勾配は8/1,000程度である。覆土は最大で24層を識別し得たが、大まかに見ると、大きな溝が徐々に埋まって行き、後に西寄りに小さな流路が再度設けられたものと考えられる。覆土の最下層に砂質土が観察されること、僅かに下り勾配となっていること、本体の埋没後に再度小さな溝が切られて再利用が図られていることなどを考慮すると、S D1121溝跡はある程度の量の水が當時流れていた、水路という用途を想起することも可能と思われる。覆土中から須恵器片や赤焼土器が出土している。幅だけに限って言えば、今回の調査で最大の溝である。

S D1214 (第22図)

東1区の北西寄りに位置する。長さ約7.5mの溝で、幅は西寄りに狭く、東寄りに広くなっている。狭いところで40cm、広いところで60cmを測る。中央部をSD1172溝跡に切られ、東端をSK1206土壙などに切られている。また西端でSD1212溝跡を切っている。深さは約25cmを測り、底が丸みを帯びて立ち上がる。覆土は単一層で、褐色シルトに灰褐色シルトのブロックが混入し、カーボンの細粒が混じっている。覆土中から赤焼土器壺と須恵器鉢が出土している。いずれも9世紀代前半の所産と考えられる。

その他の遺構

SG1・4・96川跡（第19図）

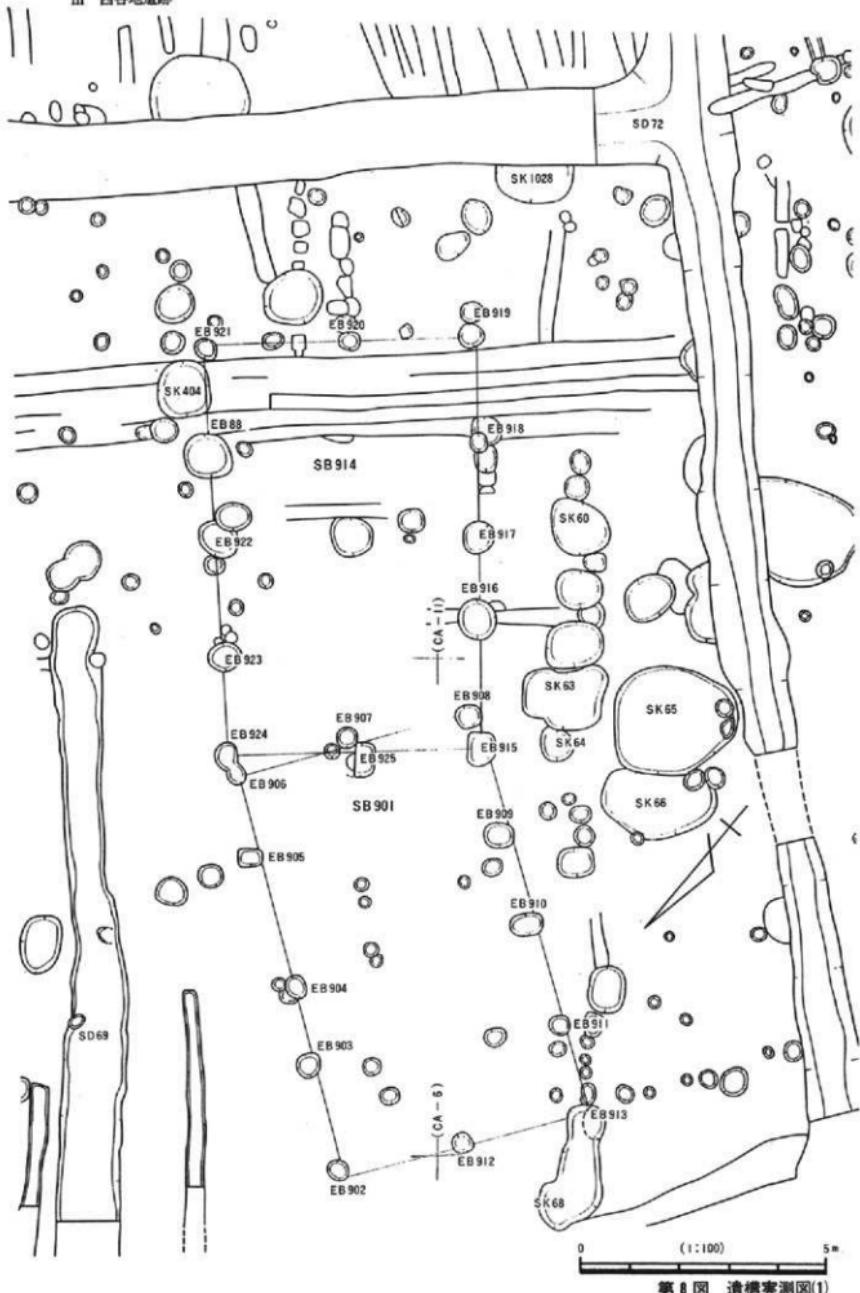
北2区の西端を南北に貫いて位置する。両端は調査区の外に抜けており、長さは不明である。方向は、概ねN-46°-Eを測る。当初大きな1本の川跡と考えていたが、調査が進むにつれて様相が変わり、断面の観察によって、3本の川であることが判明した。

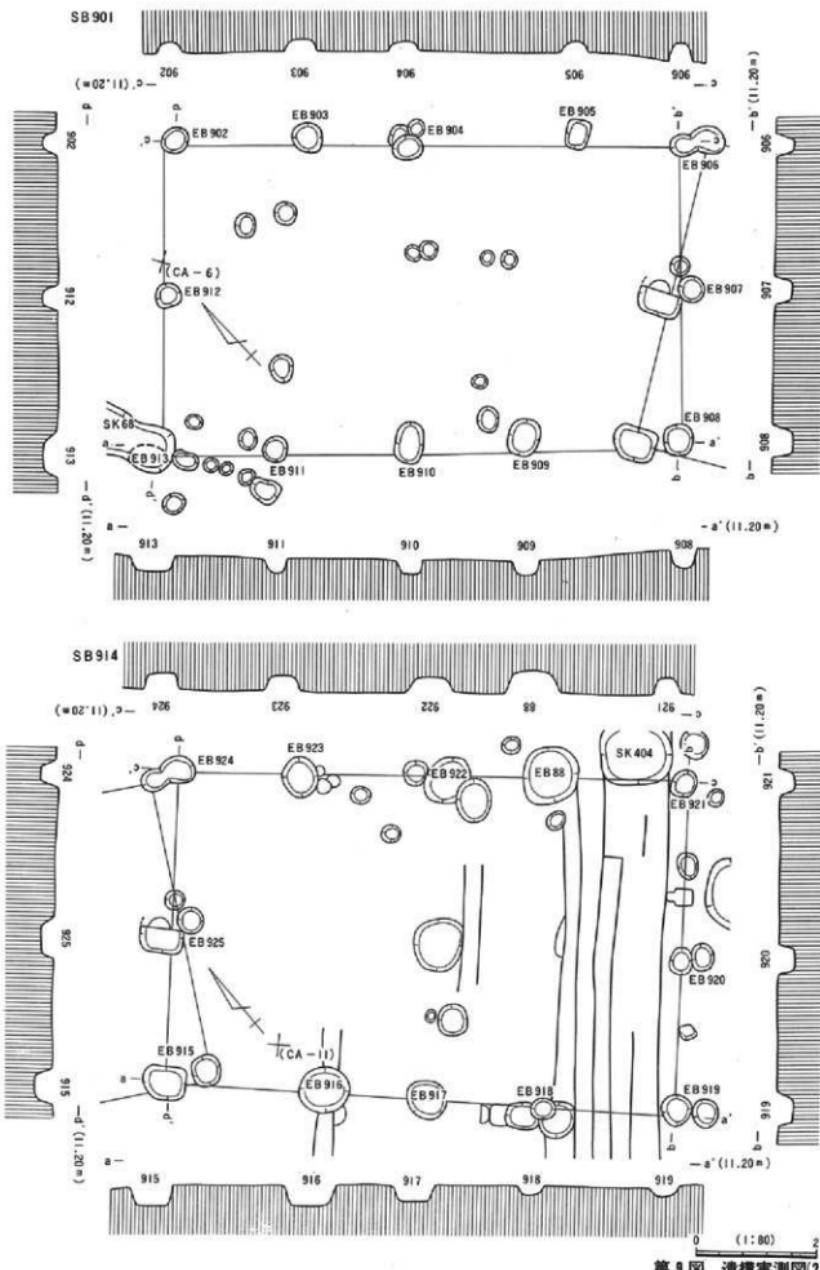
SG96は西端に位置し、覆土の観察から一旦埋没してから再び用いられたと考えられる。SG4は中央に位置し、SG96を切っている。断面観察から3回にわたる重なりが認められる。鉄鎌や須恵器片が出土している。SG1は東端に位置し、SG4を切っている。底面に、より深く狭い落ち込みが見られることから、これもあるいは2回にわたる重なりかとも思われる。北から南に下り勾配となっており、概ね8/1,000程度の勾配が認められるところから、これらの川は南流していたものと考えられる。これらの観察から、SG96からSG4へと、そしてSG1へと、徐々に流路が変わっていたことが考えられる。

SX405（第22図）

北1区DE6区に位置する。長径60cm、短径50cm楕円形を呈する。深さは約30cmを測り、底面は平らである。この遺構の特異なことは、掘方の内側に桶が密着していることである。観察したところでは、桶を据えるために掘方を設けたように思える。桶は上半が腐食して失われているが、据えられたときは、おそらくは上端が地表にまで達するか、或いは上端が地上に出ていたような状況だったと考えられる。底板は3枚矧ぎであったことが観察された。杉の柾目を用いたもので、ごく普通の桶と見受けられた。大きな桶であれば水などの暫時的貯蔵といった用途が想起されるが、この大きさではそのような用途は考えにくく、また調査区内に類例は確認できなかった。近くに建物跡などもなく、用途を類推する事ができなかった。また遺物の出土がなく、年代を推定することもできなかった。

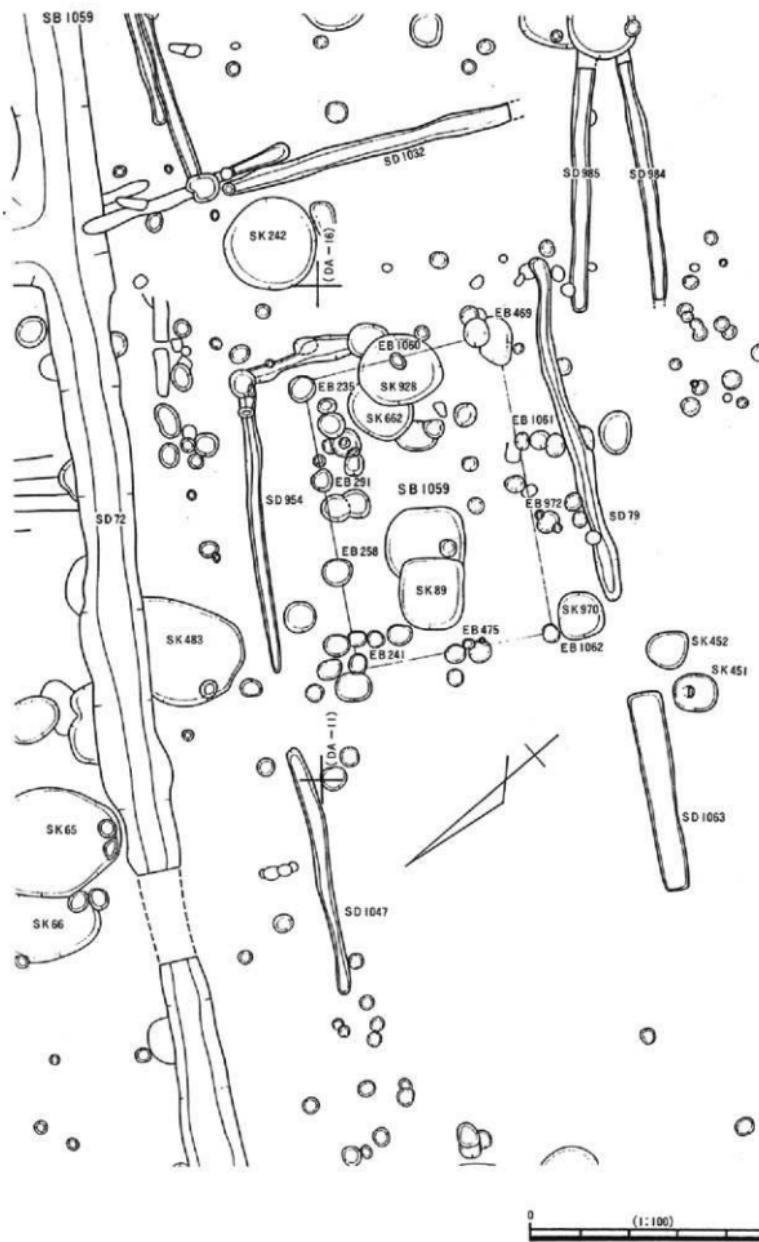
III 西谷地遺跡



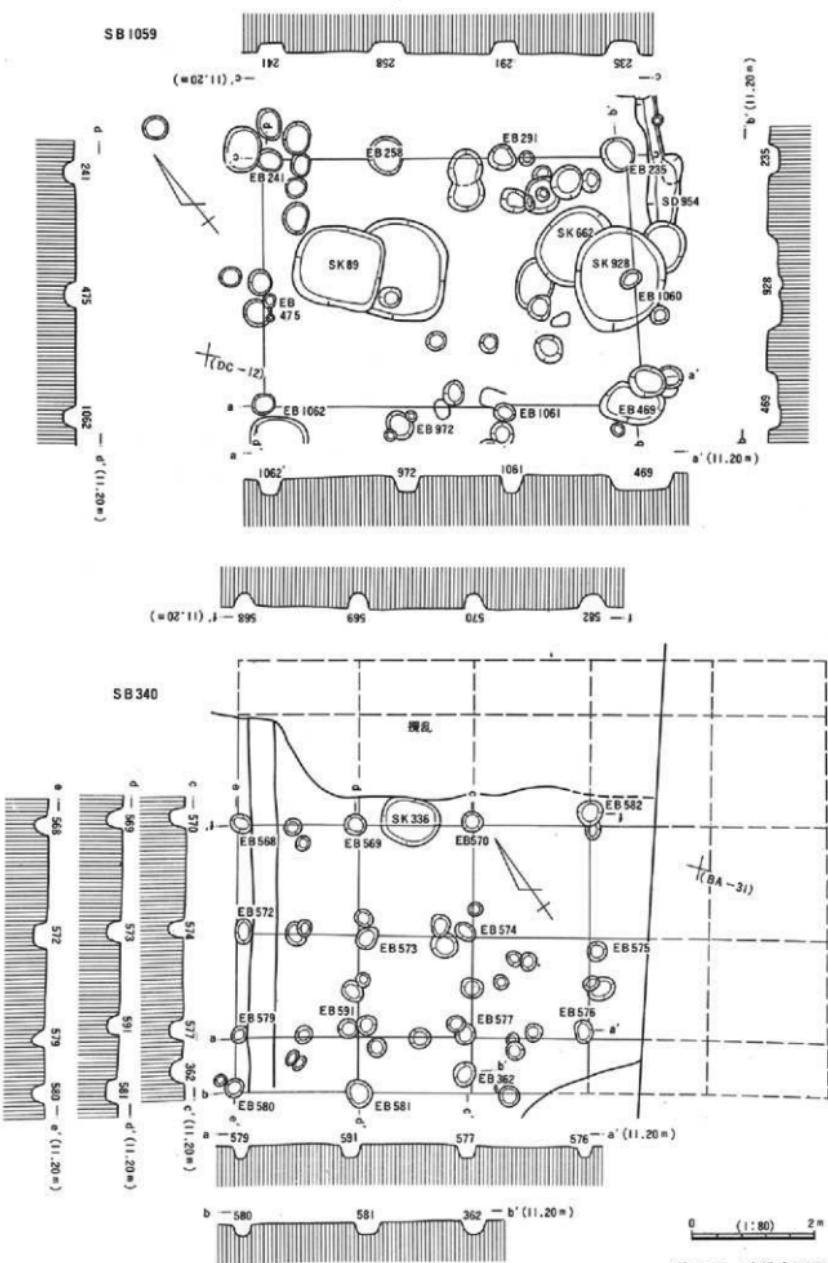


第8図 造構実測図(2)

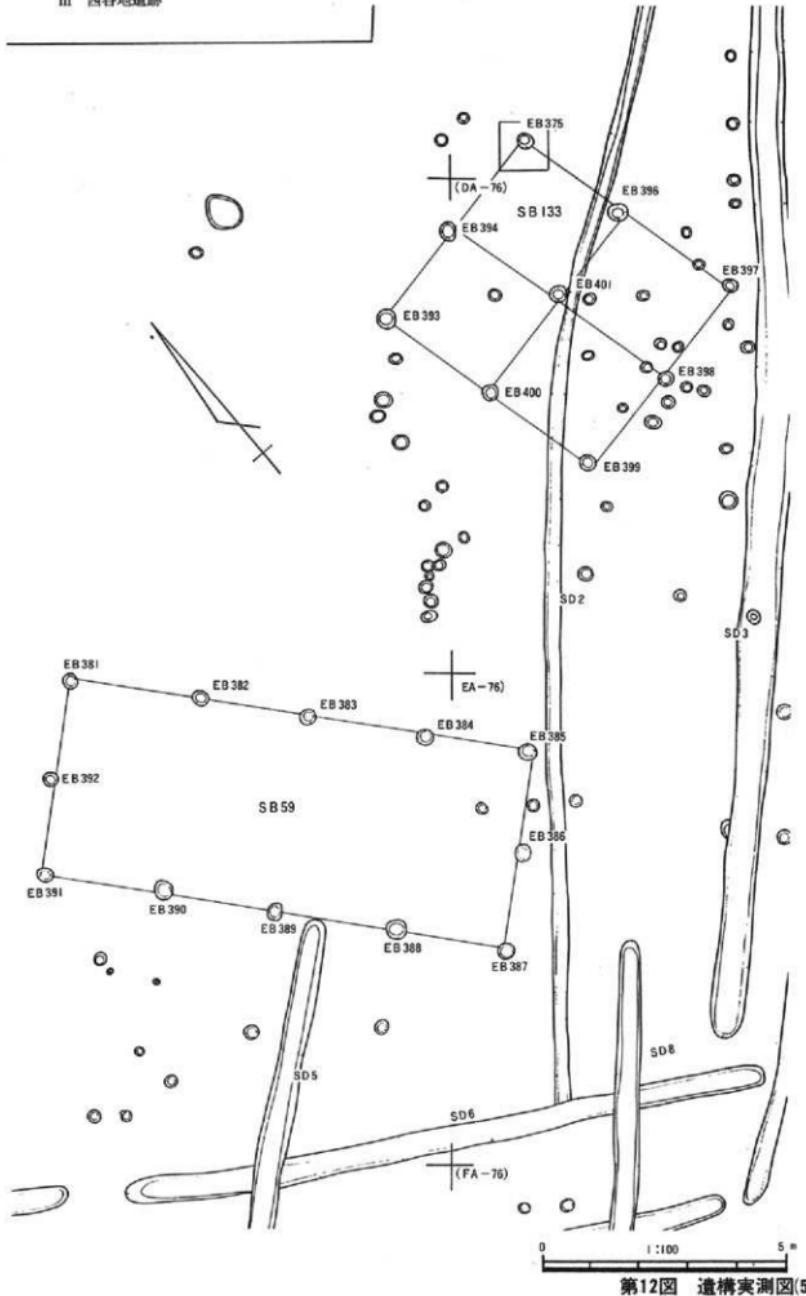
III 西谷地遺跡



第10図 造構実測図(3)

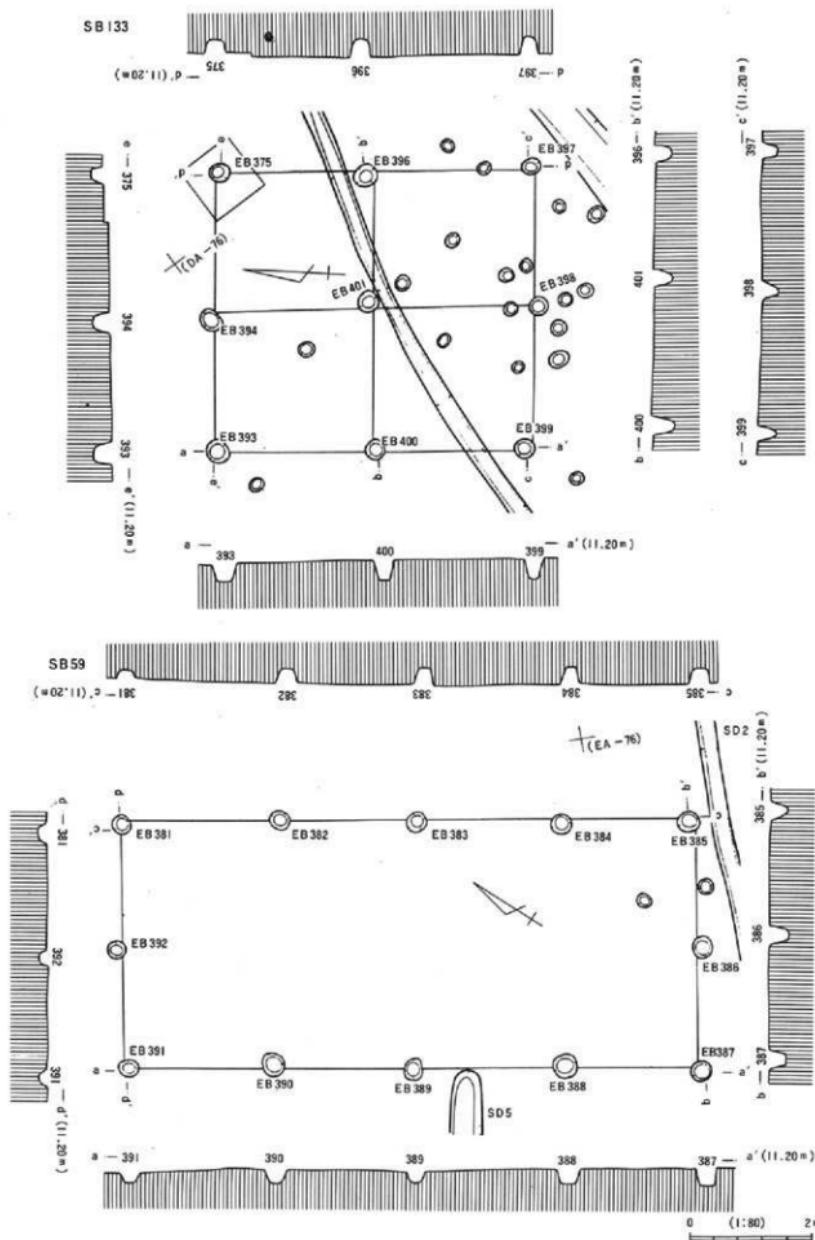


第11回 遺構実測図(4)



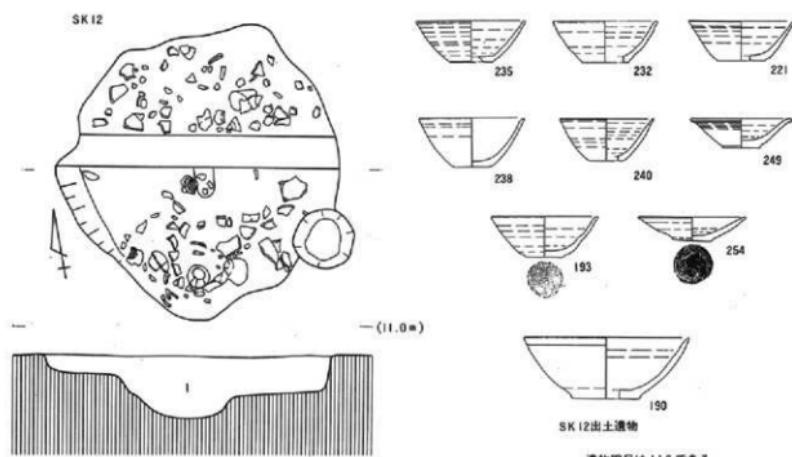
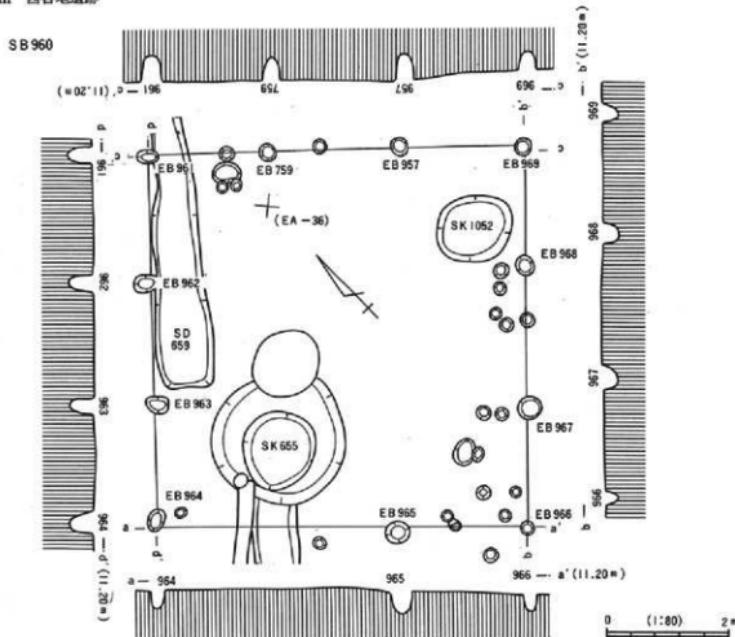
第12図 遺構実測図(5)

III 西谷地遺跡



第13図 造構実測図(6)

三 西谷地遺跡



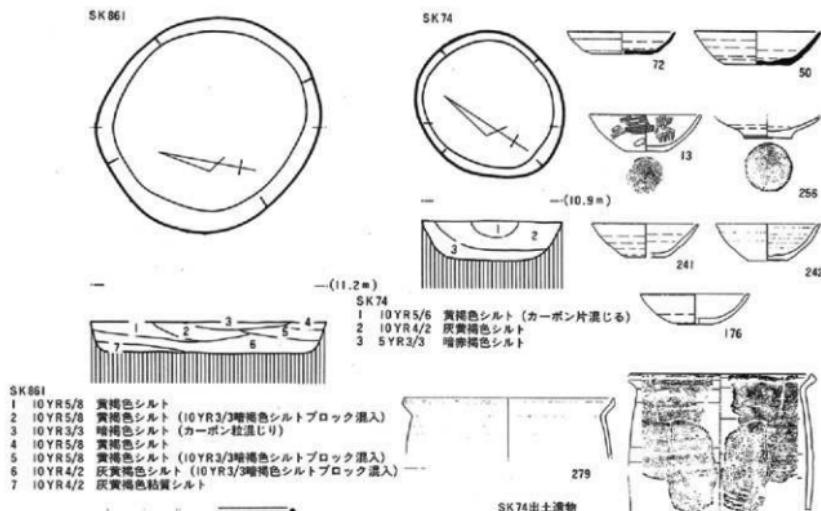
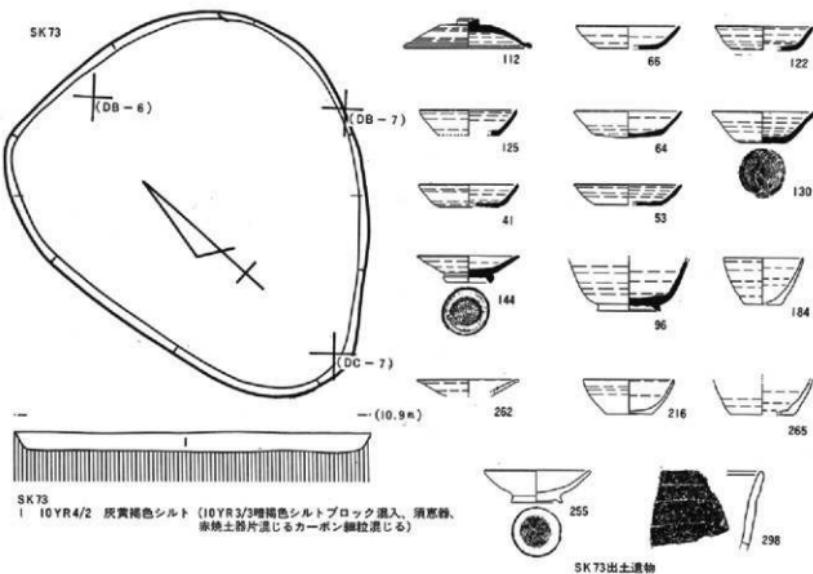
SK12
I 7.5YR4/1 淡灰色シルト（赤燒土器片、カーボン粒多く混じる）

遺物割合は 1:6 である

0 (1:40) 1 =

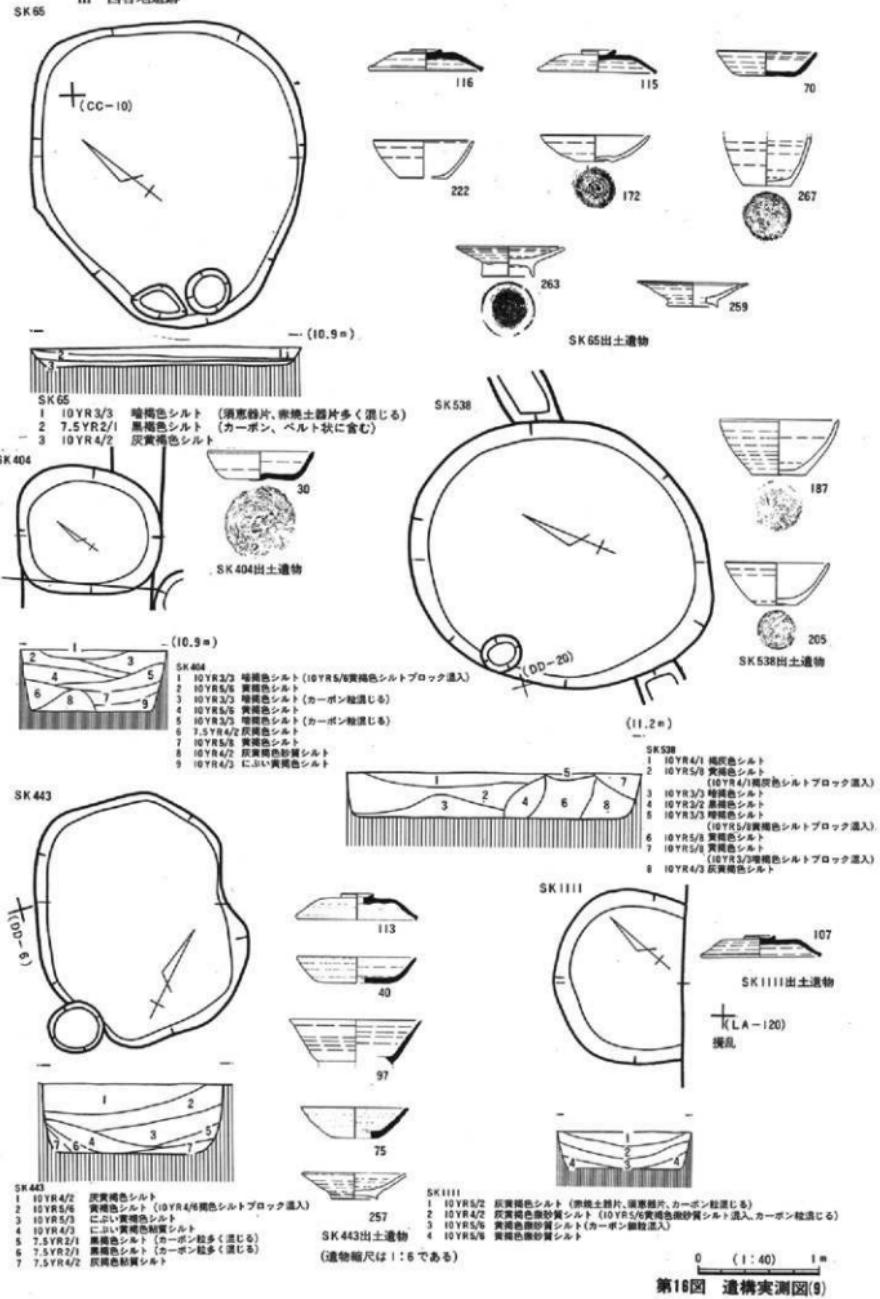
第14図 遺構実測図(7)

III 西谷地遺跡



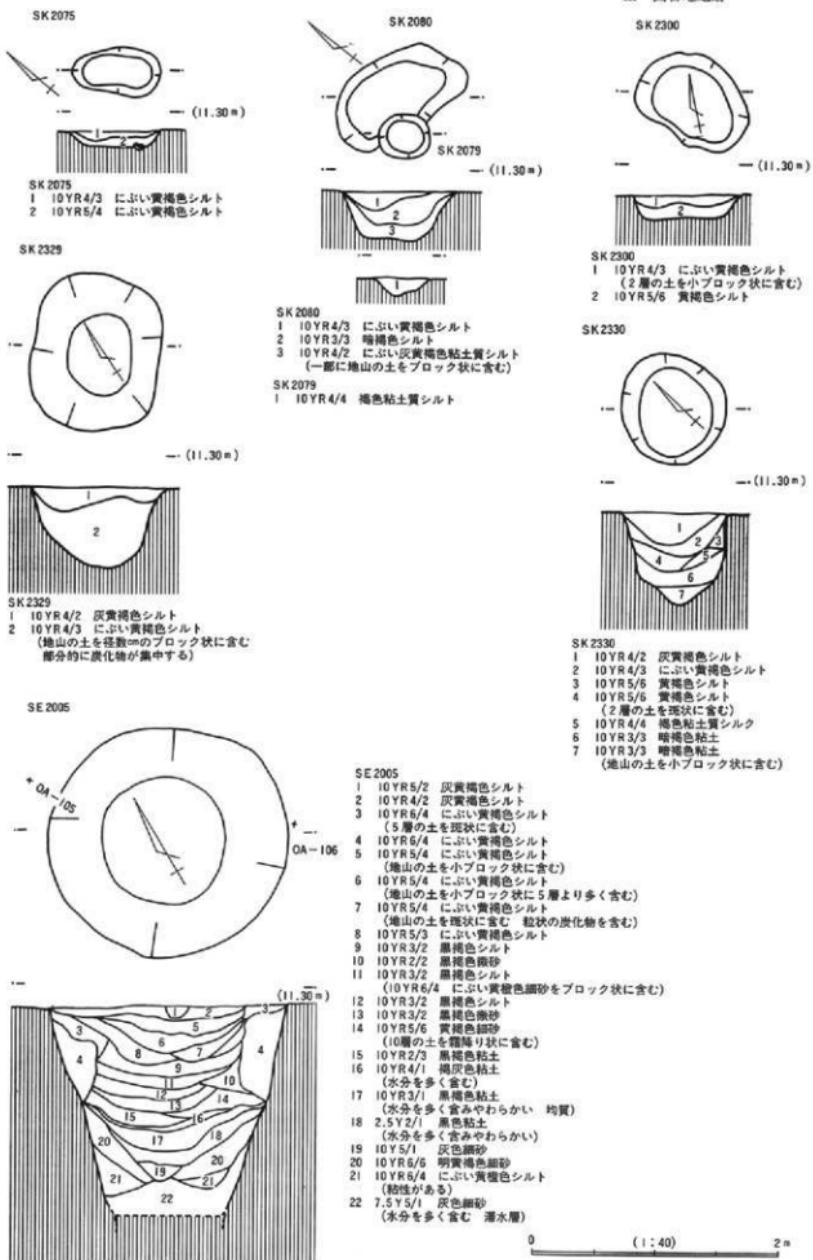
第15図 遺構実測図(8)

III 西谷地遺跡



第16図 遺構実測図(9)

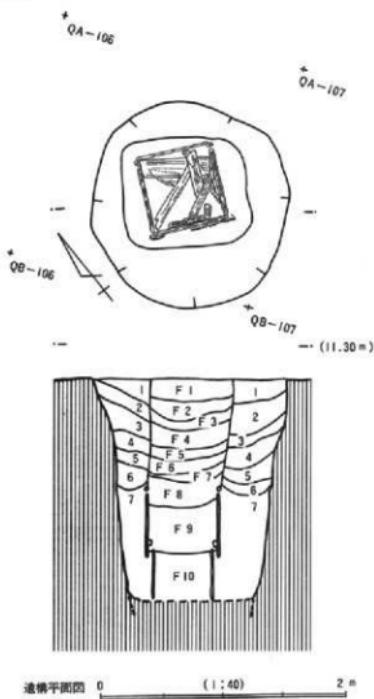
III 西谷地遺跡



第17図 造構実測図(10)

III 西谷地遺跡

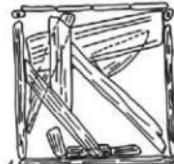
SE 2326



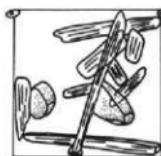
遺構平面図 0 (1:40) 2m
遺構断面図 北面

SE 2326

- 1 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト
- 2 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト
- 3 10YR 5/6 黄褐色細シルト
- 4 10YR 4/6 黄褐色細粘土質シルト
- 5 10YR 5/2 黄褐色細粘土質シルト
- 6 10YR 5/2 黄褐色細粘土質シルト
(7層の土と形状に含む)
- 7 10YR 6/6 明費褐色細砂
- F 1 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト
(固くしまる)
- F 2 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト
(固くしまる)
- F 3 10YR 4/4 棕色シルト
- F 4 10YR 3/3 塗褐色シルト
- F 5 10YR 3/3 塗褐色シルト
(粒状の炭化物を少量含む)
- F 6 10YR 3/2 黑褐色粘土質シルト
- F 7 10YR 3/1 黑褐色粘土質シルト
(8層の土を少量ブロック状に含む)
- F 8 5 GY 4/1 オリーブ灰褐色
- F 9 5 GY 2/1 オリーブ黑粘土
- F 10 10 GY 2/1 緑灰色細砂



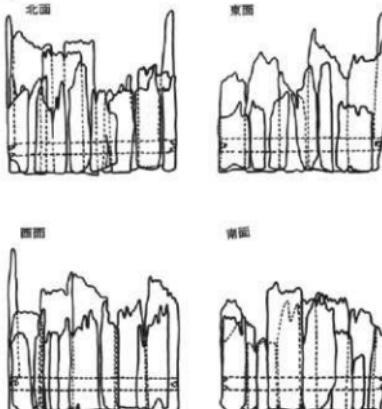
SE 2326 井戸枠上面検出状況図



SE 2326 井戸枠内遺物検出状況図



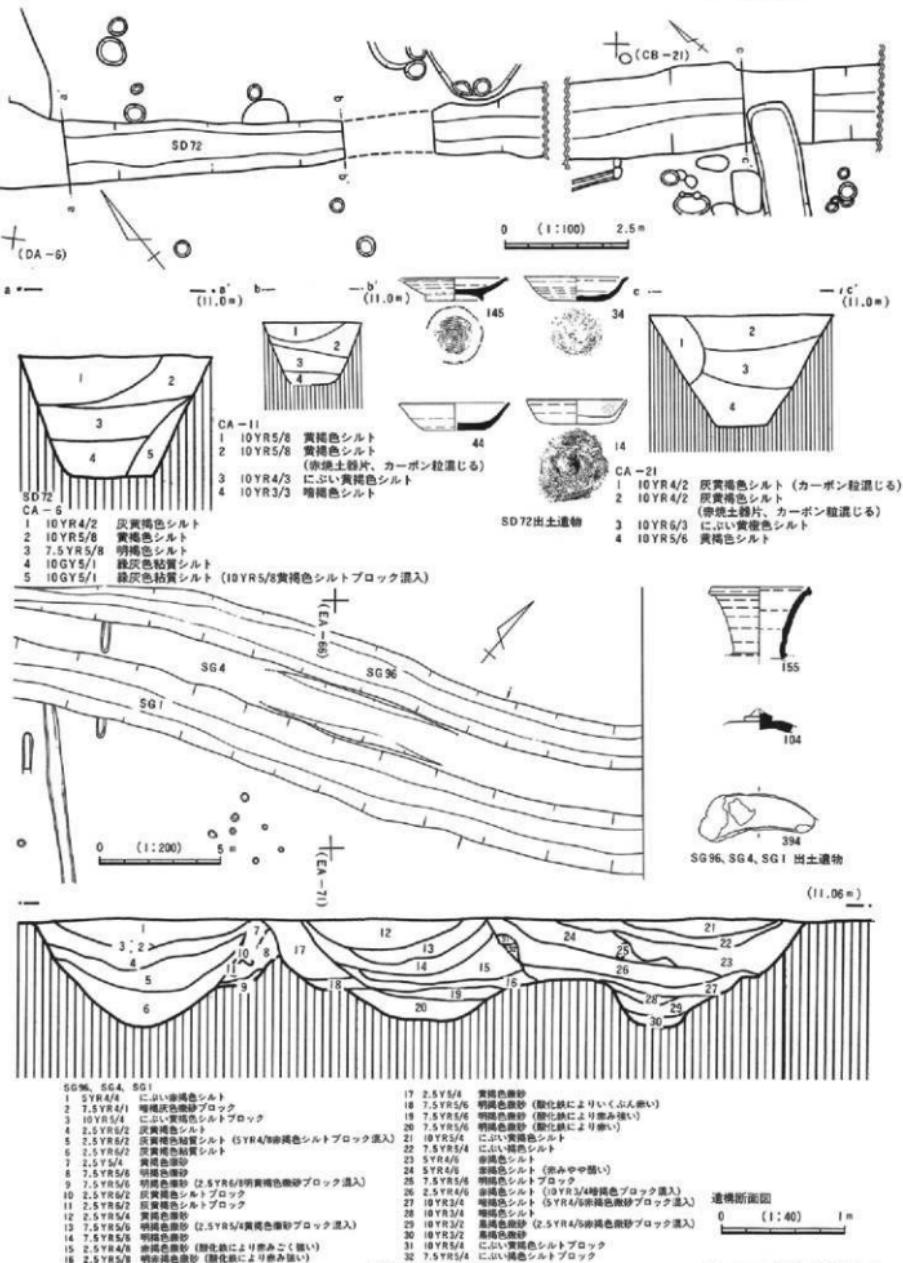
SE 2326 井戸眼検出状況図



井戸枠実測図 0 (1:20) 1m

第18図 遺構実測図(1)

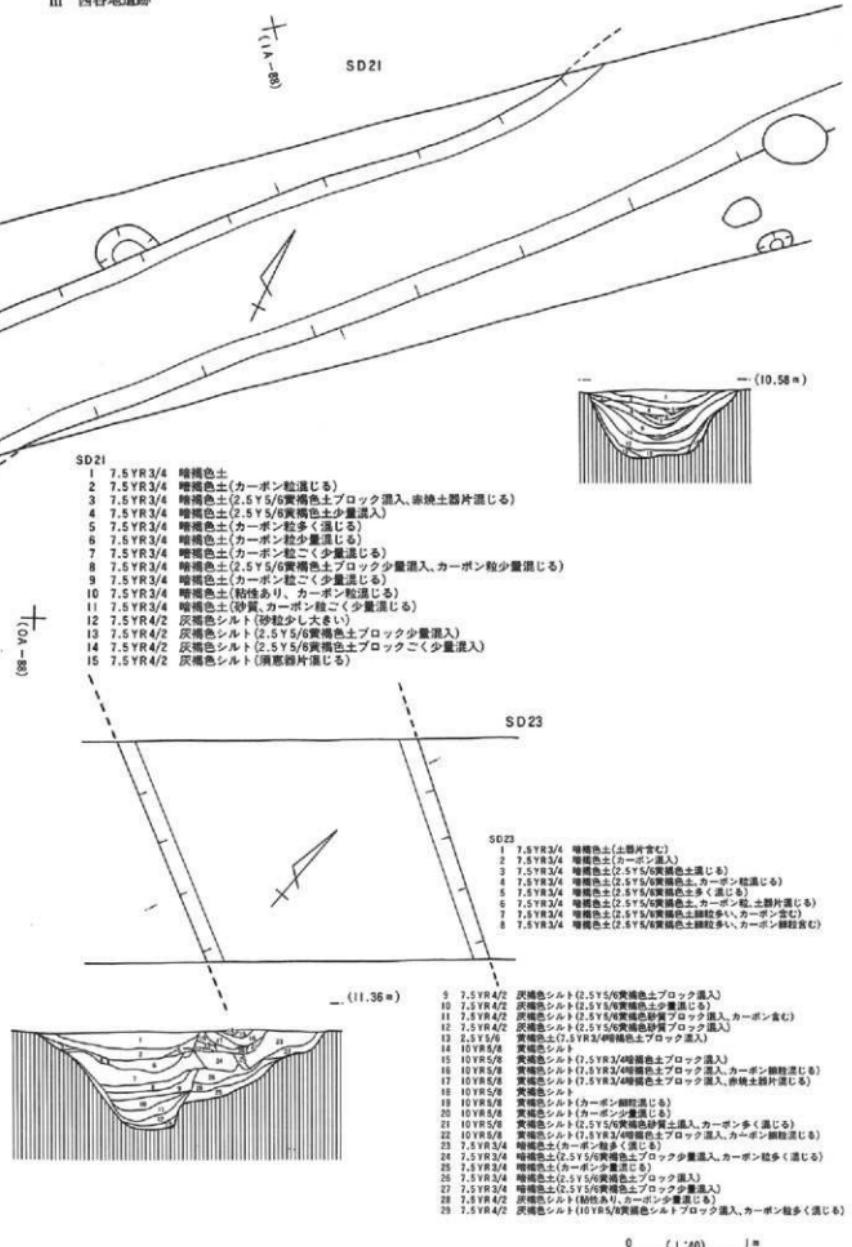
III 西谷地遺跡



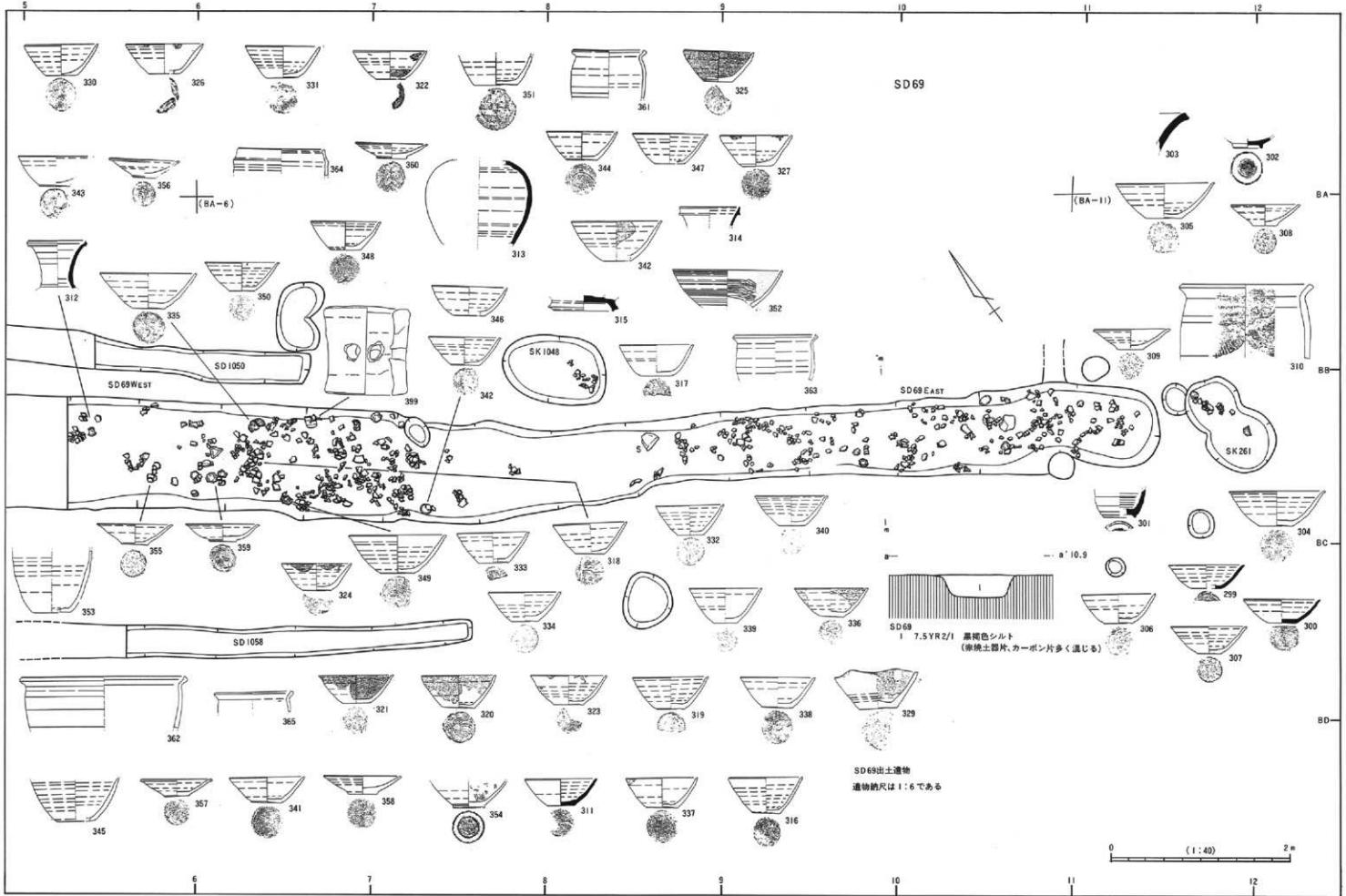
遺物縮尺は1:6である

第19図 遺構実測図(II)

III 西谷地遺跡

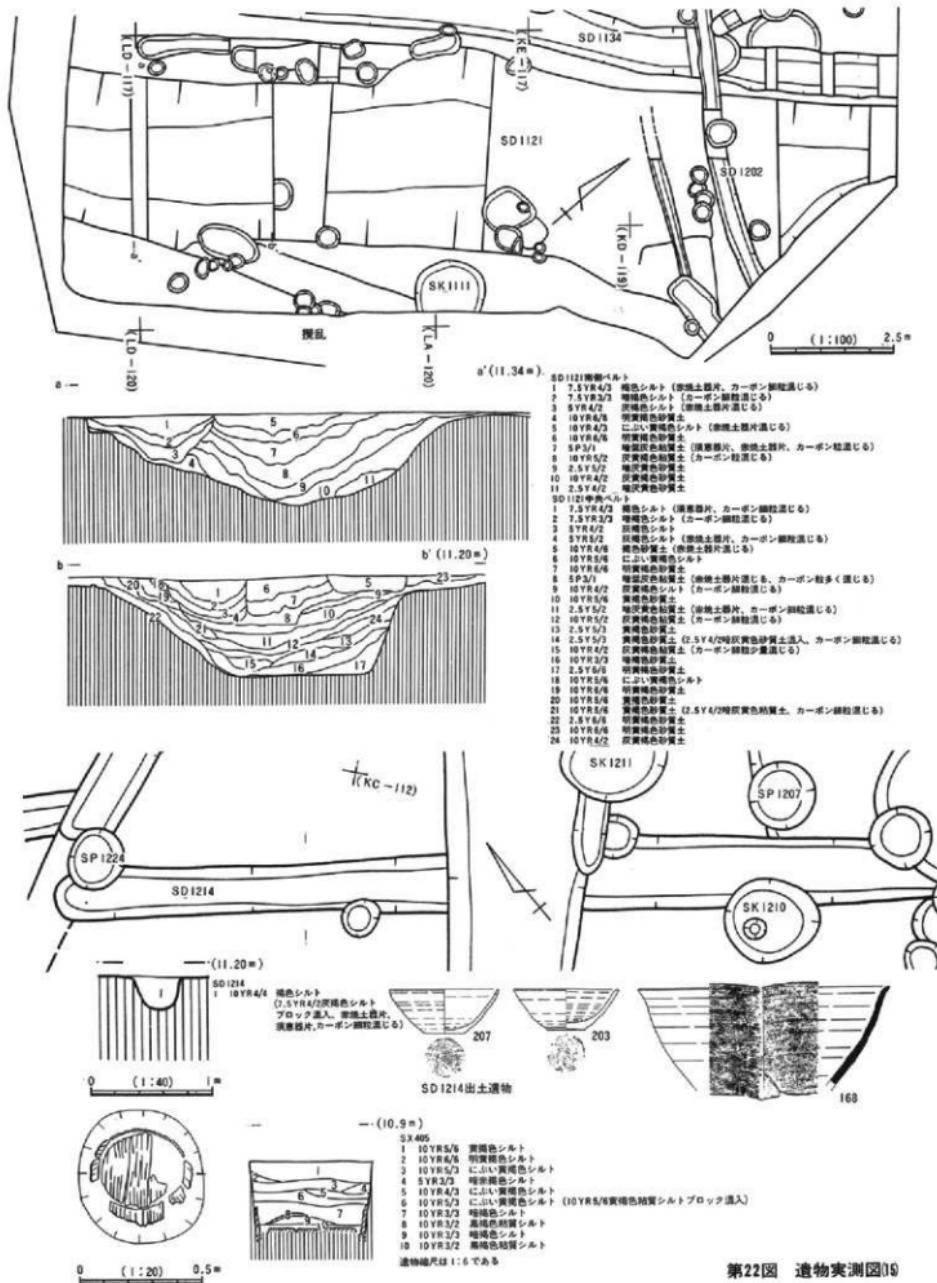


第20図 遺構実測図⑩



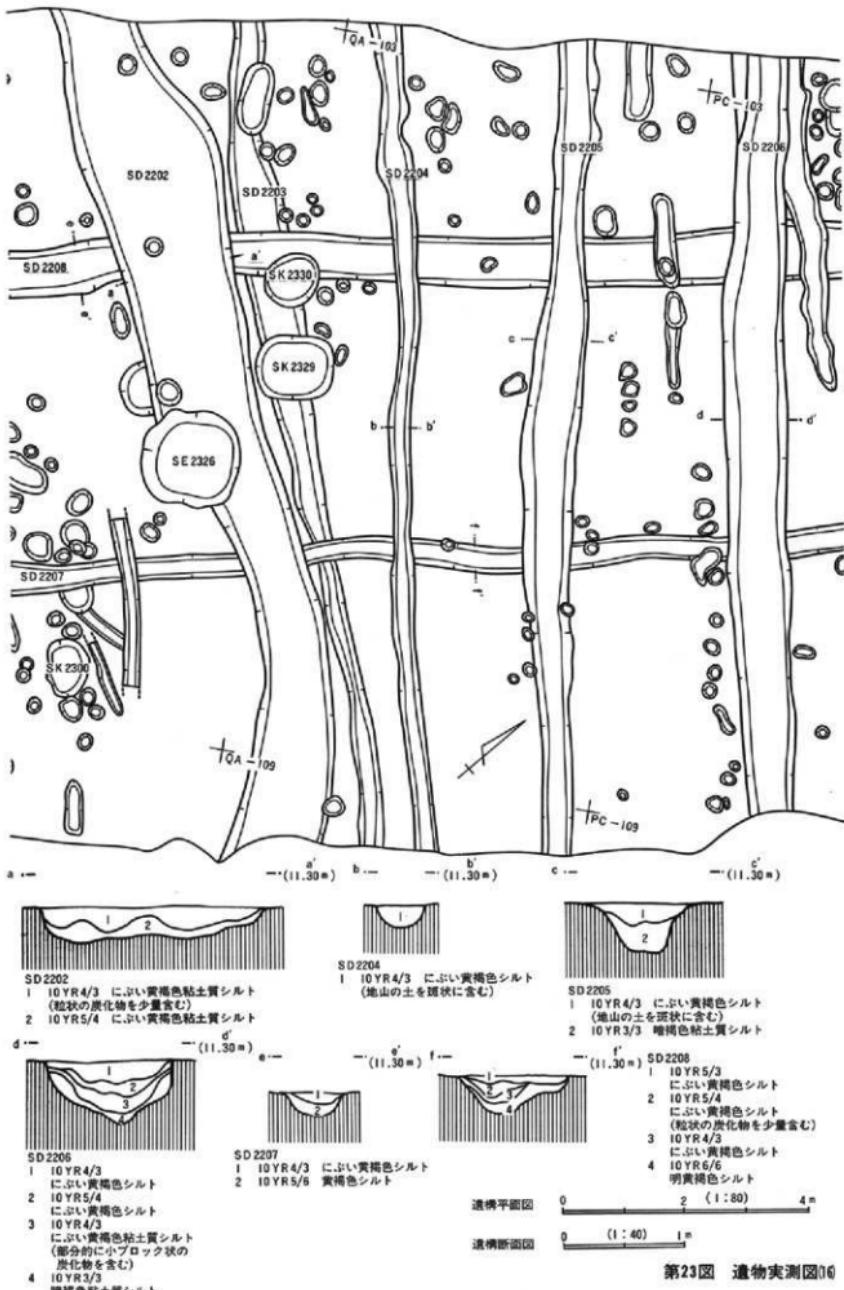
第21図 遺構測定図04

III 西谷地遺跡



第22図 遺物実測図(15)

III 西谷地遺跡



4 出土した遺物

コンテナ65箱以上の遺物が出土した。出土遺物は、土器が最も多く、出土量のほとんどを占める。他には、土製品や石製品、鉄製品などがある。

土師器・黒色土器

土師器は、数量的には少ないが全地域で出土している。貯蔵・煮沸形態が多く、次いで甕・鉢・壺・鍋などがある。1点ではあるが、楕と思われる、底部に複数の円孔が穿たれた土器（第24図4）が出土している。唯一の供膳形態である坏（第25図13）は、回転糸切りによって底部が切り離され、口径135mm、底径45mm、器高45mmを測る。内面に放射状のヘラミガキが、外面には横方向のヘラミガキが施されている。高坏（第24図1）とミニチュア土器（第24図2）は、その形態から、奈良時代ないし古墳時代後期まで遡る可能性を持つと思われる。

黒色土器は内面のみを黒色処理したA類と両面黒色処理をしたB類とある。

A類は坏、高台付坏、楕といった供膳形態で占められる。基本的に外面にロクロ目、内側にミガキが施されており、底部の切り離しは回転糸切りによって行われているが、内外面共にロクロ目をもつもの（第25図14・21）や底部ヘラ切りのもの（第25図14, 15, 16）などを見る。ヘラ切りの坏は底径指數70前後、器高指數約25を示す。楕とした大ぶりのものは、底径指數45前後、器高指數は38～50を示す。両者とも器壁の立ち上がり角度は55度前後である。底部ヘラ切りの内黒土器は、比較的古い様相を持ち、あるいは8世紀代まで遡る可能性を持つのではないかと考えられる。

B類は蓋（第26図23）が1点出土している。SK657から出土したもので、内外面共に緻密な回転ヘラミガキが施されている。

須恵器

調査区全域で出土しているが、北1・2区からの出土が多い。種類としては供膳形態、特に坏が最も多く、須恵器のほとんどを占める。他には蓋が多く、次いで楕、皿がある。それぞれ高台を持つものと無高台のものがある。貯蔵形態は壺、甕、それに鉢が見えるが、出土量は少ない。

坏はヘラ切りのものが圧倒的に多く、回転糸切りのものは少ない。しかしSD69溝跡出土の須恵器坏は、すべて回転糸切りである。このようなところからSD69溝跡は若干時期が降ることが考えられる。

口径を100としたときの底径の比率（底径÷口径×100）を「底径指數」、同じく器高の比率（器高÷口径×100）を「器高指數」と呼ぶと、ヘラ切りの坏は底径指數が50～65付近にピークが見られ、器高指數は20から30、特に25付近にピークが見られる。同様に回転糸切りの坏を見ると、底径指數は35から50に分布し、器高指數は25から40、特に30付近にピークを持つ。この二つの集団を唐尺に換算して平面上にプロットすると、ヘラ切りの坏は、

口径4寸から4寸5分、底径は2寸から3寸の範囲に分布し、器高は1寸2分付近にピークを持つ。回転糸切りの壺は、口径は4寸から4寸5分の範囲に、底径は1寸6分から2寸2分の範囲に分布し、1寸8分付近と2寸2分付近にピークを持つ。また器高は1寸2分から1寸5分の範囲に分布する。また、あえてこの両集団の中央値ないしピークをとると、ヘラ切りの壺の集団は、底径指数60、器高指数25に収斂し、回転糸切りの集団は、底径指数42、器高指数30に収斂するとみて良いであろう。つまり回転糸切りの集団は、ヘラ切りの集団と比べると底径の比率が小さく、器高の比率が大きいことがわかる。

高台付壺は、ヘラ切りの大きめの底部をもち、体部が急角度で立ち上がるものが多い。切り離し部分の外周から若干内側に入った所に短い貼付高台を持つが、高台の開き方や高さは、それぞれ異なっている。体部下端に後のような傾斜交換部を持つもの（第28図78）があるが、この傾斜交換部は、8世紀代の棟楕の意匠の名残とも考えることができよう。

皿は、口縁端部がまっすぐ伸びるものと、反るものとがあり、まっすぐなものが比較的古い様相を持つものと考えられる。

蓋は、肩が張るもの、なだらかに口縁部に向かうものなど、種々有り、口縁端部もまっすぐ伸びるものから折れて丸みを持つものなどいろいろな形が見られる。またツマミの形状も宝珠状、ボタン状、円筒状のものとバラエティに富む。図上復元可能なものの12点を対象に計測値を見てみると、口径は130mmを最小値として、最大値160mmまで30mmのレンジをもっている。単純平均値をとると145mmとなり、最頻値では140mmとなる。これらの数値を唐尺で算出すると、最小値が4寸4分、最大値が5寸4分となる。平均値は単純平均が4寸9分、最頻値は4寸7分となる。楕は、口径の大きいもの、器高指数が大きいものを仮に呼んでいる。つまり座標上に値をプロットしたときに、壺のグループから外れる一群を楕としている。楕はヘラ切りが多いが、糸切りも見られる。

須恵器で壺形土器の底部或いは体部に墨書きされたものが少量認められた。明確に判読し得るものはなく、現行の文字に当てはめると「貞」（第38図285）、「金」（第38図256）に最も近似する。

赤焼土器

出土した土器の中でも、量的に最も多いのが赤焼土器である。その出土量は須恵器をはかるに上回り、倍近くを占める。

器種では供膳形態が圧倒的に多く、甕、鍋、壺といった煮沸・貯蔵形態は僅かである。供膳形態の内訳は、壺がそのほとんどを占め、1点の高台付壺（第42図354）を除いて、全てが平底無高台である。底部切り離し技法はほとんどが回転糸切りであるが、ヘラ切り（第33図172、175、178、第35図210）や静止糸切り（第42図329、330、337）のものがわずかに見られる。

底部切り離し技法毎に指數を見てみると、ヘラ切りの壺は資料数は少ないが底径指数35～60、器高指数25～40に分布し、静止糸切りの壺は底径指数43前後、器高指数は41に集

中する。そして回転糸切りの环は底径指数40~50、器高指数は28~50に分布する。そして、いずれの指数も40周辺に頻度が高いことがうかがえる。また、回転糸切りの环を唐尺に換算すると、口径は4寸から4寸5分に集中し、底径は1寸5分から2寸の間に、器高は1寸5分から1寸9分のあたりに集中することがわかる。つまり底径と器高がほぼ同じ寸法で作られていることがうかがえる。

S D 69溝跡出土の赤焼土器のうち、油煙の付着した土器（第42図320~329, 336, 337）が目付く。燈明皿として用いられたものである。内外面全面に付着したものや、燈芯の痕跡がわずかに観察されるものまで種々あり、廃棄されるまでの使用頻度を物語る。器形は环がほとんどであるが、破損した壺の下半部を再利用したもの（第42図329）も見られる。S D 69は、前述したように、S B 901・914掘立柱建物跡に伴う土器等の廃棄場所と考えられるが、特定の建物の廃棄物としては燈明皿の出土量が多すぎるくらいがないでもない。或いはこれらの建物跡は、多数の燈明を必要とする施設であったのだろうか。

墨書きされたものが3点ほど認められた。部位は体部外面である。「大」（第38図289）や「玉」ないし「五」に近似した文字（第38図290）がある。

皿は底径指数が小さいほど器高指数が大きくなる、つまり小さいものほど深いという傾向が見られる。口縁端部はまっすぐに伸びるものと、わずかに反るものが見られる。

土製品・石製品

五徳形土製品（第43図339）

S D 69溝跡から出土したもので、高さ150mm、径137mmを測る。輪積痕が残り、厚さは約25mmほどある。体部中程の位置に径2cmほどの円孔が3つ穿たれている。鍋形土器などを火にかけるために用いられた支脚と考えられる。機能を後世の五徳に擬し、五徳形土製品と仮称した。下端のわずかな部分を除いて再加熱されたことが観察される。下端部は灰の中に埋まり、あまり火を受けない状況に置かれていたものと考えられる。この種の土製品は唯一の出土である。

土鍤（第39図366~370）

肉厚で太く重いタイプ（366~368）と肉薄で細く軽いタイプ（369, 370）がある。前者はその形態、重量から考えて刺網の沈子、後者は投網の鍤と考えられる。

羽口（第39図372~374）

フイゴの羽口である。いずれも小さな破片であるが小鍛冶のためのものと考えられる。明確なスラグ（鉱滓）の出土は見られないが、西ノ川遺跡で小鍛冶の施設と考えられる遺構が出土していることから考えると本遺跡にも小鍛冶の施設が想定される。

砥石（第40図386~391）

直方体に整形して使用しているもの（387, 388, 390）と不整形のもの（386, 389, 391）がある。直方体のものは、使い減りにより擦痕を呈する。389の資料は、擦痕の観察から、使用時のままの形状と考えられる。

鉄製品・その他

刀子（第40図393）

刀子の茎と考えられる。残存部分で長さ50mmを測る。鍔のため、折れ口から見える刀身はかなり細くなっている。古代に属する所産と思われる。

鎌（第40図394）

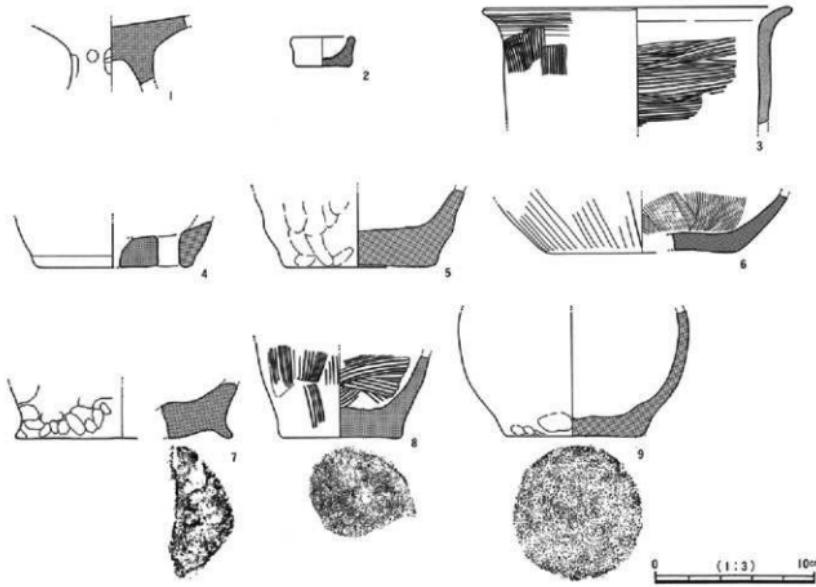
S G 4 川跡から出土したものである。長さ138mm、幅約43mm、厚さは、鍔を含んで12mmを測る。刃が内弯しており、残存部分から基部を折り曲げて柄に装着するタイプと推定される。柄に装着した状況を復元すると、刃と柄が作り出す内角が鈍角を形成するため、稻を刈ったものと考えられる。また、茎を持たないことから、時期的には古代の範疇に納まるものと考えられる。

煙管（第40図397）

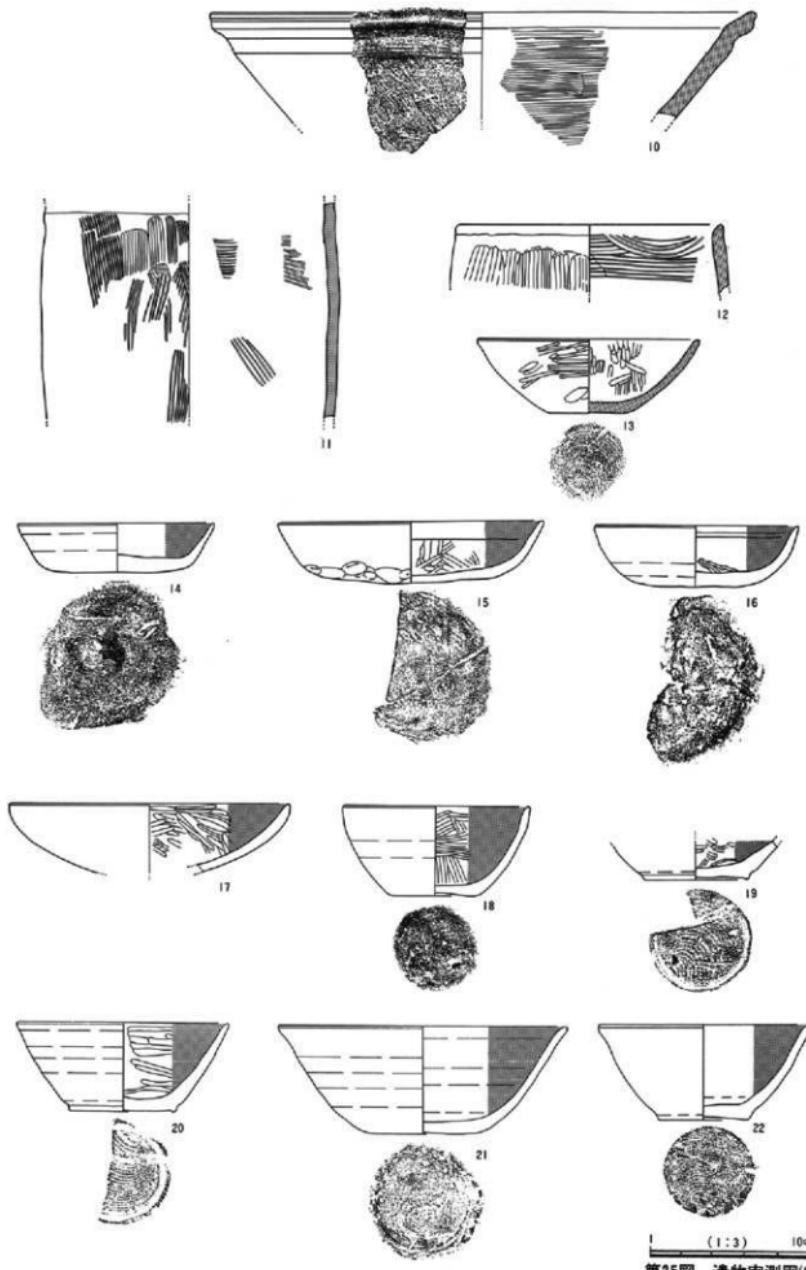
銅製の薄い板を丸めて張り合わせたものである。火皿（ボウル）の部分が失われているが、首の部分が絞られて細くなっていることから考えると、火皿が偏平なタイプと推定される。おそらく江戸期の所産であろう。

錢貨（第40図398）

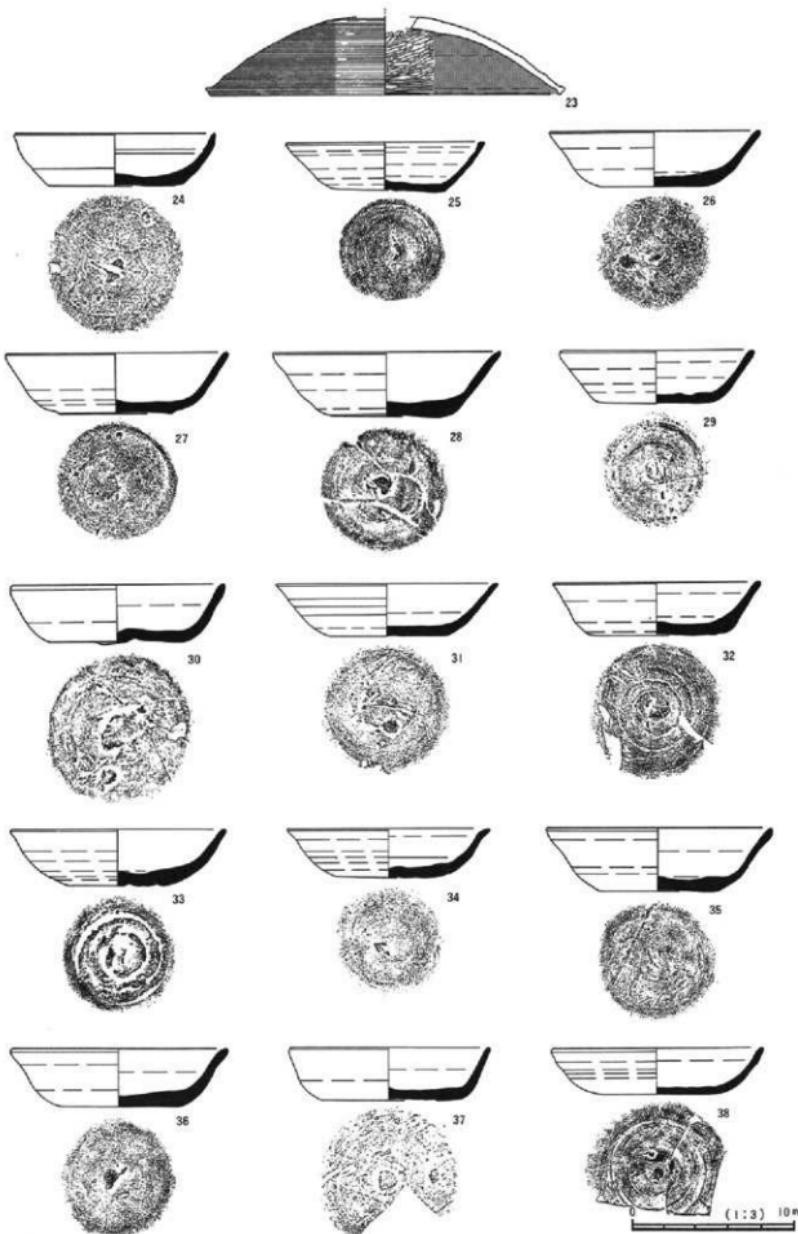
2枚が癒着しており、上面の錢貨は「寛永通宝」である。貨背は癒着しているため不明である。下面の錢貨は、貨背は無文で、銭名は不詳であるが、おそらく「寛永通宝」と考えても良いと思われる。



第24図 遺物実測図(1)

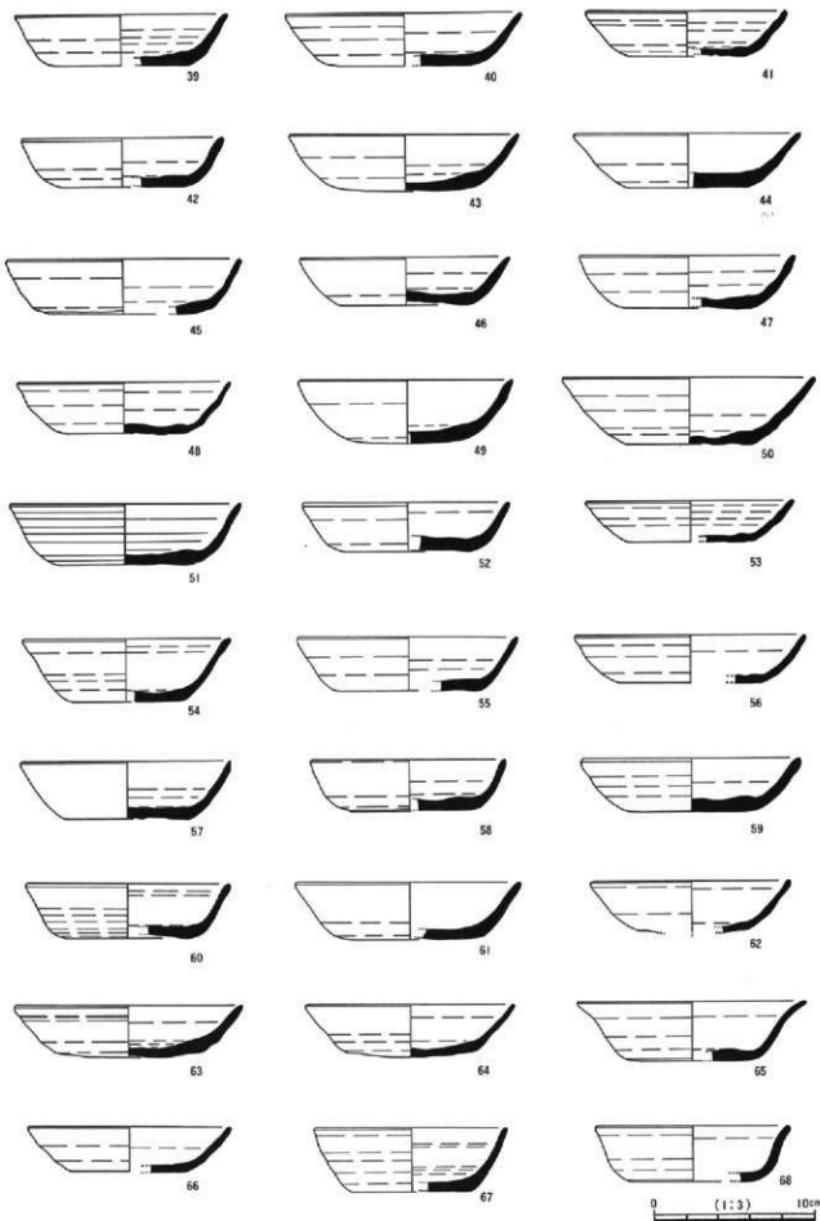


第25図 遺物実測図(2)



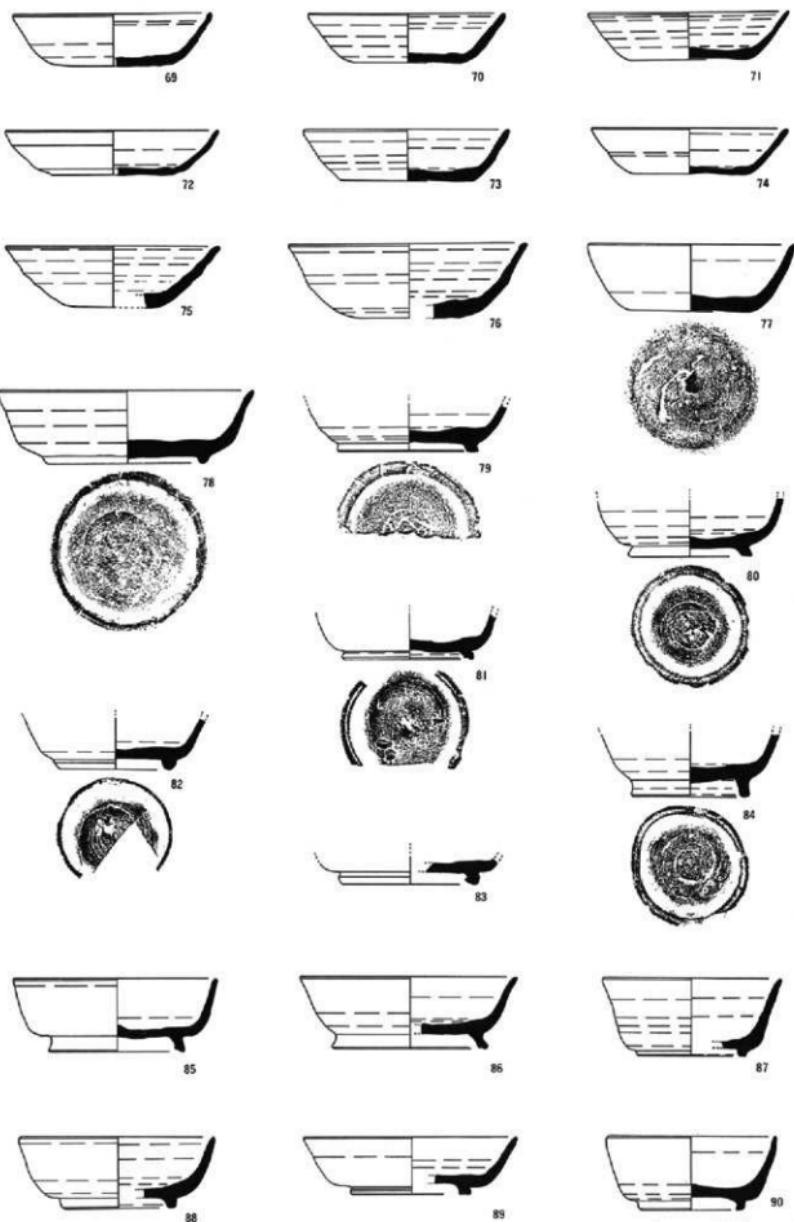
第28図 遺物実測図(3)

III 西谷地遺跡



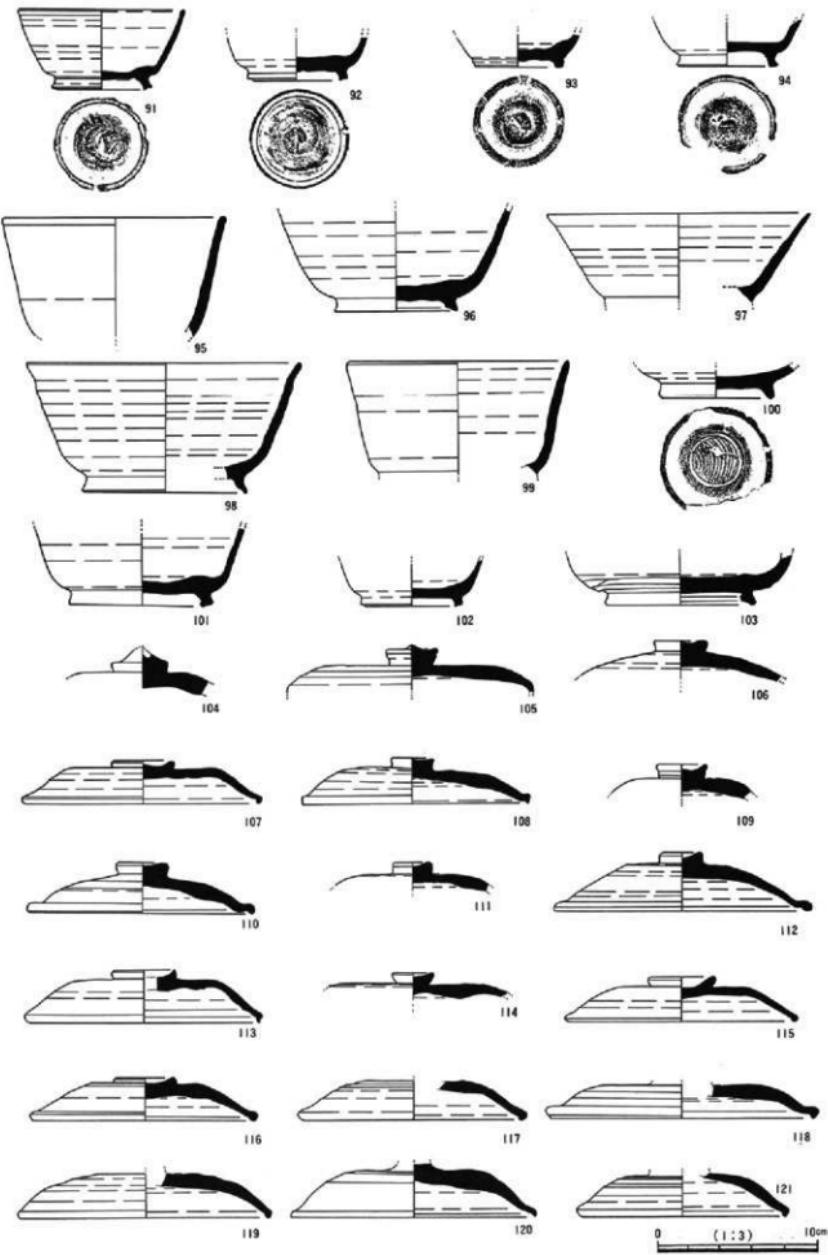
第27図 遺物実測図(4)

III 西谷地遺跡



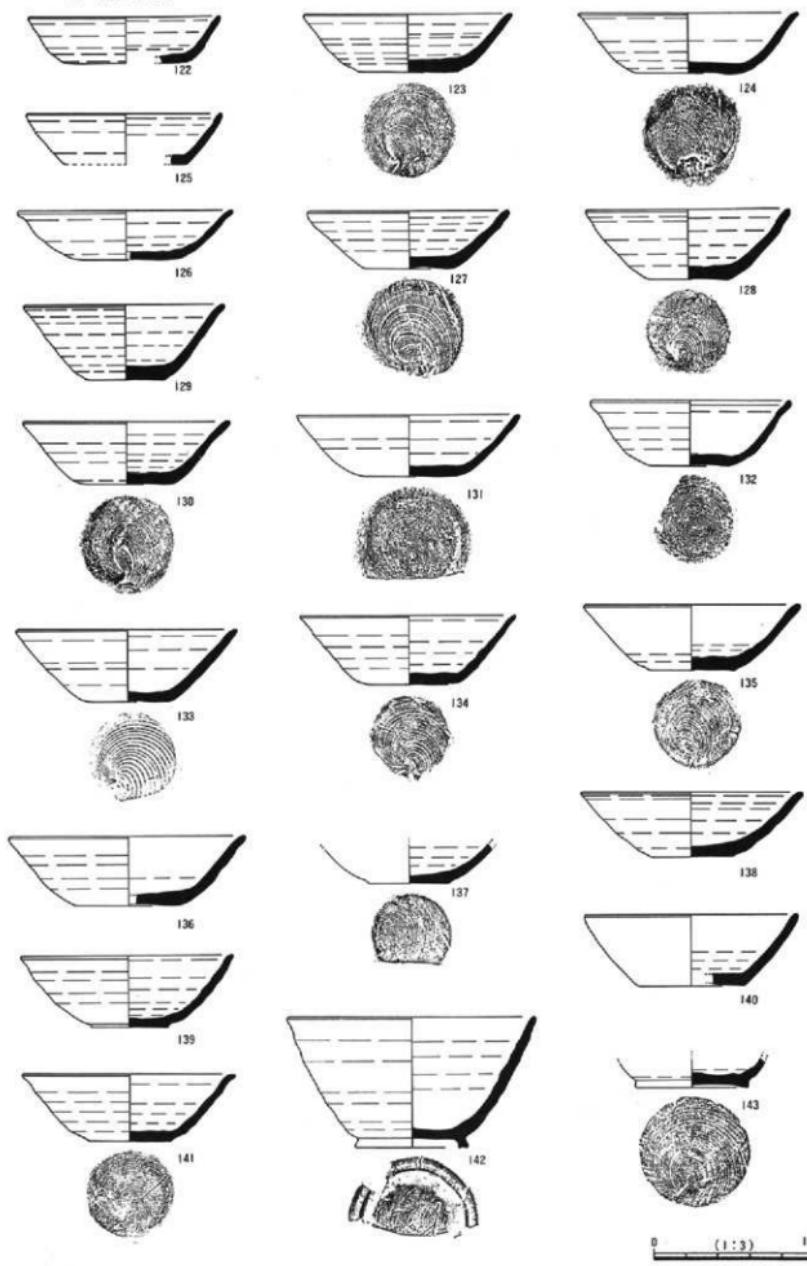
第28図 遺物実測図(5)

III 西谷地遺跡



第29図 遺物実測図(6)

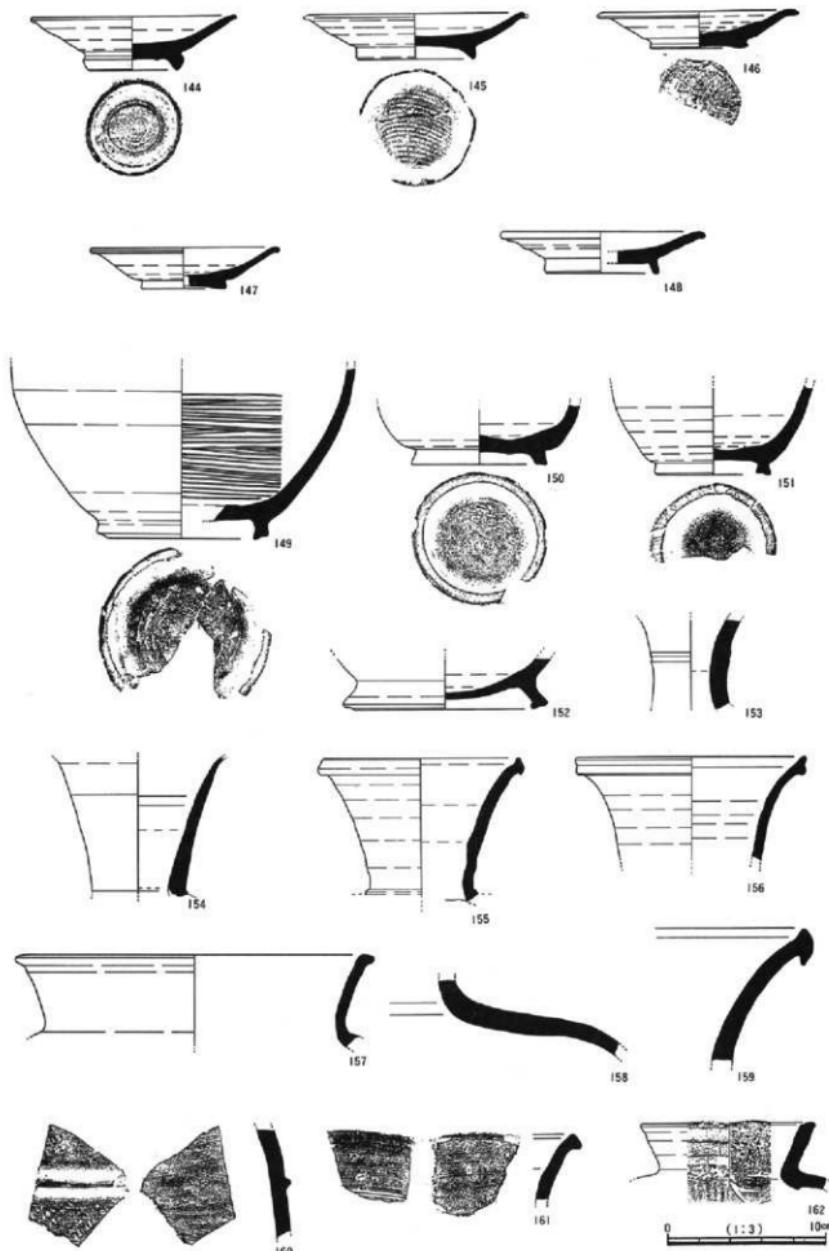
III 西谷地遺跡



0 (1:3) 10cm

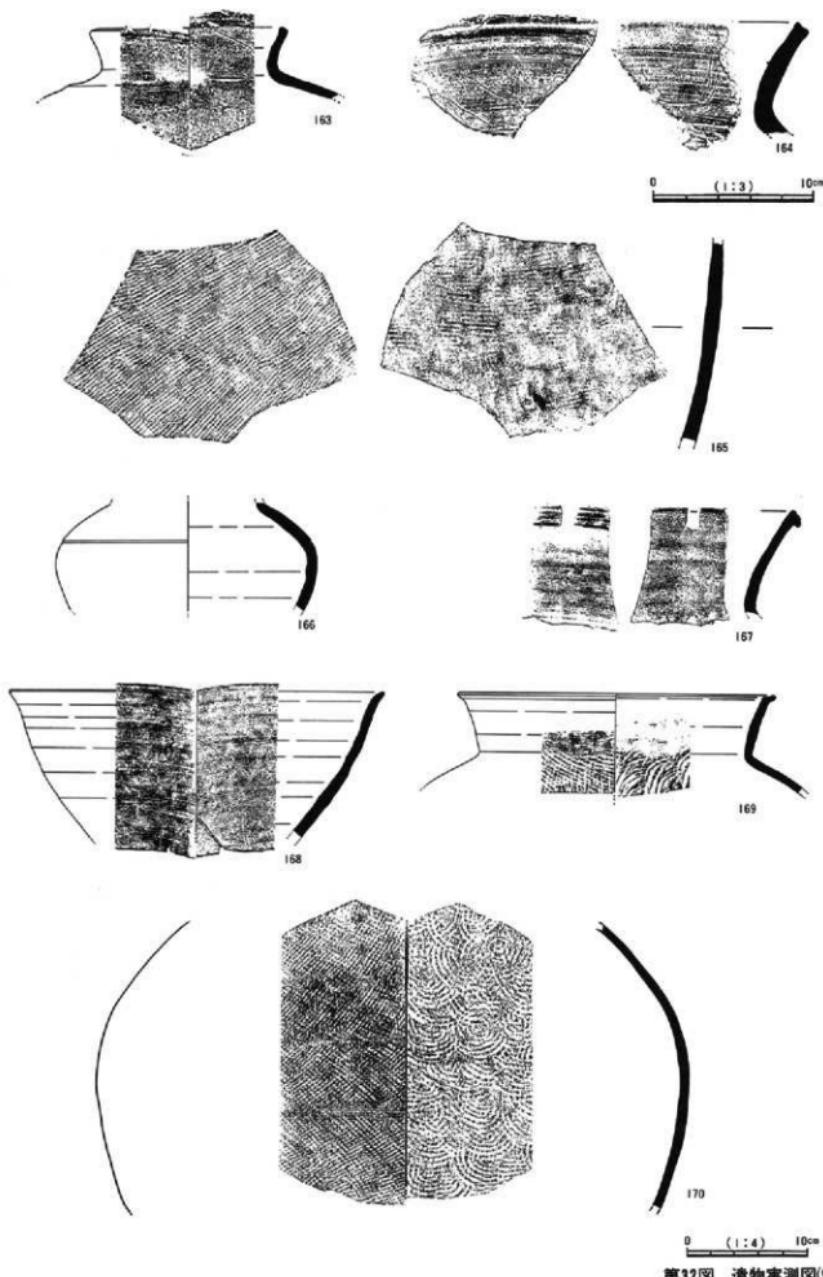
第30図 遺物実測図(7)

III 西谷地遺跡



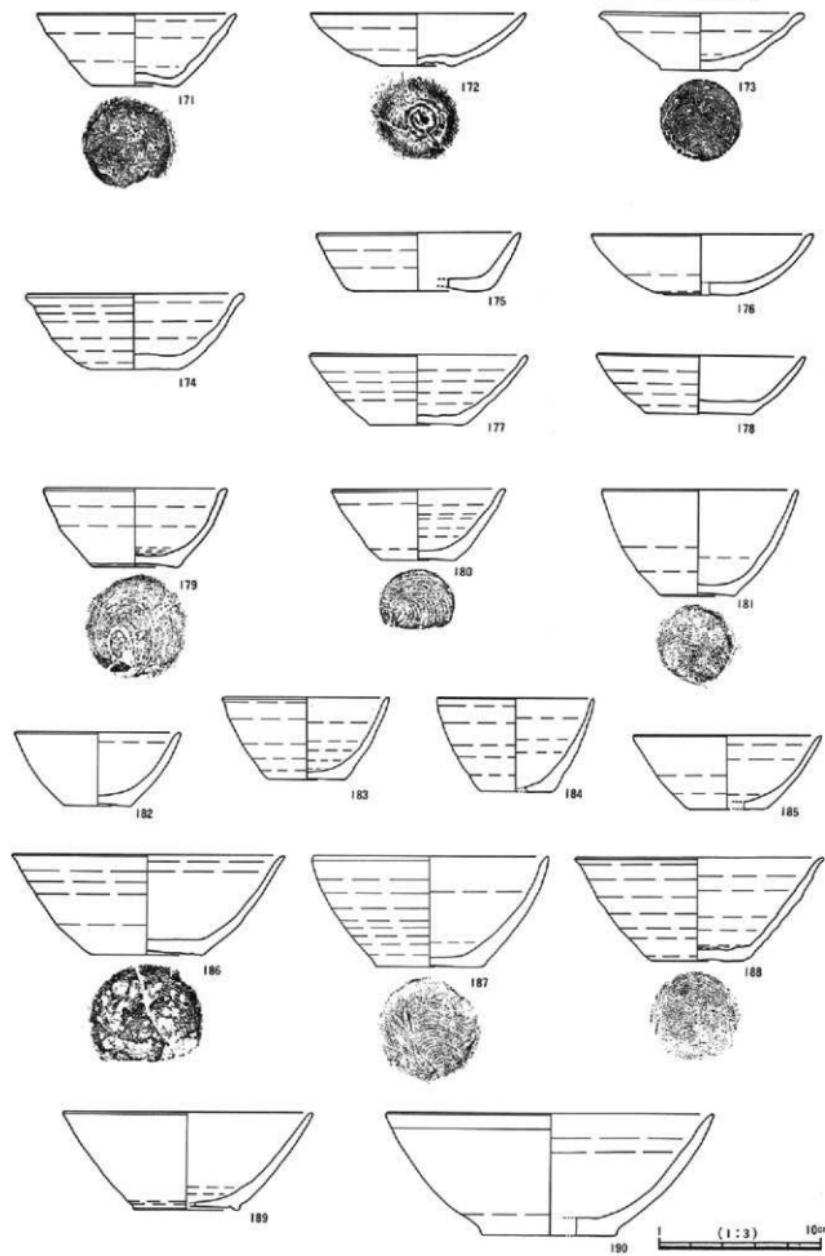
第31図 遺物実測図(8)

III 西谷地遺跡



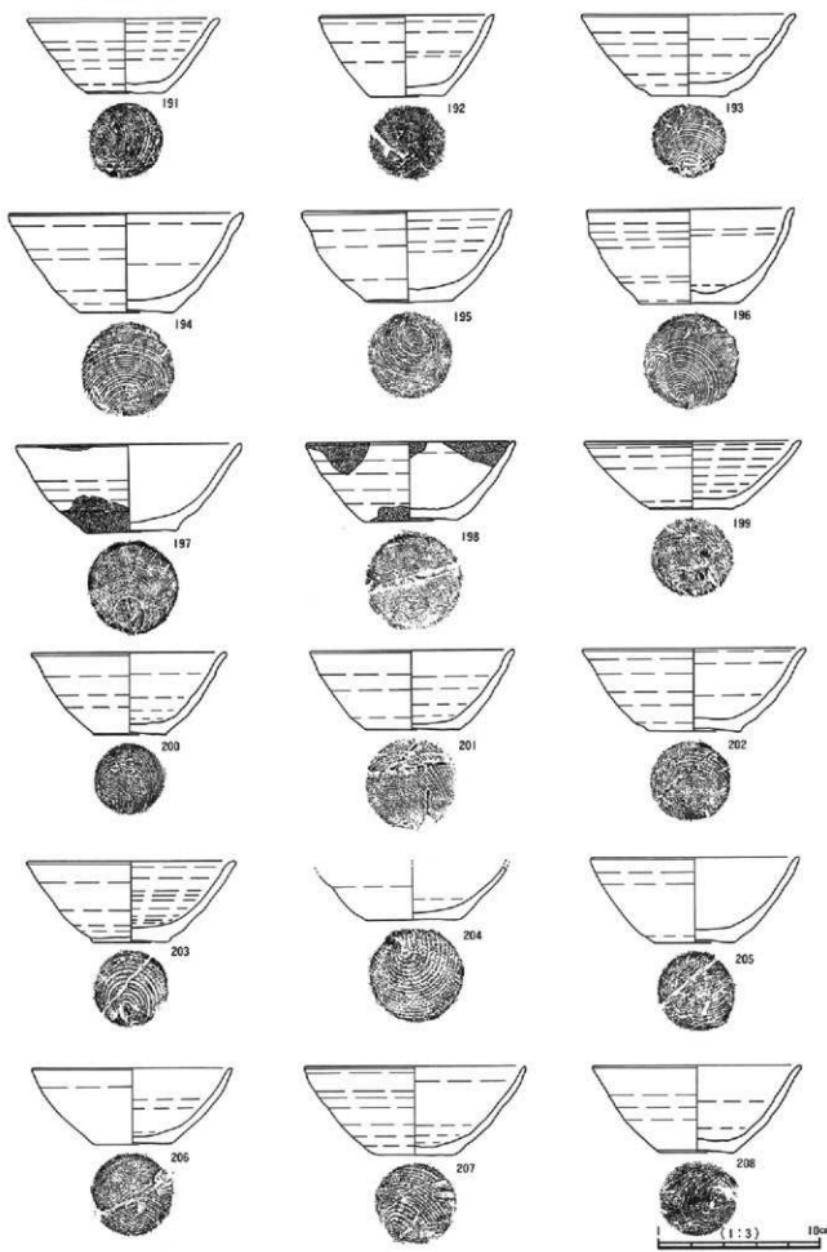
第32図 遺物実測図(9)

III 西谷地遺跡



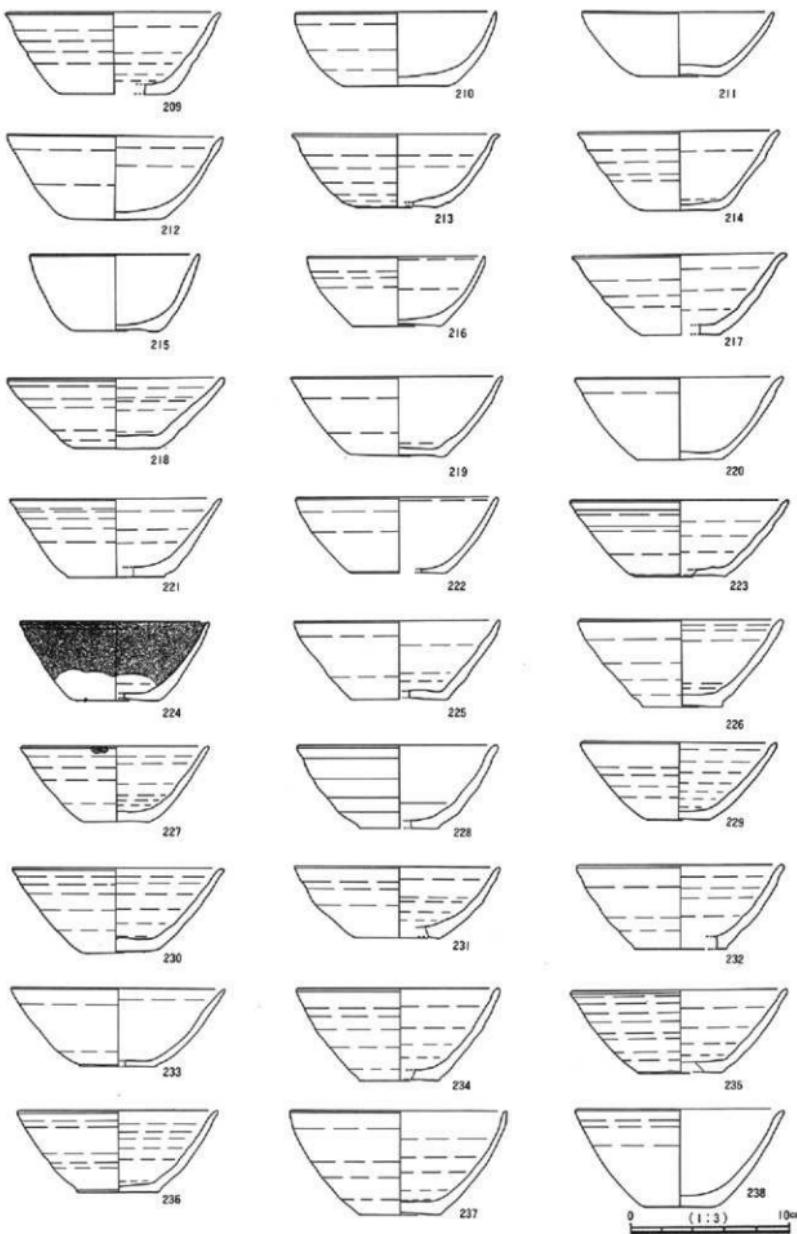
第33図 遺物実測図(10)

III 西谷地遺跡



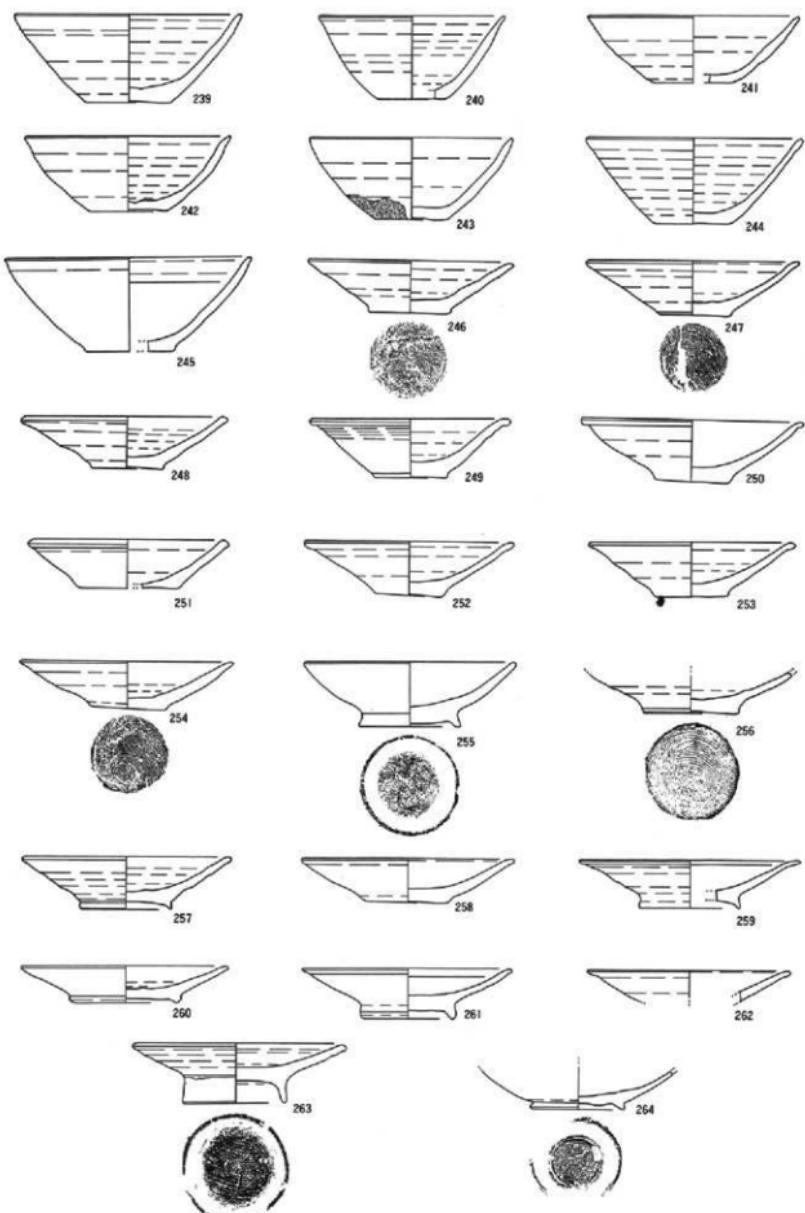
第34図 遺物実測図(1)

III 西谷地遺跡



第35図 遺物実測図(12)

III 西谷地遺跡



1 (1:3) 10cm

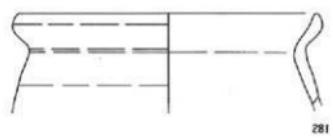
第36図 遺物実測図(1)

III 西谷地遺跡

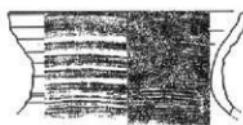


第37図 遺物実測図(14)

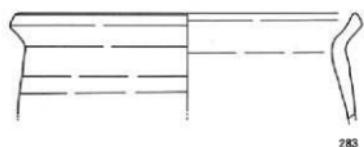
III 西谷地遺跡



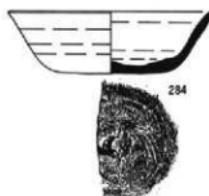
281



282



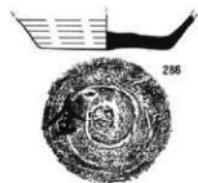
283



284



285



286



287



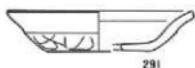
288



289



290



291



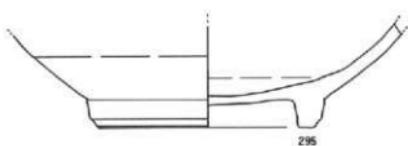
292



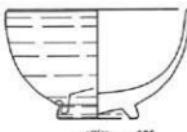
293



294



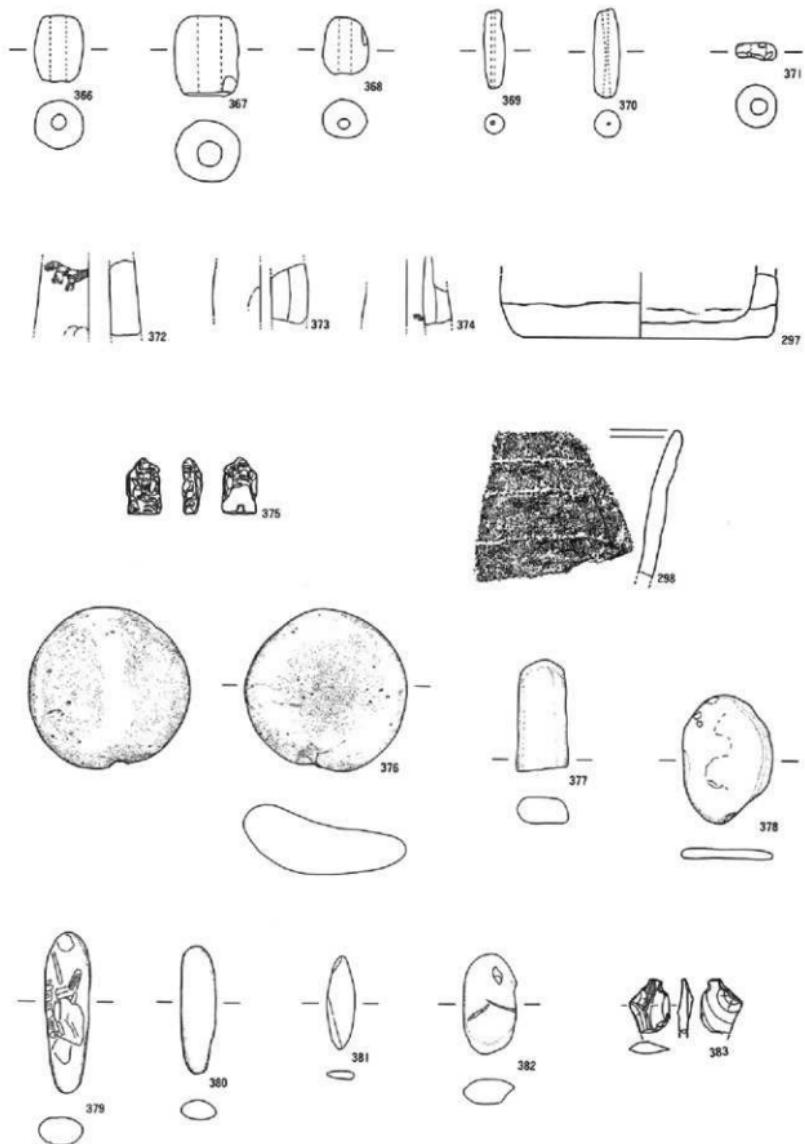
295



296

0 (1 : 3) 10cm

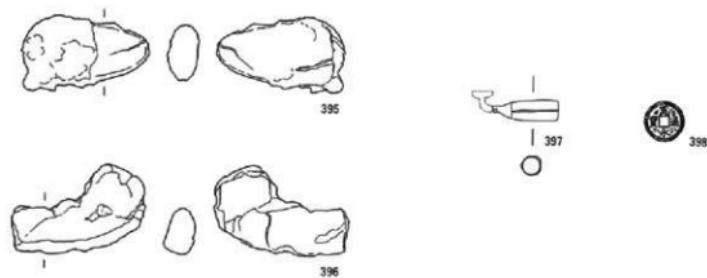
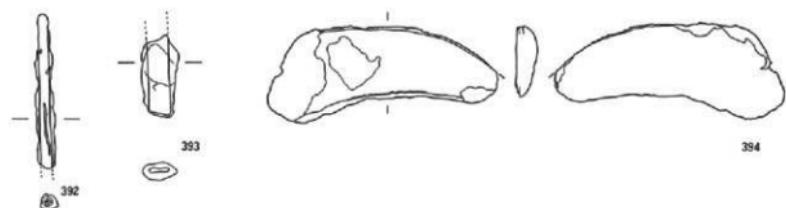
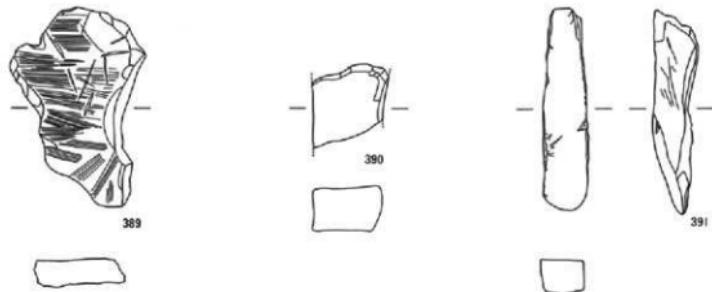
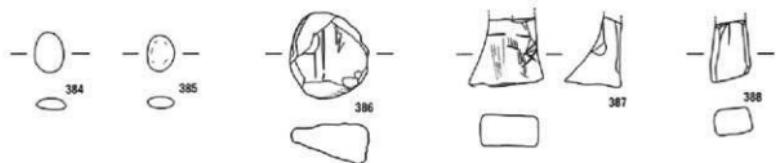
第36図 遺物実測図(15)



0 (1 : 3) 10cm

第39図 遺物実測図(10)

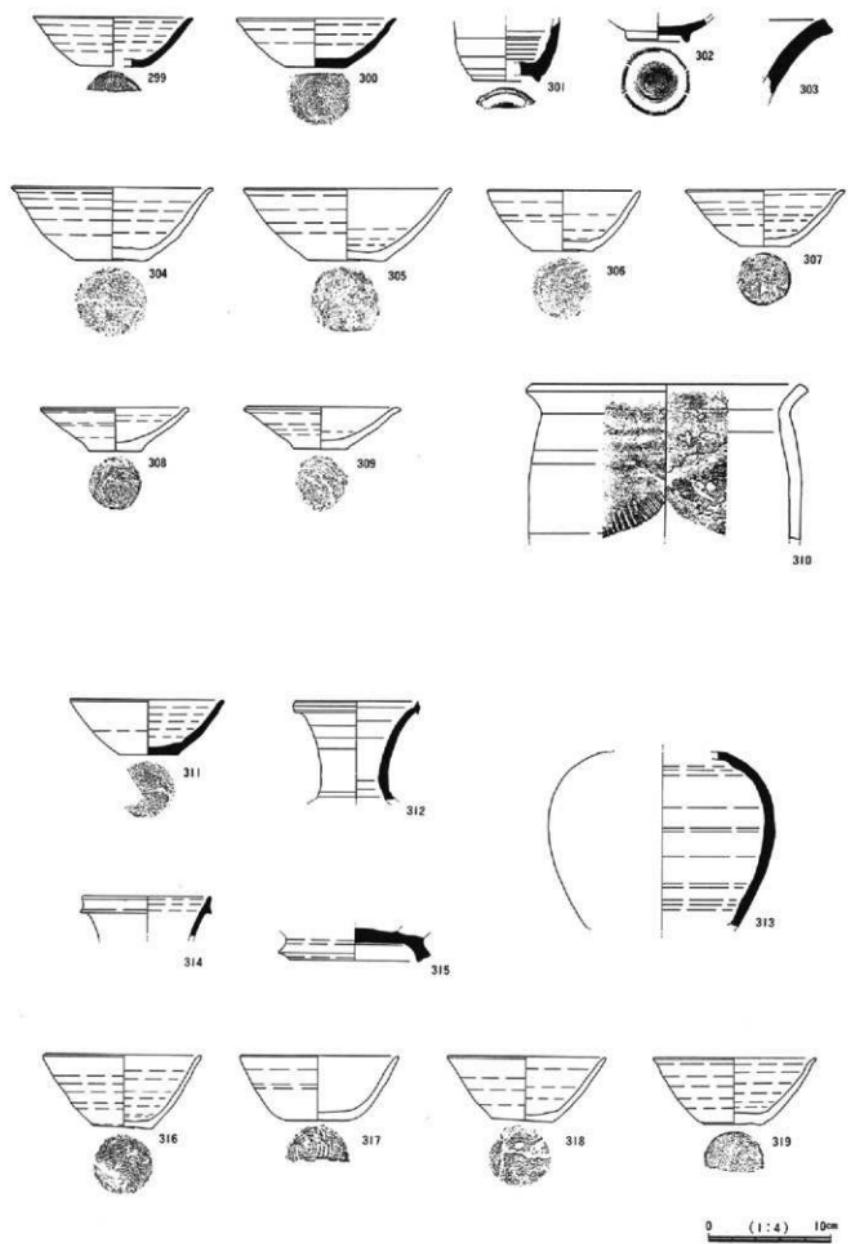
III 西谷地遺跡



0 (1:3) 10cm

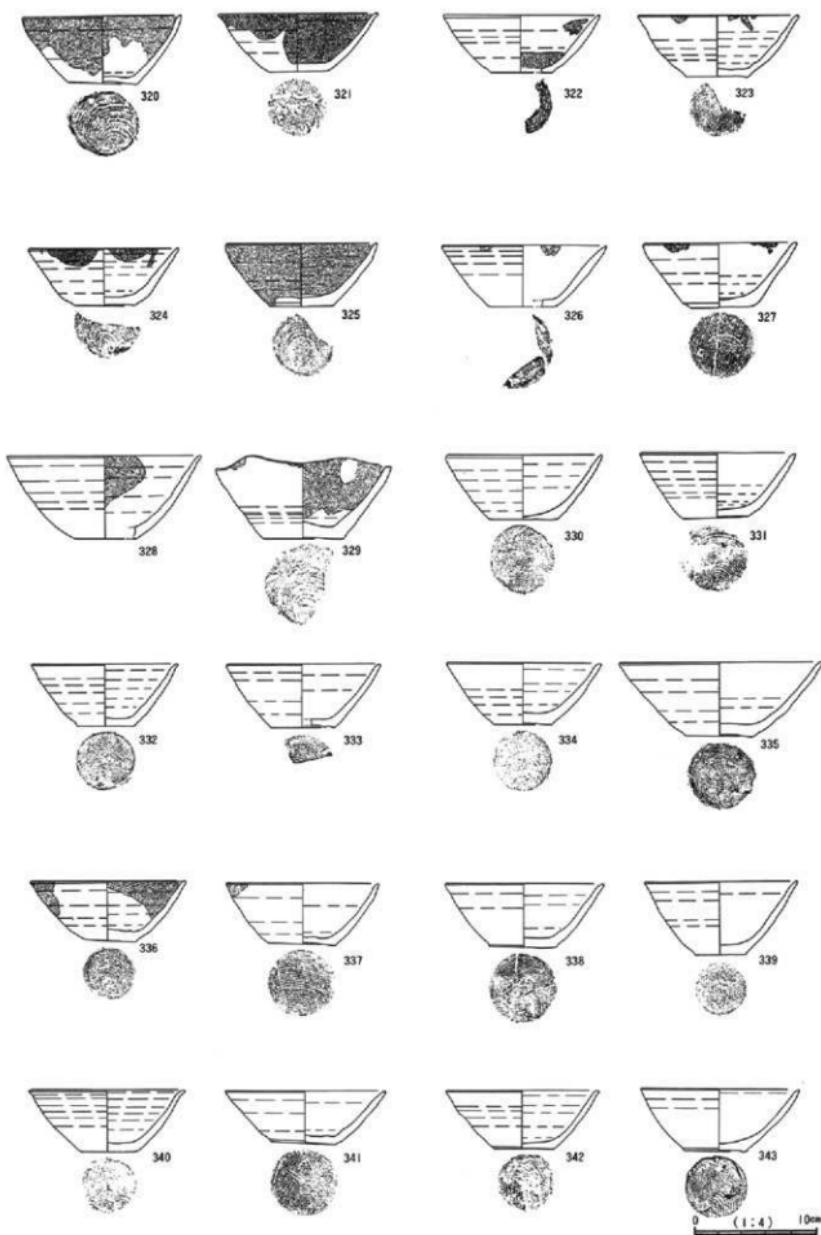
第40図 遺物実測図(1)

III 西谷地遺跡



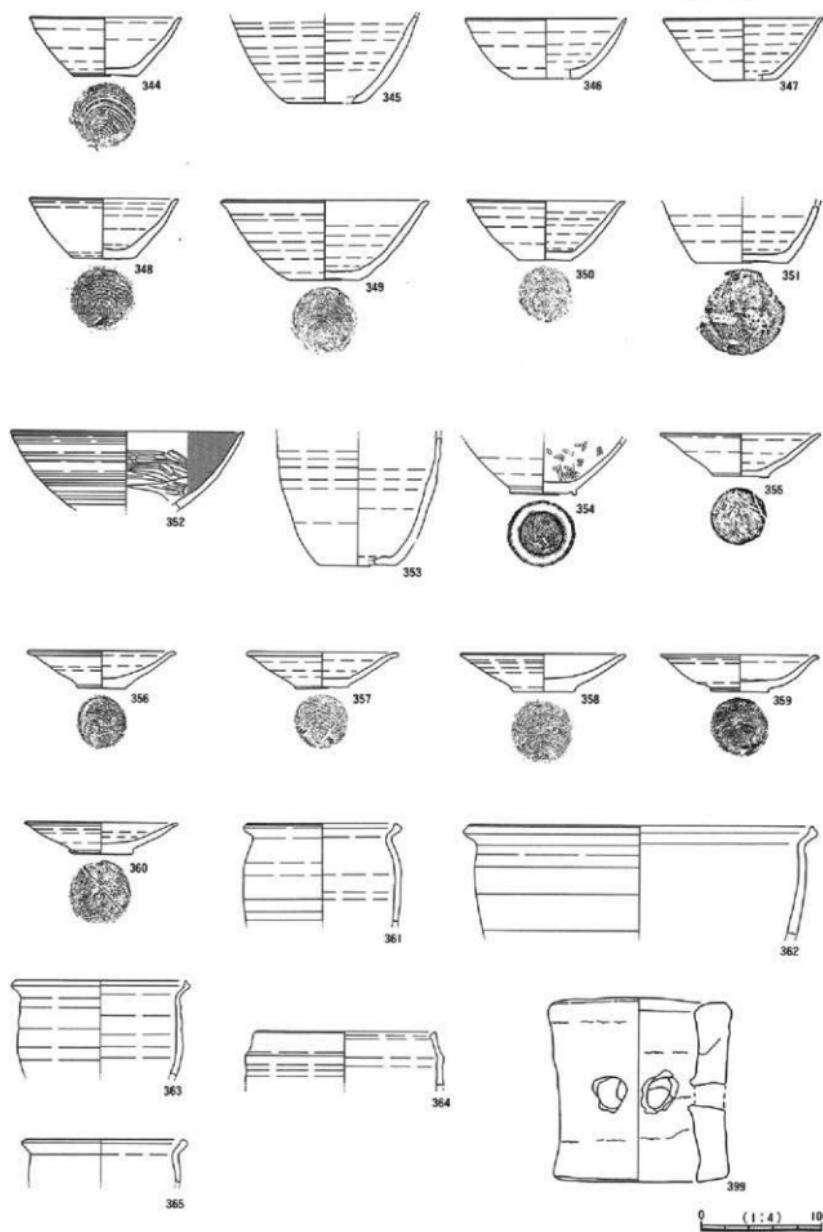
第41図 遺物実測図(II)

III 西谷地遺跡



第42図 遺物実測図(19)

III 西谷地遺跡



第43図 遺物実測図(2)

III 西谷地遺跡

表1 出土遺物観察表(1)

拂 団 №	器 種	器 形	実 沢 値 (mm)				底部切離し	調 整 技 法	出 土 地	備 考	
			口径	底径	器高	厚					
第24回	1 土 鍋 盆	高 环						ハケ目	東1面整理		
	2 ミニチュア土器		40	32	18	4.5		ロクロ	ロクロ	D A-11	
	3 土 鍋 盆	便	188					ハケ目	ハケ目	S D661	
	4 土 鍋 盆	底		90				ハケ目	北1面整理		
	5 土 鍋 盆	便		86				CA-16			
	6 土 鍋 盆	鉢	118					タタキ	ハケ目	北1面整理	
	7 土 鍋 盆	便	132						北1面整理	底面彫刻出し	
	8 土 鍋 盆	底						ハケ目	ハケ目	S K723	
	9 土 鍋 盆	便	83						S K270	指圧痕	
第25回	10 土 鍋 盆	鉢	330					ハケ目	ハケ目	D A-31	
	11 土 鍋 盆	便						ハケ目	ハケ目	北1面整理 R P53	
	12 土 鍋 盆	便	157					ハケ目	ハケ目	S D661	
	13 土 鍋 盆	环	136	50	45	4.5	四軸余	ミガキ	ミガキ	S K74	
	14 黒 色 土 器	环	120	84	30	4		ロクロ	ミガキ	S D72	
	15 黒 色 土 器	环	161	110	37	5		ケズリ	ミガキ	A A-16	
	16 黒 色 土 器	环	123		37.5	5		ロクロ	ロクロ	北1面整理	
	17 黒 色 土 器	环	160		25			ケズリ	ミガキ	S P224	
	18 黒 色 土 器	环	112	52	54.5	5	ヘラ	ロクロ	ミガキ	S K663	
	19 黒 色 土 器	高 台付 环	65				四軸余	ロクロ	ミガキ	北2面整理	
	20 黒 色 土 器	高 台付 环	130	66	54	5.5	四軸余	ロクロ	ロクロ	北2面整理	
	21 黒 色 土 器	便	175	73	65.5	4.5	四軸余	ロクロ	ミガキ	F C-21	
	22 黒 色 土 器	环	128	54	58	5	四軸余	ロクロ	ミガキ	北2面整理	
第26回	23 黒 色 土 器	便	218					ミガキ	ミガキ	S K657	両面黒色処理
	24 黒 色 土 器	环	122	85	32	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	北1面整理 R P41	
	25 黒 色 土 器	环	126	65	31	2.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K270	変形
	26 黒 色 土 器	环	127	62	33.5	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	B A-11	
	27 黒 色 土 器	环	134	70	37	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S D2207	
	28 黒 色 土 器	环	140	67	39.5	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	C A-16	
	29 黒 色 土 器	环	119	70	32	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	F A-11	
	30 黒 色 土 器	环	129	80	36	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S P404	底面内面に指圧痕
	31 黒 色 土 器	环	136	70	26	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K1028	
	32 黒 色 土 器	环	128	80	32	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	東2面整理	
	33 黒 色 土 器	环	132	59	33.5	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K1027	
	34 黒 色 土 器	环	124	64	30	4.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K861	
	35 黒 色 土 器	环	137	70	38.5	3	ヘラ	ロクロ	ロクロ	D A-6	重ね焼痕跡
	36 黒 色 土 器	环	135	72	35	5.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	C A-16	
	37 黒 色 土 器	环	123	85	31	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S D2202	歪み
	38 黒 色 土 器	环	130	66	28	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	B A-16	重ね焼痕跡
第27回	39 黒 色 土 器	环	130	80	31	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K497	
	40 黒 色 土 器	环	144	80	32	4.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K943	
	41 黒 色 土 器	环	122	70	26	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K73	
	42 黒 色 土 器	环	123	74		4.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K452	
	43 黒 色 土 器	环	140	85	34.5	4.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	E A-41	
	44 黒 色 土 器	环	136	64	33.5	4.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S D72	
	45 黒 色 土 器	环	143	96	33	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	東2面整理	
	46 黒 色 土 器	环	128	81	29	5.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K242	
	47 黒 色 土 器	环	130	80	32	4.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S P587	
	48 黒 色 土 器	环	130	72	31	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K664	
	49 黒 色 土 器	环	130	76	39	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	D A-16	
	50 黒 色 土 器	环	156	80	40	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K74	
	51 黒 色 土 器	环	140	80	37	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S D69	
	52 黒 色 土 器	环	124	76	30	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	E A-41	重ね焼痕跡
	53 黒 色 土 器	环	127.5	80	25	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K73	
	54 黒 色 土 器	环	127	72	38	3.5	ヘラ			B A-16	
	55 黒 色 土 器	环	133	84	33	3	ヘラ	ロクロ	ロクロ	C A-21	
	56 黒 色 土 器	环	141	88	29	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	北1面整理	
	57 黒 色 土 器	环	131	75	35	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K1028	
	58 黒 色 土 器	环	126	75	30	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	東2面整理	
	59 黒 色 土 器	环	133	64	33.5	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	北1面整理	
	60 黒 色 土 器	环	124	74	34	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	東2面整理	
	61 黒 色 土 器	环	137	90	35	6	ヘラ	ロクロ	ロクロ	E A-6	
	62 黒 色 土 器	环	120	66		4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K664	
	63 黒 色 土 器	环	140	90	31.5	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	B A-16	
	64 黒 色 土 器	环	126	72	32	3	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K73	
	65 黒 色 土 器	环	140	82		4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	B A-11	
	66 黒 色 土 器	环	123	63	24	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K73	
	67 黒 色 土 器	环	115	72	39	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	C A-21	
	68 黒 色 土 器	环	118	74	34	4.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	E A-6	
第28回	69 黒 色 土 器	环	121	75	32	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K242	
	70 黒 色 土 器	环	120	64	30	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K65	

表2 出土遺物観察表(2)

辨 別 回 数	器 種	器 形	実測値(mm)				底面部切離し	調 整 技 法	出 土 地	備 考
			口径	底径	器高	厚				
第28回	71	須 恵 器 环	122	72	29	3	ヘラ	ロクロ	ロクロ	AA-11
	72	須 恵 器 环	130	74	27	3	ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK74
	73	須 恵 器 环	125	80	32	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S P307
	74	須 恵 器 环	120	75	28	3	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K66
	75	須 恵 器 环	129	47.5	37.5	6	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K443
	76	須 恵 器 环	145	63	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S D661	
	77	須 恵 器 环	124	75	41	4.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K231
	78	須 恵 器 高台付环	156	98	44.5	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	79	須 恵 器 高台付环	86	45	30	3	ヘラ	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	80	須 恵 器 高台付环	75	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K1028
	81	須 恵 器 高台付环	78	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	BA-16
	82	須 恵 器 高台付环	73	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	CA-26.31
	83	須 恵 器 高台付环	81	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	84	須 恵 器 高台付环	72	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	CA-16
	85	須 恵 器 高台付环	122	80	45	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	東2面整理
	86	須 恵 器 高台付环	133	89	43.5	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	東2面整理
	87	須 恵 器 高台付环	110	66	47	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	CA-21
	88	須 恵 器 高台付环	119	65	44.5	5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	DA-11
	89	須 恵 器 高台付环	130	72	35	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K870
	90	須 恵 器 高台付环	102	65	45.5	4	ヘラ	ケズリ	ロクロ	S K939
第29回	91	須 恵 器 高台付椭	100	56	48	3	ヘラ	ロクロ	ロクロ	EA-16
	92	須 恵 器 高台付椭	60	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K861
	93	須 恵 器 高台付椭	54	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	CA-16
	94	須 恵 器 高台付椭	59	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	CA-21
	95	須 恵 器 椭	134	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K75.491
	96	須 恵 器 高台付椭	75	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K73
	97	須 恵 器 高台付椭	159	—	—	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K443
	98	須 恵 器 高台付椭	166	96	78.5	4.5	不明	ロクロ	ロクロ	S K76
	99	須 恵 器 高台付椭	134.5	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	100	須 恵 器 高台付环	68	—	—	—	回転糸	ロクロ	ロクロ	BA-16
	101	須 恵 器 高台付椭	80	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	東2面整理
	102	須 恵 器 高台付椭	—	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	BA-16
	103	須 恵 器 高台付椭	90	—	—	—	ヘラ	ロクロ	ロクロ	DA-16
	104	須 恵 器 椭	—	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S D79
	105	須 恵 器 椭	—	—	—	8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	FC-76
	106	須 恵 器 椭	—	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	東2面整理
	107	須 恵 器 椭	148	26	5	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K1111
	108	須 恵 器 椭	158	16	8	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	東2面整理
	109	須 恵 器 椭	—	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	北2面整理
	110	須 恵 器 椭	140	31	10	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	111	須 恵 器 椭	—	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	R P43
	112	須 恵 器 椭	157	35	5	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	北2面整理
	113	須 恵 器 椭	146	32	4	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K73
	114	須 恵 器 椭	—	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S D1152
	115	須 恵 器 椭	142	22	4	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K65
	116	須 恵 器 椭	140	26	6	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K65
	117	須 恵 器 椭	133	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	118	須 恵 器 椭	160	20	8	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	R P41
	119	須 恵 器 椭	156	26	7.5	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ	東2面整理
	120	須 恵 器 椭	150	—	—	11	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K93
	121	須 恵 器 椭	130	—	—	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K491
第30回	122	須 恵 器 环	118	65	—	3.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K73
	123	須 恵 器 环	126	59	36	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	FA-11
	124	須 恵 器 环	130	64	37	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	CA-16
	125	須 恵 器 环	120	25	31	4.5	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K73
	126	須 恵 器 环	126	55	31	3.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	CA-6
	127	須 恵 器 环	122	54	35.5	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	E A-41
	128	須 恵 器 环	126	59	42	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K62
	129	須 恵 器 环	121	47	45.5	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D937
	130	須 恵 器 环	125	56	38	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K73
	131	須 恵 器 环	135	65	37.5	3.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K960
	132	須 恵 器 环	123	52	40	3.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A-36
	133	須 恵 器 环	134	54	44	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	134	須 恵 器 环	132	48	42	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D1138
	135	須 恵 器 环	132	53	40	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K63
	136	須 恵 器 环	144	66	43	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	東1面整理
	137	須 恵 器 环	—	49	—	—	回転糸	ロクロ	ロクロ	R P42
	138	須 恵 器 环	136	50	39	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	139	須 恵 器 环	130	48	44	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K538
	140	須 恵 器 环	128	64	38.5	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	重ね焼痕跡

III 西谷地遺跡

表3 出土遺物觀察表(3)

標 団 №	器 標	器 形	実 測 値 (mm)				底部切離し	調 整 技 法 外 面 内 面	出 土 地	備 考
			口径	底径	器高	器厚				
第30回	141	須 恵 器 壺	坏	130	50	41	4	回転系	ロクロ ロクロ S K657	
	142	須 恵 器 高 台 付 棱	坏	150	70	80	6.5	回転系	ロクロ ロクロ D A-11	
	143	須 恵 器 高 台 付 棱	坏		69			回転系	ロクロ ロクロ C A-11	柱状高台
	144	須 恵 器 高 台 付 皿	126	59	24	5	回転系	ロクロ ロクロ S K73		
	145	須 恵 器 高 台 付 皿	137	72	38	5	回転系	ロクロ ロクロ S D72		
	146	須 恵 器 皿	皿	123	58	23	5	回転系	ロクロ ロクロ S K866	柱状高台
	147	須 恵 器 皿	皿	115	51	25	3.5	回転系	ロクロ ロクロ 北1面整理	柱状高台
	148	須 恵 器 皿	皿	124	68	16	5	回転系	ロクロ ロクロ B A-21	
	149	須 恵 器 皿	皿					ヘラ	ロクロ ハケ目 S K970	灰被り
	150	須 恵 器 皿	皿		82	31		ヘラ	ロクロ ロクロ 北2面整理	
第31回	151	須 恵 器 皿	皿		68			ヘラ	ロクロ ロクロ E A-21	灰被り
	152	須 恵 器 皿	皿		124			ロクロ	ロクロ 北1面整理	
	153	須 恵 器 皿	皿					ロクロ	ロクロ 北2面整理	灰被り
	154	須 恵 器 皿	皿					ロクロ	ロクロ S K943	灰被り
	155	須 恵 器 皿	皿	118		6.5		ロクロ	ロクロ S D1 自然釉	
	156	須 恵 器 皿	皿	141				ロクロ	ロクロ S K662	
	157	須 恵 器 皿	皿	212				ロクロ	ロクロ S D72	
	158	須 恵 器 皿	皿					タタキ	アテ痕 東1面整理	
	159	須 恵 器 皿	皿					ロクロ	ロクロ S D72	
	160	須 恵 器 不 明						ロクロ	ロクロ B A-11	
第32回	161	須 恵 器 皿	皿					ロクロ	ロクロ 東1面整理	灰被り
	162	須 恵 器 皿	皿	106				タタキ	アテ痕 B A-11	
	163	須 恵 器 皿	皿	110				ロクロ	ロクロ 北1面整理	
	164	須 恵 器 皿	皿					ロクロ	ロクロ C A-21	
	165	須 恵 器 皿	皿			11.5		タタキ	アテ痕 S K840	
	166	須 恵 器 皿	皿					ロクロ	ロクロ 北1面整理	
	167	須 恵 器 皿	皿					ロクロ	ロクロ 東1面整理	灰被り
	168	須 恵 器 鉢	鉢	308				ロクロ	ロクロ S D1214	
	169	須 恵 器 鉢	鉢	260				タタキ	アテ痕 S Dアゼ	
	170	須 恵 器 鉢	鉢					タタキ	アテ痕 北1面整理	灰被り
第33回	171	赤 燐 土 壺	坏	120	50	44	4.5	回転系	ロクロ ロクロ C A-11	
	172	赤 燐 土 壺	坏	130	45	32	5	ヘラ	ロクロ ロクロ S K65	
	173	赤 燐 土 壺	坏	124	46	35	4	回転系	ロクロ ロクロ S K66	
	174	赤 燐 土 壺	坏	132	50	46	4.5	回転系	ロクロ ロクロ S K928	
	175	赤 燐 土 壺	坏	124			6.5	ヘラ	ロクロ ロクロ S P252	
	176	赤 燐 土 壺	坏	134	44	37.5	4.5	回転系	ロクロ ロクロ S K74	
	177	赤 燐 土 壺	坏	132	60	43	4	回転系	ロクロ ロクロ S K662	
	178	赤 燐 土 壺	坏	126	64	36	4	ヘラ	ロクロ ロクロ D A-11	
	179	赤 燐 土 壺	坏	110	52	48	4	回転系	ロクロ ロクロ D A-16	
	180	赤 燐 土 壺	坏	104	45	43	5.5	回転系	ロクロ ロクロ 水路南1	
第34回	181	赤 燐 土 壺	坏	118	46	64.5	4.5	回転系	ロクロ ロクロ D A-16	
	182	赤 燐 土 壺	坏	102	42	45	5	回転系	ロクロ ロクロ S K113	
	183	赤 燐 土 壺	坏	100	48	50	4	回転系	ロクロ ロクロ 東2面整理	
	184	赤 燐 土 壺	器	94	45	57	4.5	回転系	ロクロ ロクロ S K73	
	185	赤 燐 土 壺	坏	114	47	45	3.5	回転系	ロクロ ロクロ C A-21	
	186	赤 燐 土 壺	坏	166	68	60.5	4	回転系	ロクロ ロクロ S K63	
	187	赤 燐 土 壺	坏	143	63	68	6	回転系	ロクロ ロクロ S K538	
	188	赤 燐 土 壺	坏	150	54	63	5	回転系	ロクロ ロクロ S K62	
	189	赤 燐 土 壺	高 台 付 棱	150	64	60	5.5	回転系	ロクロ ロクロ D A-21	
	190	赤 燐 土 壺	坏	200	82	75	7	回転系	ロクロ ロクロ S K12	
第35回	191	赤 燐 土 壺	坏	118	48	45	4	回転系	ロクロ ロクロ 北1面整理	R P107
	192	赤 燐 土 壺	坏	105	44	49.5	4	回転系	ロクロ ロクロ D A-11	
	193	赤 燐 土 壺	坏	130	46	50	4.5	回転系	ロクロ ロクロ S K12	
	194	赤 燐 土 壺	坏	142	58	69.5	4.5	回転系	ロクロ ロクロ 北1面整理	
	195	赤 燐 土 壺	坏	128	52	55	4	回転系	ロクロ ロクロ S K928	
	196	赤 燐 土 壺	坏	126	60	57.5	4	回転系	ロクロ ロクロ S K928	
	197	赤 燐 土 壺	坏	138	57	53.5	4	回転系	ロクロ ロクロ 東1面整理	
	198	赤 燐 土 壺	坏	128	57.5	48.5	5.5	回転系	ロクロ ロクロ D A-21	油煙付着
	199	赤 燐 土 壺	坏	132	50	41	4	回転系	ロクロ ロクロ S K656	
	200	赤 燐 土 壺	坏	119	45	50	4.5	回転系	ロクロ ロクロ D A-21,16	
第36回	201	赤 燐 土 壺	坏	124	56	48	5	回転系	ロクロ ロクロ S P403	
	202	赤 燐 土 壺	坏	136	55	49	4.5	回転系	ロクロ ロクロ S K234	
	203	赤 燐 土 壺	坏	128	48	49	4.5	回転系	ロクロ ロクロ S D1214	
	204	赤 燐 土 壺	坏		57			回転系	ロクロ ロクロ 北1面整理	
	205	赤 燐 土 壺	坏	126	48	52	4	回転系	ロクロ ロクロ S K538	
	206	赤 燐 土 壺	坏	122	50	46.5	4	回転系	ロクロ ロクロ D A-6	油煙付着
	207	赤 燐 土 壺	坏	133	48	54	3.5	回転系	ロクロ ロクロ S D1214	
	208	赤 燐 土 壺	坏	127	46	53	4	回転系	ロクロ ロクロ D A-16	
	209	赤 燐 土 壺	坏	130	65	50	4.5	回転系	ロクロ ロクロ S K657	
	210	赤 燐 土 壺	坏	120	70	45	5	ヘラ	ロクロ ロクロ S K1028	

表4 出土土器觀察表(4)

辨認 No.	器種	器形	実測値(mm)				底部切離し	調整技法 外面 内面	出土地	備考
			口径	底径	器高	器厚				
第35回	赤燒土器	环	116	48	40	3.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	東1面整理
	赤燒土器	环	131	58	51	3.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	東3面整理
	赤燒土器	环	126	48	45	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K93
	赤燒土器	环	129	48	48	3.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	東1面整理
	赤燒土器	环	103	53	47	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	D E - 6
	赤燒土器	环	108	54	42.5	3	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K73
	赤燒土器	环	130	50	43	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K62
	赤燒土器	环	130	50	42.5	6	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 6
	赤燒土器	环	128	57	48.5	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K663
	赤燒土器	环	126	52	50	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	P R 48
	赤燒土器	环	128	58	48	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D69
	赤燒土器	环	124	56	46	3.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K65
	赤燒土器	环	132	56	46.5	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K60
	赤燒土器	环	113	50	48	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	C A - 6
	赤燒土器	环	124	58	48	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 11
	赤燒土器	环	125	49	56	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K68
	赤燒土器	环	114	40	47	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K796
	赤燒土器	环	122	48	51	6	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 21
	赤燒土器	环	119	40	47.5	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 16
	赤燒土器	环	128	44	51.5	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	C A - 6
	赤燒土器	环	126	51	44	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K243
	赤燒土器	环	126	56	51	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K12
	赤燒土器	环	130	46	48	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K63
	赤燒土器	环	122	48	56	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 16
	赤燒土器	环	132	52	50.5	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K12
	赤燒土器	环	120	48	50	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K1186
	赤燒土器	环	132	48	64	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 21
	赤燒土器	环	126	44	50	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K12
第36回	赤燒土器	环	140	56	55	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 16
	赤燒土器	环	119	45	51	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K12
	赤燒土器	环	131	45	42	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K74
	赤燒土器	环	126	50	46	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K74
	赤燒土器	环	124	44	56	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	赤燒土器	环	132	48	53	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D1117
	赤燒土器	环	151	56	52	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K657
	赤燒土器	皿	126	51	24	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K657
	赤燒土器	皿	130	44	33.5	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 16
	赤燒土器	皿	126	45	31	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K657
	赤燒土器	皿	125	45	36	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K12
	赤燒土器	皿	136	45	37.5	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	赤燒土器	皿	118	60	5	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	E A - 41
	赤燒土器	皿	128.5	42	33	3.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	赤燒土器	皿	127	44	33	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K63
	赤燒土器	皿	130	48	31	6.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K12
	赤燒土器	高台付皿	130	58	31.5	6	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K73
	赤燒土器	皿	59	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K74
	赤燒土器	高台付皿	126	55	27	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K443
	赤燒土器	皿	130	50	27	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 21
	赤燒土器	高台付皿	136	63	20	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K65
	赤燒土器	高台付皿	122	68	18.5	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	C A - 6
	赤燒土器	高台付皿	129	58	20	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	D A - 6
	赤燒土器	皿	121	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K73
	赤燒土器	高台付皿	131	66	20	5	静止糸	ロクロ	ロクロ	S D65
	赤燒土器	高台付皿	56	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	重み
第37回	赤燒土器	甕	76	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D1150
	赤燒土器	甕	75	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K73
	赤燒土器	甕	104	58	59	3.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K1028
	赤燒土器	甕	70	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K65
	赤燒土器	甕	-	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	赤燒土器	甕	-	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K928, 662
	赤燒土器	甕	-	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	赤燒土器	甕	111	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	東2面整理
	赤燒土器	甕	-	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	北1面整理
	赤燒土器	甕	398	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K662
	赤燒土器	甕	290	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	E P2371
	赤燒土器	甕	152	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	C A - 31
	赤燒土器	甕	-	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S P244
	赤燒土器	甕	232	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K74
	赤燒土器	甕	130	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	S K74
	赤燒土器	甕	244	-	-	-	回転糸	ロクロ	ロクロ	北1面整理

表5 出土土器觀察表(5)

擇 圖 №	器 標	器 形	実 沢 値(mm)				底部切 露し	調 整 技 法	出 土 地	備 考	
			口径	底径	器高	器厚					
第38回	281	赤 焼 土 器	甕	183				ロクロ	ロクロ	S K875	
	282	赤 焼 土 器	甕	144				ロクロ	ロクロ	B A-11	
	283	赤 焼 土 器	甕	220				ロクロ	ロクロ	S P84	
	284	須 恵 器	甕	120	78	38	4	ヘラ	ロクロ	ロクロ	S K261
	285	須 恵 器	甕		51			回転系	ロクロ	ロクロ	S P1128
	286	須 恵 器	甕		76			ヘラ	ロクロ	ロクロ	B A-21
	287	須 恵 器	甕					ロクロ	ロクロ	東2面整理	底部 墓室
	288	赤 焼 土 器	甕					ロクロ	ロクロ	S P469	内面 墓室
	289	赤 焼 土 器	甕					ロクロ	ロクロ	D A-16	外面 墓室
	290	赤 焼 土 器	甕	115	48	54	4	回転系	ロクロ	ロクロ	S P402
第39回	291	か わ ら け	甕	110	62	25	5.5		X-0		
	292	か わ ら け	甕			15	5		東2面整理		
	293	か わ ら け	甕	83	48	10	4		東2面整理		
	294	か わ ら け	甕	115		35	4		S K773	重み大	
	295	陶 器	鉢		144				ロクロ	ロクロ	東3粗掘
	296	陶 器	高 台付 桶	111	46	67	3.5		ロクロ	ロクロ	唐津燒?
	297	製 塙 土 器							S K928		
	298	製 塙 土 器							S K73		
第41回	299	須 恵 器	甕	130	50	40	4.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69E
	300	須 恵 器	甕	128	48	40	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69E
	301	須 恵 器	甕		57	54			ロクロ	ロクロ	S D69E
	302	須 恵 器	高 台付 甕		52			回転系	ロクロ	ロクロ	S D69E
	303	須 恵 器	甕								S D69E
	304	赤 焼 土 器	甕	129	58	60	6	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69E
	305	赤 焼 土 器	甕	170	60	59	6	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69E
	306	赤 焼 土 器	甕	124	51	50	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69E
	307	赤 焼 土 器	甕	130	42	46	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69E
	308	赤 焼 土 器	甕	120	42	36	4.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69E
第42回	309	赤 焼 土 器	甕	128	44	34	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69E
	310	赤 焼 土 器	甕	215					タタキ ハケ目	S D69E	
	311	須 恵 器	甕	130	48	45	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	312	須 恵 器	甕	98					ロクロ	ロクロ	S D69W
	313	須 恵 器	甕						ロクロ	ロクロ	ねじり痕跡?
	314	須 恵 器	甕	90					ロクロ	ロクロ	灰被り
	315	須 恵 器	甕		105				ロクロ	ロクロ	S D69W
	316	赤 焼 土 器	甕	130	45	62	4.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	317	赤 焼 土 器	甕	129	50	53	4.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	318	赤 焼 土 器	甕	132	50	53	4.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
第43回	319	赤 焼 土 器	甕	133	49	55	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	320	赤 焼 土 器	甕	128	55	56	4.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	321	赤 焼 土 器	甕	127	48	47	4.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	322	赤 焼 土 器	甕	128	50	47	6	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	323	赤 焼 土 器	甕	131	50	51	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	324	赤 焼 土 器	甕	129	51	46.5	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	325	赤 焼 土 器	甕	125	51	52	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	326	赤 焼 土 器	甕	134	52	45	6.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	327	赤 焼 土 器	甕	126	50	52	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	328	赤 焼 土 器	甕	160	50	68	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
第44回	329	赤 焼 土 器	甕	146	65	62	6.5	静止系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	330	赤 焼 土 器	甕	128	55	52.5	5.5	静止系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	331	赤 焼 土 器	甕	128	54	52	6	回転系	ロクロ	ロクロ	S D67.6W
	332	赤 焼 土 器	甕	120	46	51	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	333	赤 焼 土 器	甕	127	50	54	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	334	赤 焼 土 器	甕	126	49	50	6	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	335	赤 焼 土 器	甕	165	55	61	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	336	赤 焼 土 器	甕	138	45	49	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	337	赤 焼 土 器	甕	123	54	51	4.5	静止系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	338	赤 焼 土 器	甕	128	55	52.5	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
第45回	339	赤 焼 土 器	甕	127	44	60	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	340	赤 焼 土 器	甕	128	45	51	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	341	赤 焼 土 器	甕	131	53	44	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	342	赤 焼 土 器	甕	127	49	59	4	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	343	赤 焼 土 器	甕	131	53	51	4.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	344	赤 焼 土 器	甕	124	55	47	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	345	赤 焼 土 器	甕		68		6	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	346	赤 焼 土 器	甕	132	52	49	5.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	347	赤 焼 土 器	甕	131	51	50	4.5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	348	赤 焼 土 器	甕	122	44	49	6	回転系	ロクロ	ロクロ	油煙付着
第46回	349	赤 焼 土 器	甕	168	56	65	6	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W
	350	赤 焼 土 器	甕	129	45	49	5	回転系	ロクロ	ロクロ	S D69W

表6 出土土器觀察表(6)

擇 図 №	器 標	器 形	実測 値(mm)				底部切離し	調査 振法	出 土 地	備 考	
			口径	底径	器高	厚さ					
第43回	351	赤 焼 土 壺	壺		75			回転糸	ロクロ	S D69W	
	362	黒 色 土 壺	壺	191				ロクロ	ロクロ	S D69W	
	353	赤 焼 土 壺	壺		65			ロクロ	ロクロ	S D69W	
	354	赤 焼 土 壺	高台付壺		54			回転糸	ロクロ	ロクロ	S D69W
	355	赤 焼 土 壺	壺	130	46	36	4.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D69W
	356	赤 焼 土 壺	壺	124	41.5	32	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D69W
	357	赤 焼 土 壺	壺	124	44	30	4	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D69W
	358	赤 焼 土 壺	壺	136	52	31	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D69W
	359	赤 焼 土 壺	壺	130	49	30	5.5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D69W
	360	赤 焼 土 壺	壺	128	54	26	5	回転糸	ロクロ	ロクロ	S D69W
	361	赤 焼 土 壺	壺	150				ロクロ	ロクロ	SD69W	
	362	赤 焼 土 壺	壺	280				ロクロ	ロクロ	S D69W	
	363	赤 焼 土 壺	壺	140				ロクロ	ロクロ	S D69W	
	364	赤 焼 土 壺	壺	148				ロクロ	ロクロ	S D69W	
	365	赤 焼 土 壺	壺	137				ロクロ	ロクロ	S D69W	

土製品・石製品觀察表

擇 図 №	種 別	実測 値(mm)			出 土 地	備 考				
		長さ	幅(径)	厚さ						
第39回	366	土 製 品	土 壺	壺	40	29	12	S D99		
	367	土 製 品	土 壺	壺	48	39	13	東3面整埋		
	368	土 製 品	土 壺	壺	39.5	28	11.5	東2面整埋		
	369	土 製 品	土 壺	壺	48	12	6.5	北1面整埋		
	370	土 製 品	土 壺	壺	54	16	8	東1面整埋		
	371	石 製 品	石 不 明	口	11	19	9	北2面敷理		
	372	土 製 品	羽 口				東1面整埋			
	373	土 製 品	羽 口				北1面整埋			
	374	土 製 品	羽 口				CA-11			
	375	土 製 品	塑 人 形	34	20	12	EA-46	照比溝		
	376	石 製 品	磨 石	石	96	98	29	S K928		
	377	石 製 品	磨 石	石	67	31	16.5	DC-41		
	378	石 製 品	磨 石	万 明	77	55	6	東3面整埋		
第40回	379	石 製 品	不 明	石	98.2	26	17	S K316		
	380	石 製 品	不 明	石	77.5	21	11.5	S D69		
	381	石 製 品	不 明	石	57	18	5	EA-16		
	382	石 製 品	不 明	石	61	31	14.5	東2面整埋		
	383	石 製 品	石 鹿				S D72			
	384	石 製 品	籌 石(蟲)	石	25	17.5	6.5	S K773		
	385	石 製 品	籌 石(白)	石	22.5	11.5	7	S K773		
	386	石 製 品	砥 石	石	53	48	20	S D21		
	387	石 製 品	砥 石	石	40	34	19	EA-16		
	388	石 製 品	砥 石	石	35	22	16	BA-26		
	389	石 製 品	砥 石	石	118	55.5	16.5	EA-96		
	390	石 製 品	砥 石	石	44	43	25	CA-6		
	391	石 製 品	砥 石	石	123	26	21	東3面整埋		
	392	金 属 製 品	不 明	金	95	15	12	北1面整埋		
	393	金 属 製 品	刀 子	金	50	21	16	北1面整埋		
	394	金 属 製 品	舞	金	138	43	12	SG4		
	395	金 属 製 品	不 明	金	41	77	19	北1面整埋		
	396	金 属 製 品	不 明	金	80	30	17	CA-6		
	397	金 属 製 品	舞 盔	金		12	1	EA-31		
	398	金 属 製 品	錢 貨	金		26.3	1.7	FA-6	裏水道室2枚施置	
第43回	399	土 製 品	五 笹 ?	土	150	137	25	S D69		

5まとめ

第2次調査は、6ヶ所に分かれた調査区、計9,080m²を発掘した。その結果、平安時代の遺構を主体として、近代以降ほぼ現代の畑作に伴うと考えられる遺構が検出された。

近・現代に属するものとしては、昭和時代、県道から下川の集落まで水を供給していた簡易水道の中間水量調節枠ではないかと考えられる施設や、畑の境界線とおぼしき溝跡などがある。ほかには近世以降の歟跡など、耕作に関わるものと考えられる浅い溝状遺構が無数に検出された。歟の跡と思われる溝からは、1974年の日付が見られる腕時計用のカレンダーも出土している。今次調査において唯一絶対年代が判明した遺構である。

平安時代に属する遺構としては、7棟の掘立柱建物跡、区画施設と思われる逆台形状を呈する溝跡、大量の土器片が出土し、土器棄て場と考えられる溝跡、そしてさまざまな深さや大きさをもった、性格不明の土壤などがある。河川跡は、土層断面観察の結果、時期の異なった川が何らかの理由によって流路を東に変えていったことがわかった。出土した土器や鎌の形などから、時期は古代の範疇に納まるものと考えられる。

遺物はコンテナ65箱ほどが出土した。出土遺物は、土器が最も多く、出土量のほとんどを占める。他には少量の土製品や石製品、鉄製品などがある。

土器は赤焼土器が最も多く、次いで須恵器、黒色土器、土師器が見られる。赤焼土器はヘラ切りのものが若干出土しており、古い様相を示す。須恵器はヘラ切りが多く、糸切りは量的に少ない。この両者の出土量の差は、9世紀代の前半期を中心とした時代に、この集落が営まれたことを物語っているものと考えられる。

土製品では、刺網や投網の沈子として用いられたのではないかと考えられる土鍤が出土している。土鍤は昨年度の第1次調査でも、またすぐ北側の西ノ川遺跡でも出土しており、海の近くに立地する集落のあり方を示唆するものと考えられる。

石製品では砥石が出土しており、SG4川跡から出土した鎌などと併せて考えると興味深いものがある。

近世以降に属する遺物として、恵比須の型押人形や煙管、錢貨などがある。恵比須の型押人形は、大黒とともに近世以降縁起物などとして多用されており、この恵比須も江戸期の所産と考えられる。また煙管は雁首が現行のものと異なり、首が細く火皿が偏平なもので、これも江戸期の所産と考えられる。

遺構の重なり合いや出土遺物を概観すると、主体的には9世紀前半期から10世紀前半代に中心をおく集落であることが考えられるが、遺物の中には奈良時代後半期にまで遡り得る様相が見え、或いは集落の存続範囲をもう少し遡らせて考えても良いのかもしれない。また、ごく少量ではあるが古墳時代まで遡り得る遺物が見える。これがこのまま西谷地の集落の始源を物語るものとは言い難いが、近くの五百刈遺跡の存在をも視野に入れ、下川地区の集落の変遷を検討する必要があろう。

IV 西ノ川遺跡

1 調査の経過

調査の開始にあたって、ほ場整備工事の施工図に従い、調査区を北西から南東にかけて横断する新設の農道の北辺を基準として、 $5\text{m} \times 5\text{m}$ を単位とするグリッドを設定した。グリッドの南北軸は磁北から $40^{\circ}00'$ 東に振れる。なお、南北軸に北から1~40の番号を、東西軸に西からA~Zの記号を割り当てた(第46図)。

次に重機械を使用して表土を $30\sim60\text{cm}$ 除去し、その後、面整理・遺構検出・遺構精査・記録作業を行った。

今回の調査は、過去に削平を受けておらず、周囲の水田面より高くなっている畠地部分を対象としたため、調査区の形状が不整形かつ分断された形となった(第45・46図)。対象地区の形状と調査の効率を考慮し、南からA区(750m^2)・B区(800m^2)・C($1,840\text{m}^2$)・D区($1,050\text{m}^2$)・E区(360m^2)と区切り、この順で調査を進めることとした。なおB区とC区の境界が、上述のグリッド設定の基準となった新設予定の農道の計画線である。

2 遺跡の概観

概観 現在、本遺跡のすぐ西側には幅約 500m 、高さ約 $60\sim65\text{m}$ の庄内砂丘が存在し、その東麓を遺跡の名称の由来となった「西ノ川」が、大山の下池に源を発し、南西から北東に流れている。

本遺跡で生活が営まれた平安時代には、海岸線が現在より東に入り込んでおり、砂丘もまだ形成途上にあったと考えられている。

「西ノ川」も記録に登場するのは江戸時代初期からであり(大山川を経て酒田湊まで下川地区の年貢米を輸送する舟運に利用したとの記録がある。)、平安時代には存在していない。

また、現在のように平坦な水田地帯として利用される以前は、微高地と低湿地が入り組んだ複雑な地形を呈していたと考えられている。

こうしたことを見まえ、本遺跡の調査にあたっては、現存の畠地が複雑な形状を示すだけに、本来の地形がどの程度保たれているのかを把握することが最初の課題であった。

表土除去・面整理を終えた時点で、各区の周辺部幅 $1\text{m}\sim1.5\text{m}$ 程は後世の「畠寄せ」によって攪乱をうけていること、特にC区の東部と西部、D区の東部に天地返しにより調査不能の部分が広範囲に存在することが明らかになった。第46図で攪乱・残土置き場と表記した部分がそれである。従って、調査はこれらの部分を除外した範囲を対象として行わざるを得ないこととなった。

基本層序 基本的な層序は第44図の通りである。I層からII層にかけて、搅乱または客土・畠寄せに伴うと思われる、古代から近世にいたる幅広い年代の遺物が含まれていた。

遺構の検出面はIV層直上であった。区によってはI層からIII層の厚さが1m近くになる部分もあったが、遺構の検出面の標高は、各区でほとんど高低差がなく10.7~10.9mで、周囲の現在の水田面とほぼ同じである。

遺構の分布 遺構は、調査区全体に分布し、総計で1,000基以上を数えるが、遺物を伴わざごく新しい時代の農耕等によると思われるものも多い。

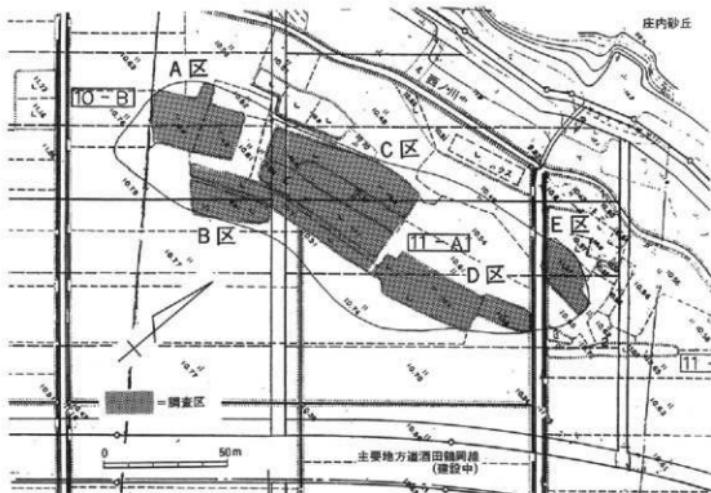
また各区が分断され、かつ幅も限定されるため、面的な広がりの確認も困難であった。ただし、各区で建物跡・井戸跡等が検出されていること、また調査区の縁辺部でも建物跡などが検出されていること、などを考え合わせると、本遺跡の広い範囲で生活が営まれており、既に削平され遺跡の範囲外となっている周囲の水田にまで集落の広がりがあったことは推定できる。

	V	V
I		
II		
III		
IV		

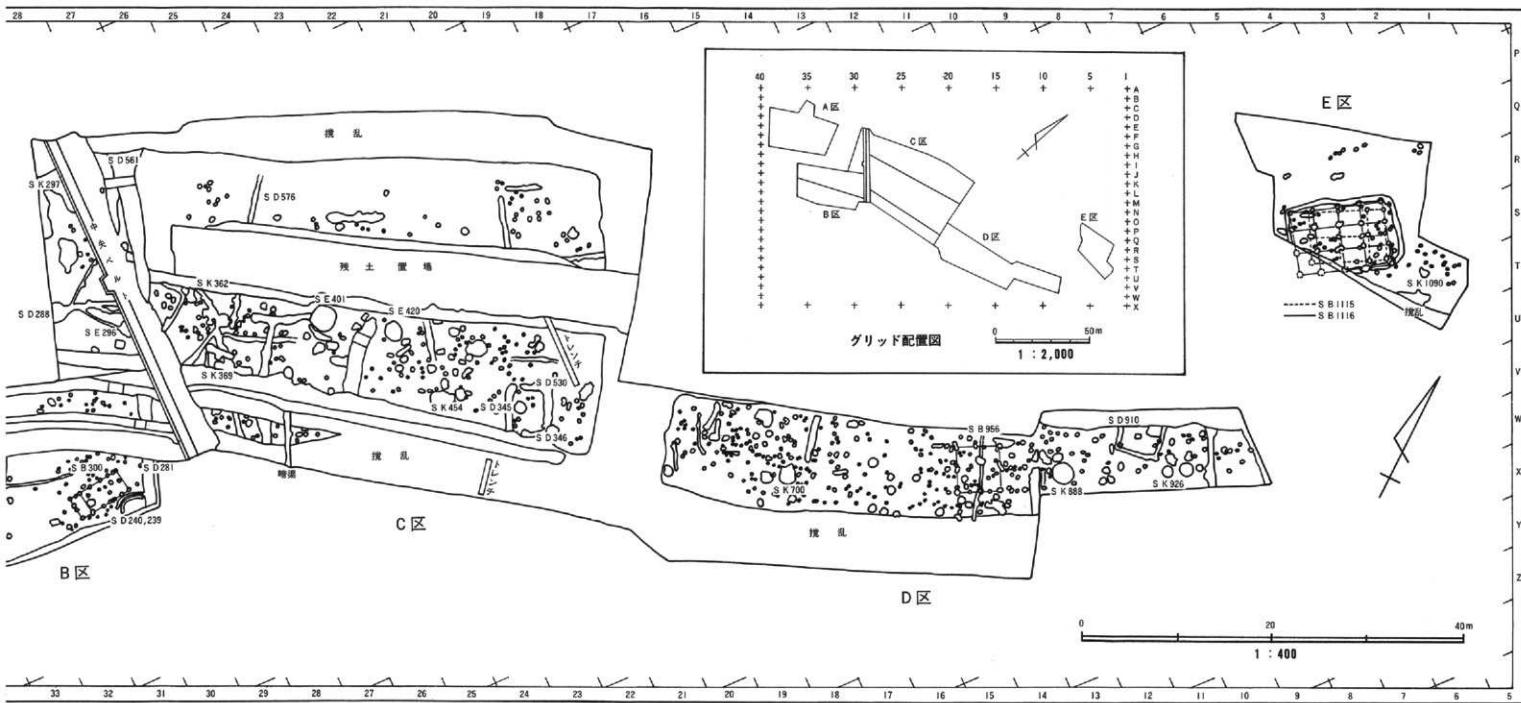
50cm

I	10Y R3/4 暗褐色シルト
II	10Y R4/4 褐色シルト
III	10Y R2/3 黒褐色シルト (IV層の土をブロック状に含む)
IV	10Y R5/6 黄褐色シルト

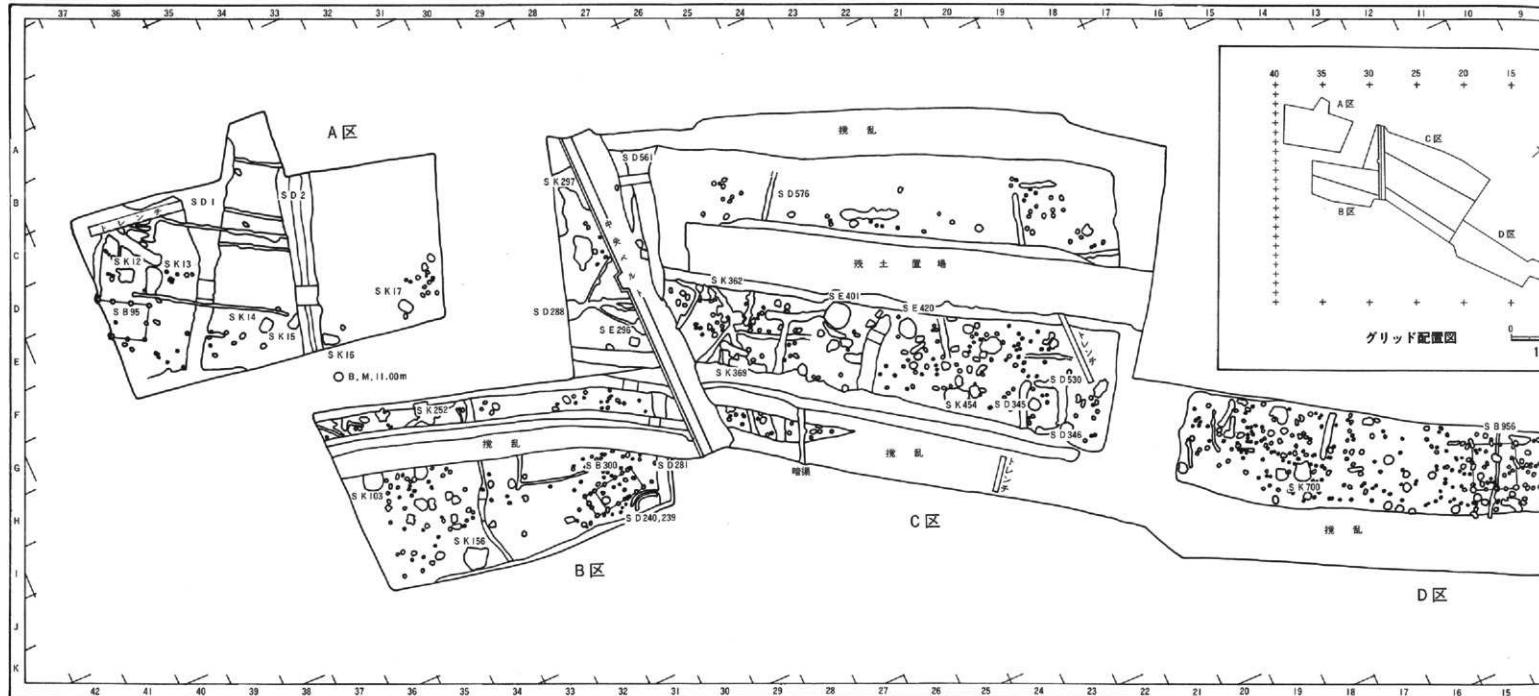
第44図 土層柱状図



第45図 調査概要図 (S = 1 : 2,000)



第46図 遺構配図



3 検出された遺構

遺構としては、掘立柱建物跡5棟、井戸跡3基の他、溝跡・土壌など総計1,000基以上が検出された。以下種別に概要を述べる。

(1) 建物跡（第47図・48図）

S B 95掘立柱建物跡 A区南西端、38-E・39-Eグリッドにかかる、梁行二間・桁行三間の東西棟の建物である。ただし、東西端が調査区外にかかるため桁行は四間以上の可能性もある。主軸方位はN-72°-Eである。柱間は梁行・桁行とも6尺の等間と捉えられる。

掘り方は径20~30cm、深さ20~30cmを測る。柱根・礎板等は検出されていない。また遺物も検出されていない。

S B 300掘立柱建物跡 B区東端、30-L・31-M・31-L・31-Mグリッドにかかる、梁行一間・桁行四間の南北棟の建物である。主軸方位はN-30°-Eである。柱間は梁行・が8尺、桁行が4尺と捉えられるがやや不揃いである。また、南面に小柱穴が並び、何らかの扇形的な施設と考えられる。

掘り方は、径20~30cm、深さ20~30cmを測る。柱根・礎板等は検出されていない。この建物に係っては、S K190で29点、計552gの鉄滓、S K298で鉄滓の塊（図版46No53、5.8kg）、S K299で火熱を受けた痕跡等が検出されている。B区では、表土除去・面整理の過程で、鉄滓計約3kg・轆の羽口の破片が5点検出されていることなどを考え合わせると、小鍛冶の工房的な建物と考えられる。

S B 956掘立柱建物跡 D区中央13-S・13-T・14-S・14-Tグリッドにかかる、梁行二間・桁行二間の南北棟の建物である。主軸方位はN-30°-Wである。柱間は梁行が7尺、桁行が8尺等間と捉えられる。

掘り方は、径30cm前後、深さ30~60cmを測る。柱根は検出されていないが、8基の柱穴のうち7基から礎板が検出された。遺存状態の良好なもののみ図化した。（第57図100・101）樹種同定の結果、杉材と判明した。なお、他の遺物は検出されていない。

S B 1115掘立柱建物跡 E区5-R・5-S・6-R・6-Sグリッドにかかる、東西三間南北二間の純柱建物で、倉庫跡と考えられる東西棟である。ただし、南西部が調査区外にかかり、南面西側の柱穴2基が検出不能であった。主軸方位はN-60°-Eである。柱間は南北が9尺、東西が10尺で、東端のみ6尺である。

掘り方は径30cm前後、深さ30cm前後を測る。柱根・礎板等は検出されていない。また、遺物も検出されていない。

この建物跡に伴うと考えられる雨落ち溝（SD1077）が検出されている。幅50~60cm、深さ20cm前後で、やや不整形ではあるが、調査区外にかかる部分も含めて全周を巡っていると考えられる。

S B 1116掘立柱建物跡 S B1115建物跡と完全に重複した形で検出された。東西四間・南北三間の純柱建物で、倉庫跡と考えられる東西棟である。ただし、南西端が調査区外に

かかり、想定される柱穴 4 基が検出不能であった。主軸方位は N-57°-E である。柱間は東西が 8 尺、南北も 8 尺を基本とするが、北端列のみ 7 尺である。

掘り方は径約 30~50cm、深さ 50~100cm を測る。柱根が 4 基の柱穴 (S P 1005・1011・1016・1044) から検出されており、うち 2 点 (第 58 図 110・111) を図示した。特に第 58 図 111 は、断面が 1 辺 13~14cm の正方形に近い形態を残しており、最下部には礎板と組み合わせたとも考えられる痕跡を残す。遺物は S P 1014・1017 から土師器片 4 点・赤陶土器片 1 点が検出されている。

S B 1115 との前後関係は、S B 1115 に伴うと考えられる雨落ち溝 (S D 1077) を S B 1116 の柱穴が切っていることから、S B 1115 → S B 1116 であり、S B 1116 の時期には S D 1077 は機能していなかったと考えられる。

(2) 井戸跡 (第 49 図)

S E 296 井戸跡 B 区 29-I・29-J グリッドに位置する。掘り方はほぼ円形で、径約 185 cm と考えられるが、中央ベルトに伴う排水溝により、ちょうど半蔵された形となっている。深さは約 120cm である。当初、土壤として精査に入ったが、掘り方の傾斜が急であること、最下層から湧水したことなどから、井戸枠等の施設は認められないものの、井戸跡と認定したものである。遺物は検出されていない。

S E 401 井戸跡 C 区 ほぼ中央 25-K グリッドに位置する。掘り方はほぼ円形で、径約 265 cm、深さ 130cm を測る。当初、土壤として精査に入ったが、最下層から湧水したことなどから、井戸枠等の施設は認められないものの、井戸跡としたものである。遺物は磁石が 1 点 (第 55 図 54) 検出されている。また、最下層から炭化した初状の塊が出土しており、植物珪酸体分析により、イネであるとの結果を得ている。

S E 420 井戸跡 C 区 ほぼ中央 23-L・24-L グリッドに位置する。掘り方はほぼ円形で、径 190cm ほどであるが、北東方向のみ若干ふくらみをもつ。深さは 165cm ほどである。

井戸枠は一辺約 90cm の正方形で、側板は幅 7~22cm、長さ 13~58cm、厚さ 1~2.5cm の板を一辺に 5~6 枚、縦位に配列しており、それを外側から横桟でおさえる構造となっている。横桟は、長さ 92~95cm、幅 6.5~9.5cm、厚さ 3cm 前後の角材で、東西の材は両端が凸型、南北の材は両端が凹型に加工され、四隅で組まれている。もう一組、ほぼ同規格と考えられる横桟の材がより上層から検出されているが、原位置をとどめておらず、詳細は不明である。なお樹種同定の結果、杉材を使用していることが判明した。

井戸枠のほぼ中央下部に三重の曲物を用いた井戸眼が配置されていた。最も内側の曲物は幅 36cm、厚さ 6~7mm の柾目板の内側に 1~1.5cm 間隔に穿孔を入れ、両端約 12cm を重ね合わせて、内径約 52cm に丸めてある。重ね目は幅 1.5~1.8cm の樹皮で縫い合わされている。その外側には幅 27cm の柾目板を同様に加工した曲物が、取り巻く形で設置され、さらに最も外側に、幅 8cm の柾目板を同様に加工した曲物が「たが」状に上下二列配置されていたようである。断面の観察では、掘り方と井戸枠内部の埋土とに明確な境界線を引くことができるから、上部まで井戸枠が組まれていたと考えられるが、廃棄の際に上部を取り

去ったものと推定される。

遺物は、珠洲系の壺（第55図55・56）擂鉢の破片（第55図57）、土錠（第55図58）、他に土師器・須恵器・赤焼土器の破片等十数点が出土している。

（3）溝跡（第46・50図）

S D 1・2溝跡 A区で南東から北西へ流下したと推定される溝跡が2条（S D 1・2）検出されている。S D 1は幅250cm前後・深さ40cm前後、S D 2は幅300cm前後・深さ40cm前後を測る。部分的な精査しかしていないが、S D 1からは（第52図1～4）のような土師器・須恵器の破片が出土して入る。

S D 281・561溝跡 B区とC区にまたがり、結果的に中央ベルトに分断される形となってしまったが、S D 1・2とほぼ平行し、同方向に流下したと推定される溝跡である。幅120～150cm・深さ50cm前後を測る。遺物は土師器の破片（第53図23）須恵器の壺（第53図24）蓋（第55図63）赤焼土器の壺（第53図25～27）などが出土しているが、密度は高くなっている。

S D 288溝跡 B区29—I・30—Iグリッドに位置し、北東から南西に流下したと推定される。幅は最大で190cm、深さは最深部で約60cmである。遺物は、土師器の壺（第53図28）須恵器の壺（第53図29）赤焼土器の壺（第53図30～32）等、細片まで総計すると295点出土しており、本遺跡の遺構の中で最も多い。他に鉄滓が10点（計230g）出土している。なお、中世以降の土器類は出土していない。

S D 239・240溝跡 B区30—Mグリッドに位置する。幅25cm前後、深さ15cm前後で、並行して二重に畳むような状態を示す。湾曲の内側に、柱穴とも考えられるS P 237・238がある。この両者を結ぶラインを一辺とする建物跡が南東方向にかけて存在した可能性があり、それに伴う溝跡とも考えられるが、調査区外にかかるため検証不可能であった。

他に、S D 345・346・910など、一辺数mの正方形形状に巡る溝状の遺構もあったが、遺物を伴わず、周囲の遺構との関係もはっきりせず、性格は不明である。

（4）土壤（第50・51図）

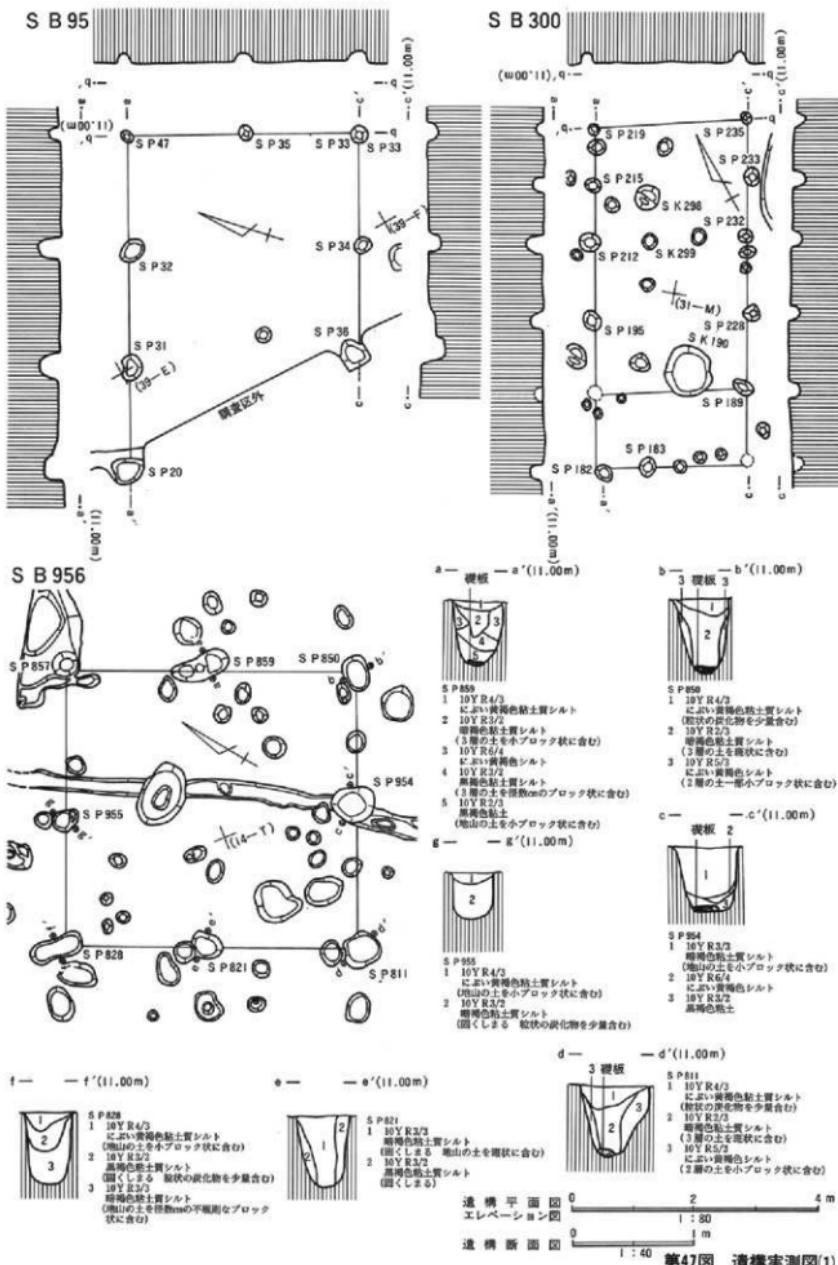
S K 16土壤 A区34—Gグリッドに位置する。長径170cm・短径100cmの不整橢円形で、深さ約20cmで底面は平坦である。珠洲系の擂鉢（第52図5）が出土している。同様の形状・規模を示すものとして、S K 12・13・14・15・17などがA区に集中している。

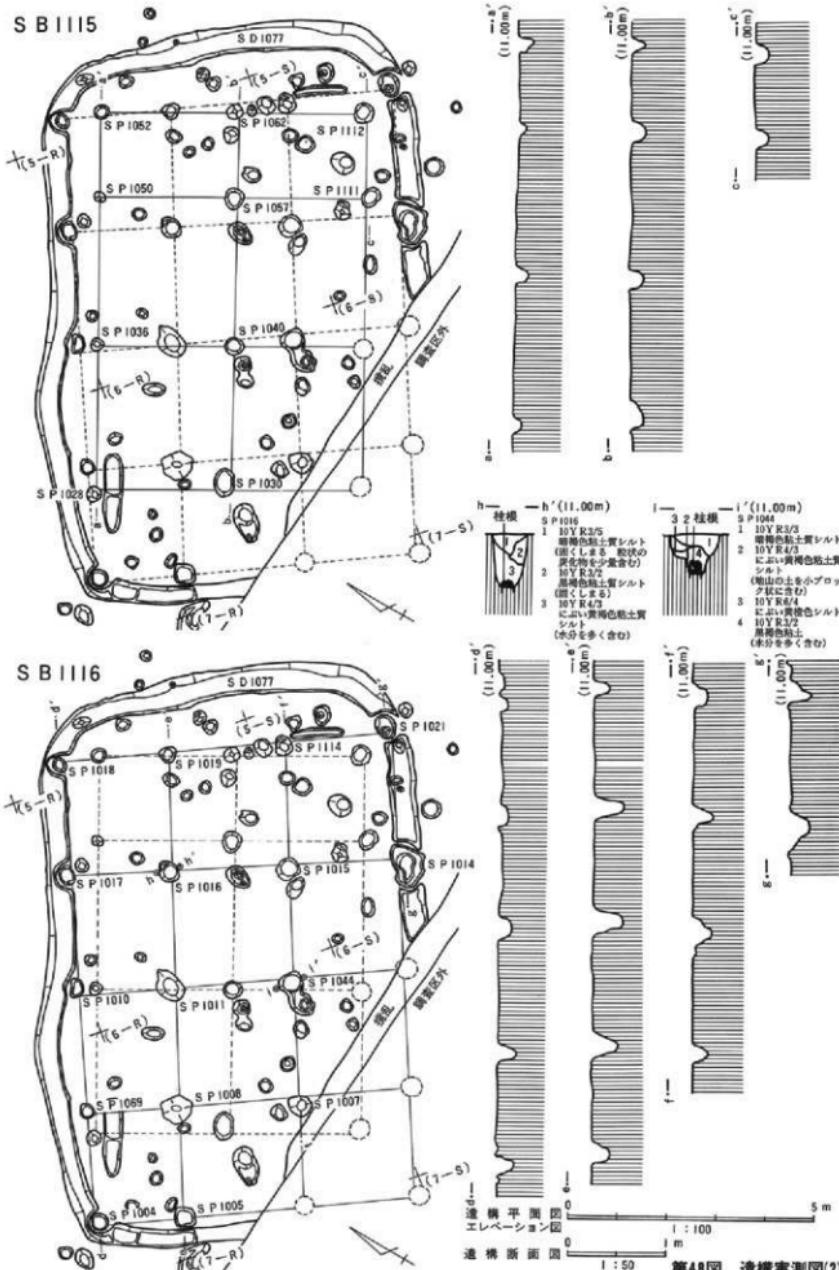
S K 103土壤 B区35—Jグリッドに位置する。径約210cmの不整円形を呈すると考えられるが、北側が攪乱部分にかかり全容は不明である。深さは最深部で90cmで、中位の層から遺物（第53図33・第54図35～39を含め24点）が出土している。S K 125・156等も同様の形状・規模を示す。

S K 700土壤 D区17—Rグリッドに位置する。径約180cmの不整円形を呈し、深さは約100cmである。遺物が検出されず性格は不明である。S K 888等も類似している。

S K 1090土壤 E区4—S・4—Tグリッドに位置する。径約70cmの円形を呈するが、西側に突出部をもつ。深さは約60cmである。最下層は水分を多く含んでおり、炭化した植物の塊が出土した。植物珪酸体分析により、ウシクサ族（ススキ属・チガヤ属などを含む）との結果を得ている。なお、遺物は須恵器壺（第58図102）が出土している。

IV 西ノ川遺跡

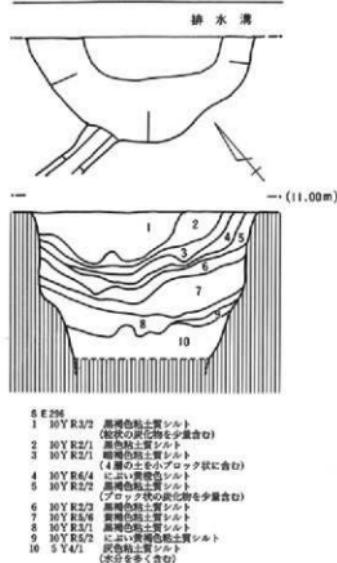




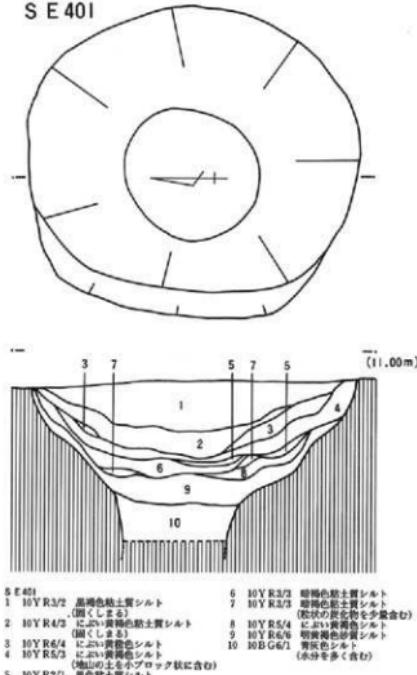
第48図 遺構実測図(2)

IV 西ノ川遺跡

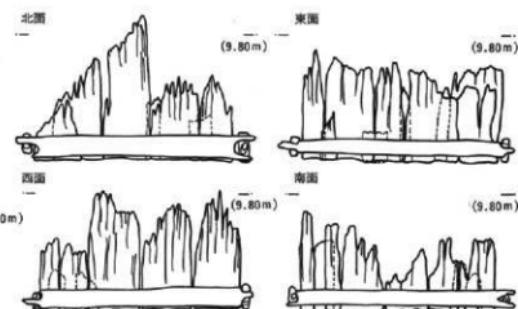
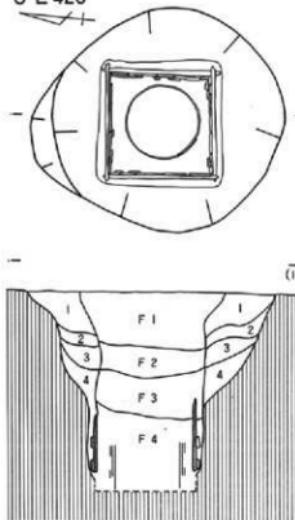
S E 296



S E 401



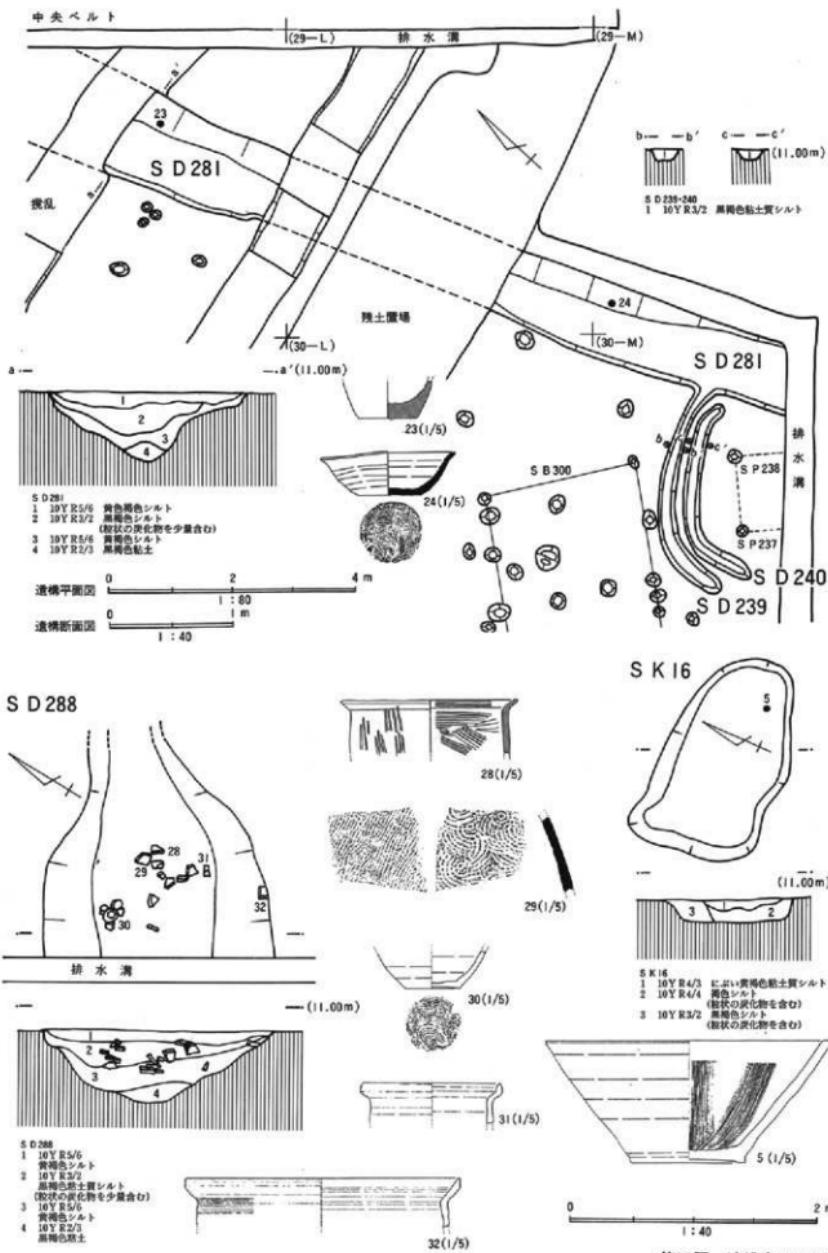
S E 420



- S E 420
- F1 10Y R3/3 黄褐色粘土質シルト
(排水の状況を含む)
F2 10Y R2/3 黄褐色粘土質シルト
F3 10Y R2/1 黄褐色粘土質シルト
(排水の状況を含む)
F4 10Y R3/2 黄褐色粘土質シルト
F5 10Y R2/1 黄褐色粘土質シルト
(排水の状況を含む)

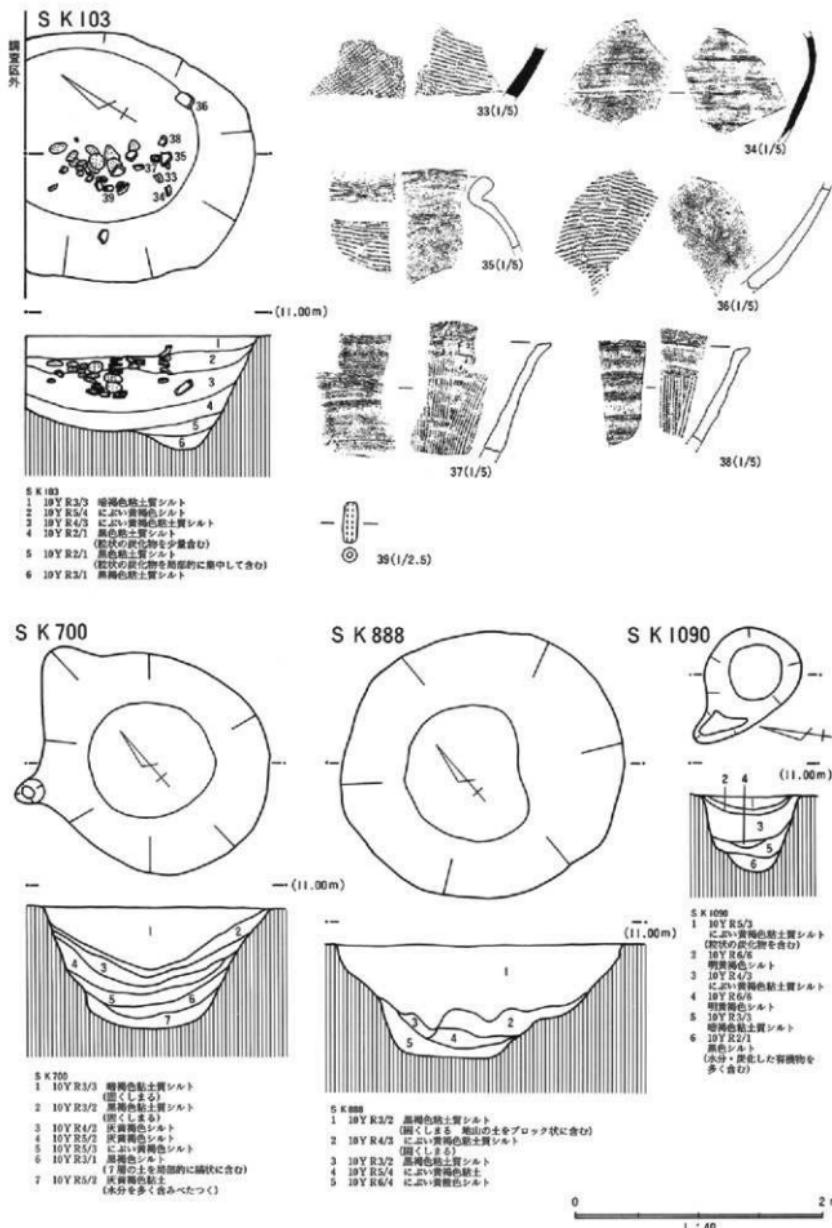


第49図 造構実測図(3)



第50図 遺構実測図(4)

IV 西ノ川遺跡



第51図 遺構実測図(5)

4 出土した遺物 (第52~58図、表7・8、図版43~49)

出土遺物は、土器類・土製品・石製品・木製品・金属製品等があり、総計4,593点である。以下種別にその内容を概括する。

(1) 土師器・黒色土器

破片類の集計によると、土師器676点、黒色土器98点である。

A区から出土したミニチュア土器（第52図1）は、胎土に粗い砂を含み手づくねによつて成形され底部に黒斑を残す。またB・C・D区から土師器の甕が6点出土したが、いずれも破片資料で全形は不明である。内外面にハケ目調整のあるもの（第56図73・74、第57図97）、内外面にナデ調整のあるもの（第54図43）、外面に削りが見られるもの（第53図23）などがある。いずれも煮沸に用いられた痕跡を残し、製塙土器の可能性をうかがわせるもの（第56図73）もある。

黒色土器のうち高台坏が3点である。外面にロクロ痕が認められ、回転糸切り離し技法で内面にミガキが認められるもの（第53図18、第54図40）と、ミガキがはつきりしないもの（第56図84）がある。蓋は1点（第56図83）で、鉢は宝珠形で内外面にロクロ痕、内面にミガキが観察される。

土師器・黒色土器の出土はA区からC区にかけてに偏り、須恵器・赤焼土器に比して少ない量（6.9%）である。

(2) 須恵器

総計976点が出土し、実測土器の約半数42.2%を占める。器種は、供膳形態に蓋・坏・高台坏・皿、貯蔵形態に壺・甕・横瓶などがある。

蓋は2点図化した。第55図63は小形で内外面に削り調整が施されている。第58図112は外面に強いナデ痕が見られ、鉢は扁平で大形で中央大きく窪み、縁が直立に近い。

坏は13点図化しており、須恵器のうち18.4%を占める。回転ヘラ切り離し（54.6%、第52図11、第54図46、第55図60、第56図75・76・77、第58図104）と回転糸切り離し（45.4%、第52図24・7、第53図24、第55図62、第56図78）が観察される。それぞれの技法の内部では器形に類似性を持つが、法量にはばらつきがある。高台坏は3点（第52図10、第54図47、第55図61）、回転ヘラ切りと回転糸切りによる切り離しがなされ、いずれも付け高台である。第52図12は双耳坏の把手と考えられる。

貯蔵形態のうち甕には、①外面に平行タタキ目、内面に同心円・青海波風アテ痕が認められるもの（第52図4・14・15、第53図16・17・29・34、第56図8、第58図107）②外面に平行タタキ目、内面にブロック状アテ痕が認められるもの（第53図33、第54図45、第55図71、第57図88）③赤褐色に近い色を呈し外面に条線状タタキ目、内面にブロック状アテ痕が認められるもの（第52図3・13、第57図98）などに分けられる。第58図106の甕の口縁部は大きく外反し、内外面にロクロ痕がはつきり認められる。貯蔵形態としては壺も8点出土している。また横瓶は1点（第56図82）のみであった。

須恵器の坏と甕はA区からC区、壺はB区C区に集中する傾向があり、後述する銀治の

工房の存在などと関連づけて考えなくてはならない。

(3) 赤焼土器

須恵器と同じ技法を用いながら、酸化焰焼成を行っている赤褐色の土器を赤焼土器と称する。破片類まで含めて2,168点出土し、実測土器の18.4%を占める。器形としては供膳形態として壺・皿、煮沸形態として甕・壺がある。

壺は8点図化した（第52図8、第53図25・26、第54図42、第55図59・69・72、第58図103）が、全て底部は回転糸切り離しである。口径130mm前後、底径50mm前後である。皿は4点図化した（第53図19・27、第55図67、第56図85）。全て底部は回転糸切り離しで、口径135mm前後、底径55mm前後である。

甕は7点図化した（第52図9、第53図30・31・32、第56図86、第57図95、第58図108）。全形が明らかになったものはないが、第52図8・9、第53図31などは小形の甕で、他は長胴の甕であろう。壺は1点（第55図64）出土しているが、破片資料であり、ロクロ痕が判別できる程度である。

(4) 土製品、石製品、中世陶器、木製品、金属製品

土製品としては、土鍊がB区から1点（第54図39）C区から2点（第55図58、第57図91）出土している。いずれも長さ20mm前後、太さ10mm前後、糸通しの穴の径2mm前後のもので、ナデの整形技法がうかがえ、投網に用いたと推定される。その他土製品としては、人形（第55図52）が出土した。恵比寿像と考えられる。近世の信仰の対象であろう。

鞆の羽口が第55図51の他、A区・B区・C区から計11点出土した。鉄滓もS K190・298を中心にA区・B区・C区から出土し、羽口の出土状況に呼応しており、小鍛冶の存在を示す要素と考えられる。

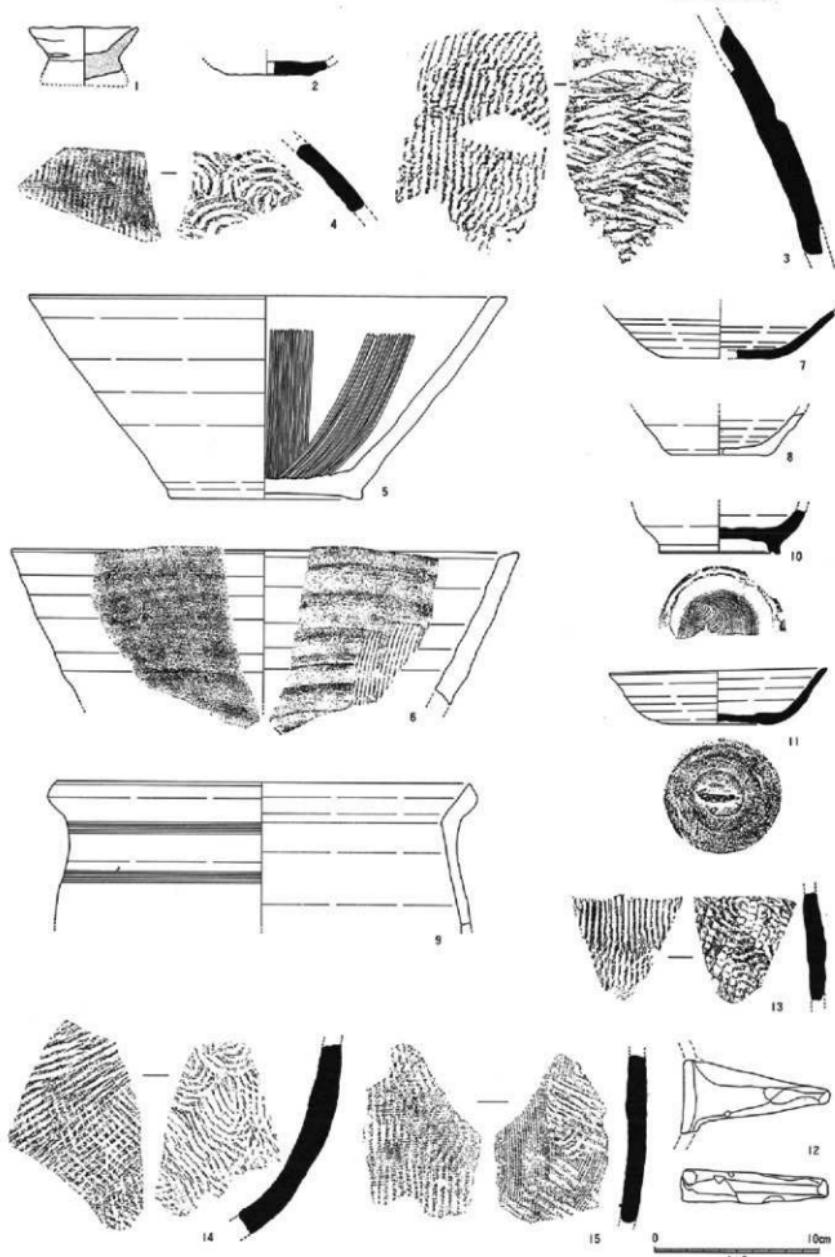
石製品としては砾石が7点出土した。粒子の緻密な粘板岩系（第53図22、第55図54・66、第57図92・93・99）と、目の粗い砂岩系（第58図113）とがあり、断面が長方形と方形の別がある。概して表裏両面・四側面全てすり減っている。また、中世陶器片を転用したと考えられる砾石もあり（第58図109）注目したい。

中世陶器は、擂鉢類が6点（第52図5・6、第54図37・38、第55図57、第57図89）、甕が4点（第54図35・36、第55図55・56）あり、およそ珠洲系陶器編年のV期に対比できる例が大半である。

かわらけは3点（第53図21、第55図68、第57図96）出土している。全てナデによる調整が施され、形態・法量とも近似している。灯明皿としての使用煤痕が認められるものもある（第57図96）。

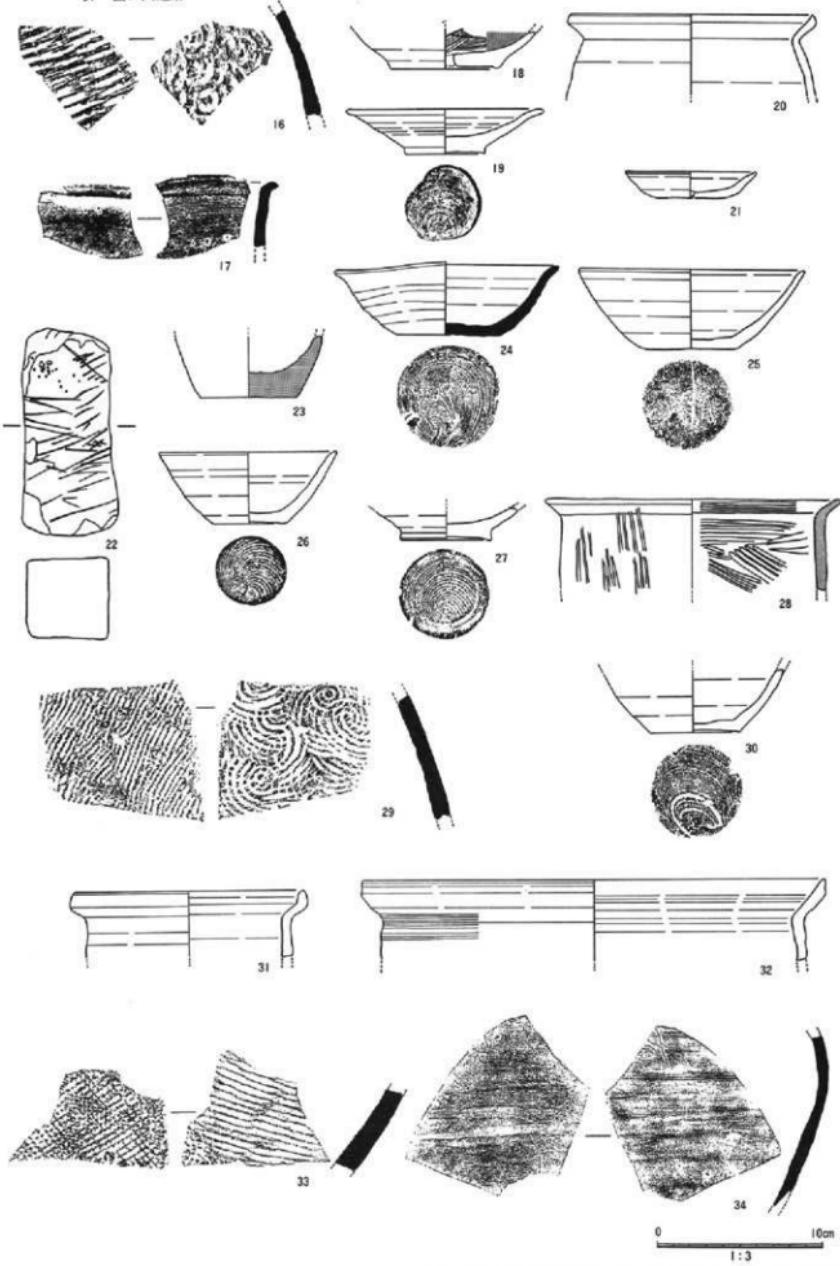
木製品としては漆椀1点（第57図94）がある。木地の製法と絵柄から近世のものと推定される。礎板・柱根・井戸枠・井戸眼（曲物）等の木製品については、遺構の項で取り上げた。

金属製品としては、キセルの雁首が1点（第58図114）出土している。近代のものであろう。

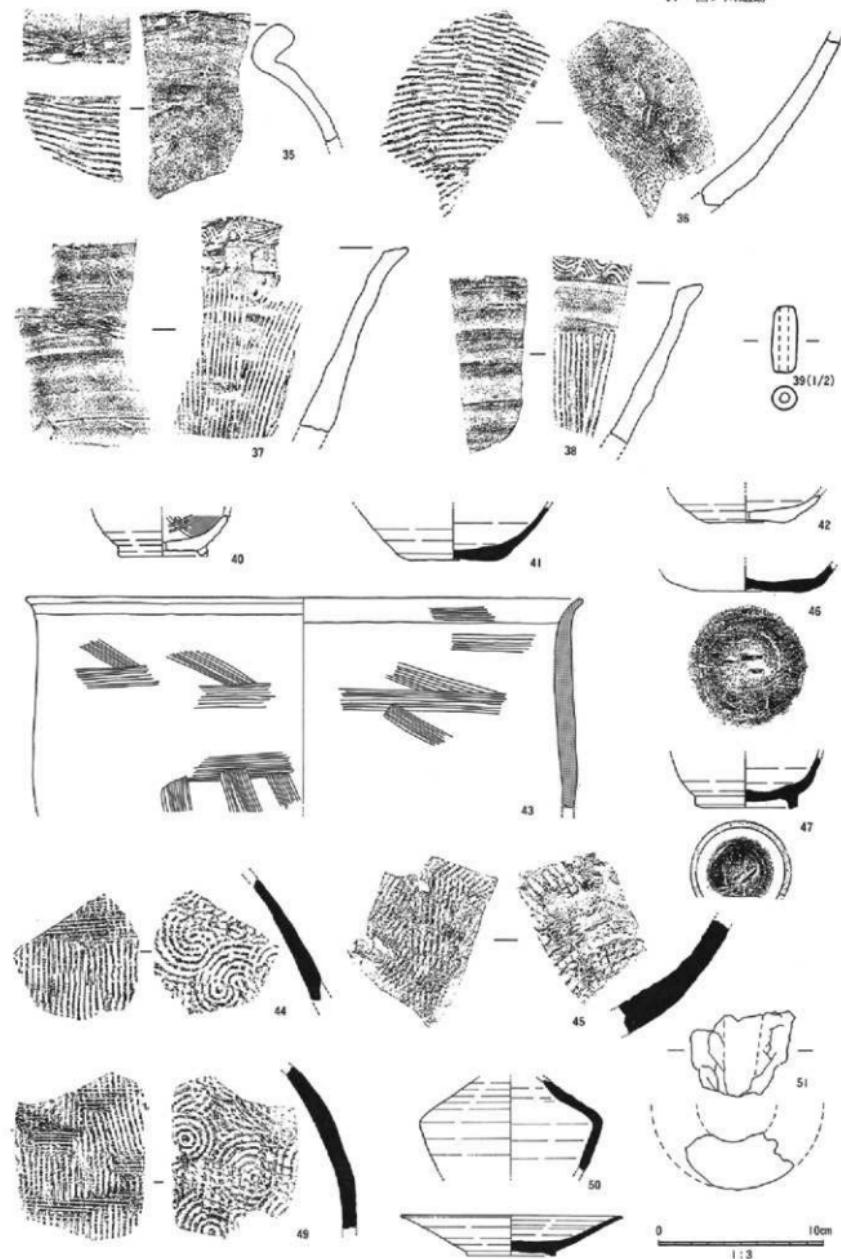


第52図 遺物実測図(1) A区

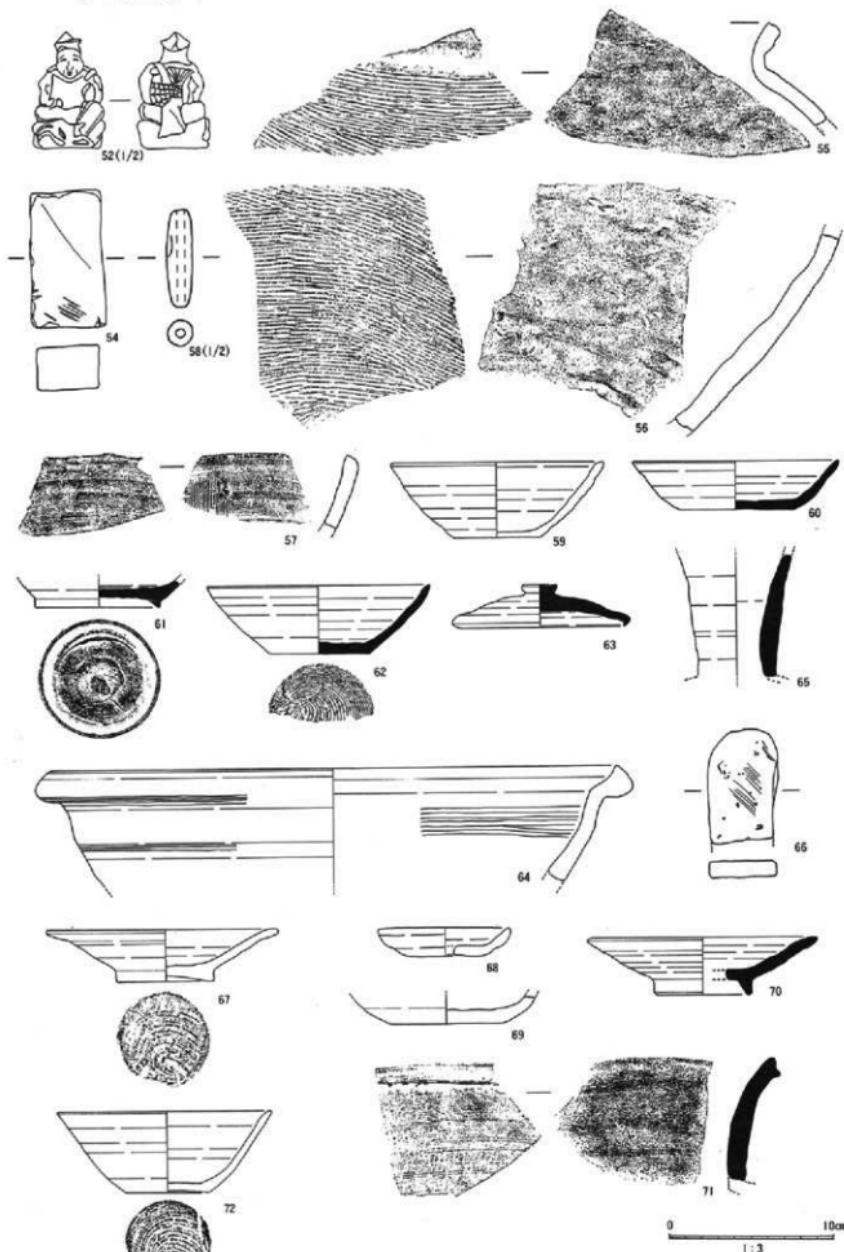
IV 西ノ川遺跡



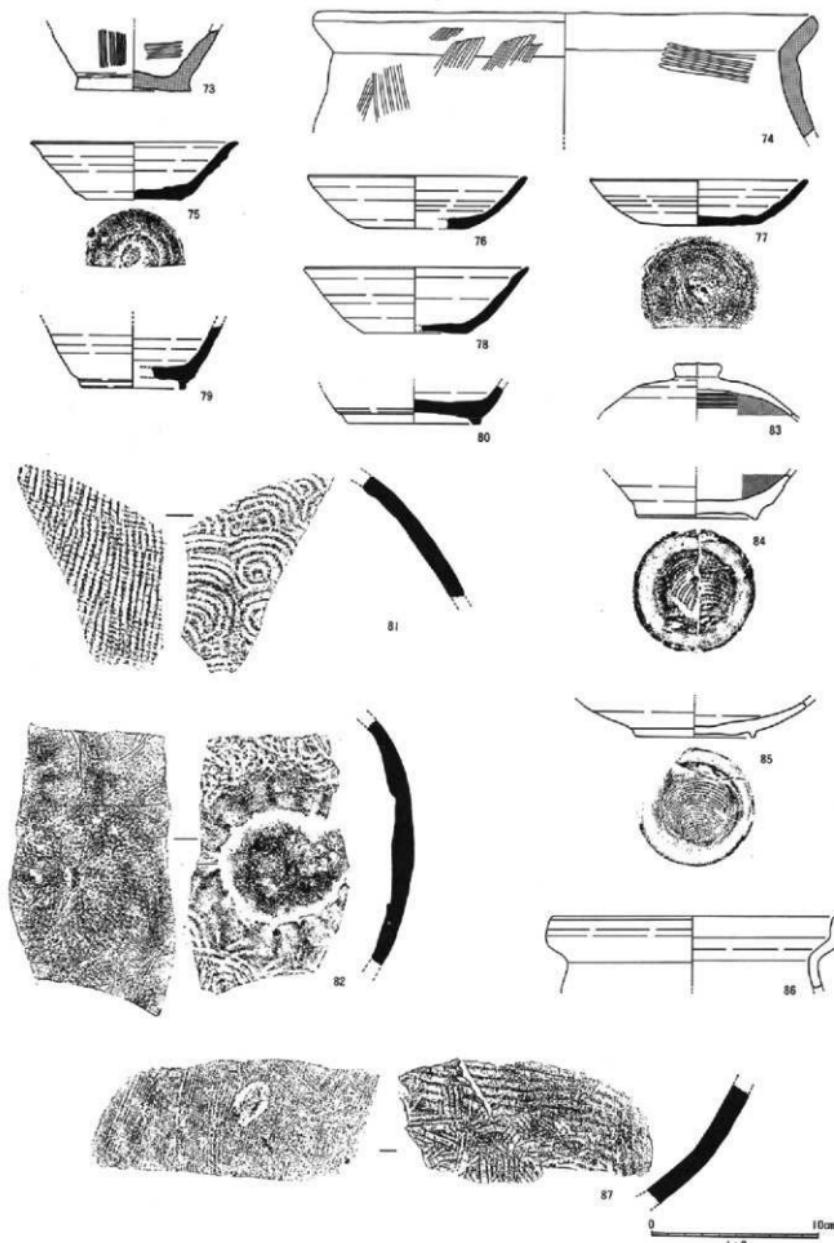
第53図 遺物実測図(2) 16~22=A区 23~34=B区



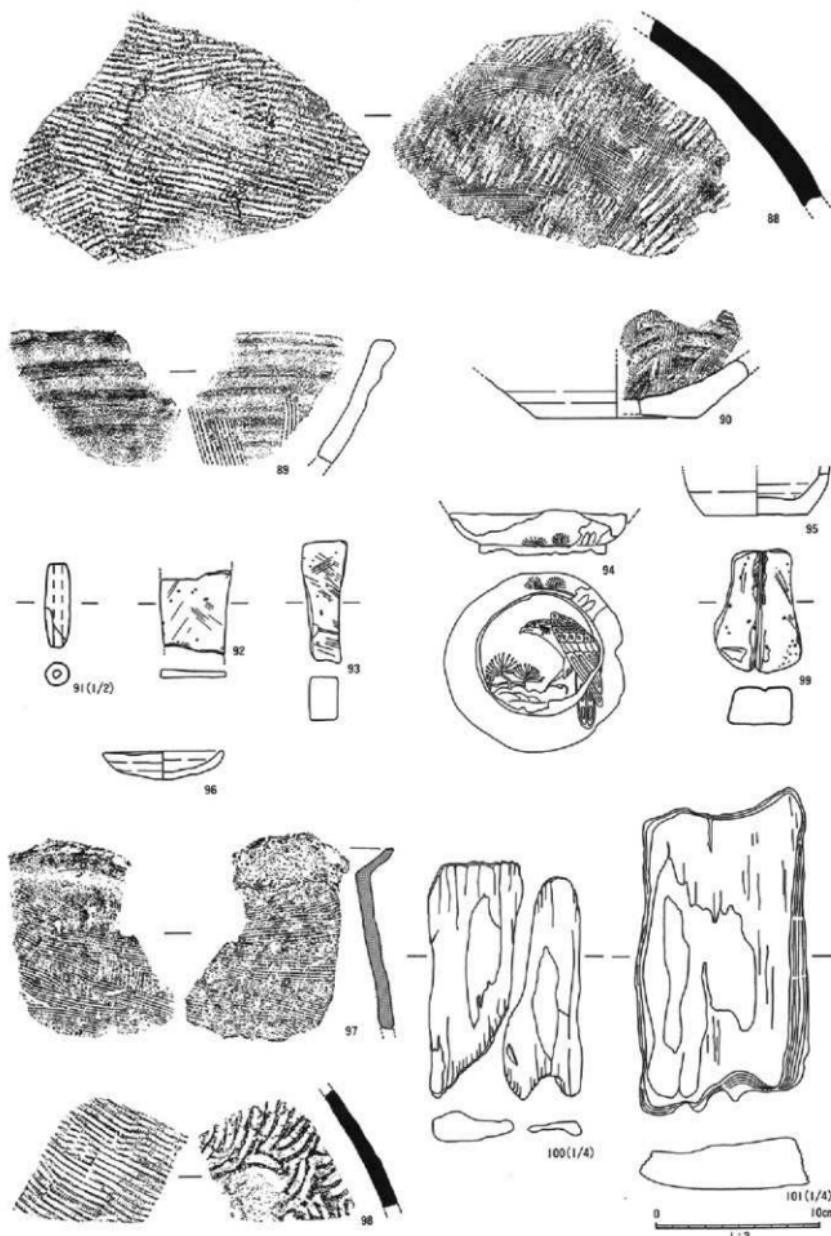
第54図 遺物実測図(3) B区



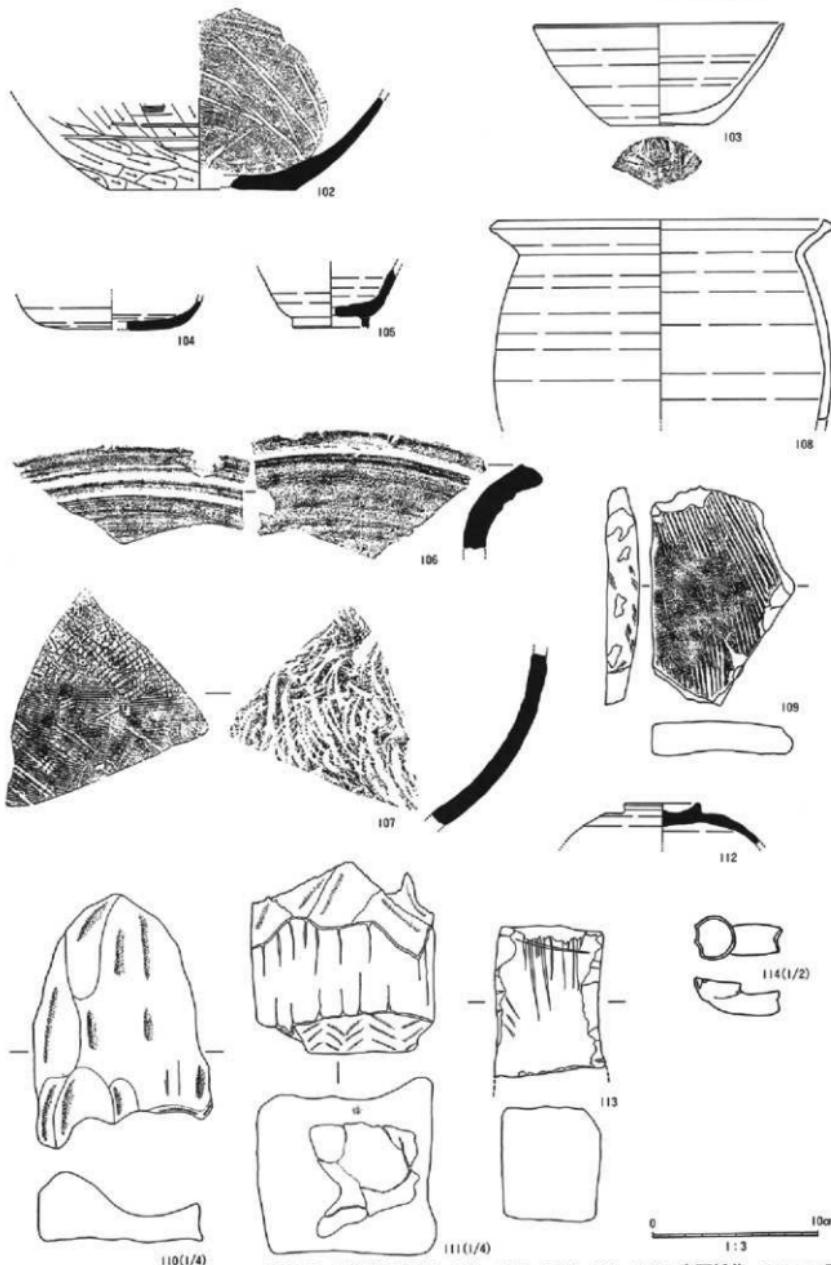
第55図 遺物実測図(4) 52=B区 54~72=C区



第56図 遺物実測図(5) C区



第57図 遺物実測図(6) 88~94=C区 95~101=D区



第58図 遺物実測図(7) 102~111=E区 112・113=表面採集 114=B区

IV 西ノ川遺跡

表7 出土遺物類別表(1)

部類	遺物 番号	種別・器種	計測値(mm)			底部切離し	調整技法		出土地点		備考
			口径	底径	器高		外面	内面	地区	遺構	
第52回	1	土師器 ミニチュア	(56)		7		手づくね	手づくね	A	S D 1	
	2	壺		(50)	7	回転糸	ロクロ板	ロクロ板	A	S D 1	
	3	須恵器 夷			16		タタキ	アテ底	A	S D 1	
	4	夷			12		タタキ・ハケ目	アテ底	A	S D 1	
	5	中世陶器 鉢	(304)	(117)	9		ロクロ底	ロクロ底・御目	A	S K 16	
	6	鉢	(310)		11		ロクロ底	ロクロ底・御目	A	S K 15	
	7	須恵器 壺		(70)	5	回転糸	ロクロ板	ロクロ板	A	S K 12	
	8	赤燒土器 壺		(60)	5	回転糸	ロクロ板	ロクロ板	A	S P 69	
	9	壺	(250)		7		ロクロ板	ロクロ板	A	S P 84	
	10	高台壺		(74)	7	回転糸	ロクロ板	ロクロ板	A	S P 84	
	11	壺	132	70	34	4 ヘラ	ロクロ板	ロクロ板	A		
	12	双耳壺 長90					削り		A		
	13	須恵器 夷			12		タタキ	アテ底	A		
	14	夷			15		タタキ	アテ底	A		
	15	夷			13		タタキ・ハケ目	ハケ目	A		
第53回	16	要			9		タタキ	アテ底	A		
	17	要			7		ロクロ板	ロクロ板・ハケ目	A		内外面灰被り
	18	黒色土器 高台壺		(66)	6	回転糸	ロクロ板・削り	磨き	A		内黒
	19	赤燒土器 皿	120	48	27	5	回転糸	ロクロ板	A		
	20	要	(146)			4.5	ロクロ板	ロクロ板	A		
	21	かわらけ 石製品底	石長120 幅50 厚45				ナデ	ナデ	A		
	22	土師器 皿			58	6	削り		B	S D 281	
	23	土師器 壺			136	64	5 回転糸	ロクロ板	B	S D 281	焼き混み
	24	須恵器 壺			136	55	50 4 回転糸	ロクロ板	B	S D 281	
	25	壺	(106)	42	44	5 回転糸	ロクロ板	ロクロ板	B	S D 281	
	26	赤燒土器 壺			56	5 回転糸	ロクロ板	ロクロ板	B	S D 281	
	27	皿	(180)				ハケ目	ハケ目	B	S D 288	
	28	土師器 壺			10		タタキ	アテ底	B	S D 288	
	29	須恵器 壺			56	(38) 6 回転糸	ロクロ板	ロクロ板	B	S D 288	
	30	赤燒土器 壺			140	6 回転糸	ロクロ板	ロクロ板	B	S D 288	
第54回	31	要	(280)				ロクロ板	ロクロ板	B	S D 288	
	32	赤燒土器 壺			12		タタキ	アテ底	B	S K 103	外面灰被り
	33	須恵器 壺			7		ロクロ板	ロクロ板	B	S K 103	外面灰被り
	34	要			7		タタキ	アテ底	B	S K 103	
	35	要			7		タタキ		B	S K 103	
	36	中世陶器 壺			14		タタキ		B	S K 103	
	37	鉢			16		ロクロ板	ロクロ板・御目	B	S K 103	
	38	皿 鉢	300		12		ロクロ板	ロクロ板・御目	B	S K 103	
	39	土製品 土	土長28 壁11				ナデ		B	S K 103	
	40	黒色土器 高台壺	(54)		5		ロクロ板	磨き	B	S K 100	内黒
	41	須恵器 壺	(60)		5				B	S P 241	
	42	赤燒土器 壺	(50)		5 回転糸		ロクロ板	ロクロ板	B	S P 241	
	43	土師器 壺	260		10		ハケ目	ハケ目	B	S K 259	
	44	要			8		タタキ	アテ底	B	S K 252	
	45	要			14		タタキ	アテ底	B	S K 297	内面灰被り
	46	壺	75	5	ヘラ		ロクロ底・ナデ	ロクロ底	B		
第55回	47	須恵器 高台壺	(62)	5	ヘラ		ロクロ底	ロクロ底	B		
	48	皿	(134)	54	25 3.5 回転糸		ロクロ底	ロクロ底	B		
	49	要			9		タタキ	アテ底	B		
	50	要	胴径(106)		6		ロクロ板	ロクロ板	B		
	51	土製品 羽口	長56 幅46 厚20						B		
	52	人形							B		東北須彌
	53	金属製品 鉄 津							B		
	54	石製品底	石長42 幅82 厚23						C	S E 401	
	55	要			9		タタキ	アテ底	C	S E 429	
	56	中世陶器 要			13		タタキ	アテ底	C	S E 429	
	57	皿 鉢			8		ロクロ板	ロクロ板・御目	C	S E 429	
	58	土製品 土	土長40 壁8		46 5 回転糸		ロクロ板	ロクロ板	C	S E 429	
	59	赤燒土器 壺	壺130 54 46 5 回転糸				ロクロ板	ロクロ板	C	S P 352	

表 8 出土遺物観察表(2)

探査回数	遺物番号	種別・器種	計測値(mm)				底部切削し	調整技法		出土地点	備考		
			口径	底径	高さ	器厚		外 面	内 面				
								地区	遺構				
第5回	60	壺	(126)	(70)	4	ヘラ	ロクロ痕	ロクロ痕	C	S D441			
	61	須恵器 高台環	75	4	ナデ	ロクロ痕	C	S D441	付高台				
	62	壺	(135) (60)	42	5	回転糸	ロクロ痕	ロクロ痕	C	S D530	内面口縁に有機物		
	63	蓋	108	25	6		ロクロ痕・削り	ロクロ痕・ナデ	C	S D561			
	64	赤焼土器	壺	(346)	9		ロクロ痕	ロクロ痕	C	S D578			
	65	須恵器 蓋			8		ロクロ痕	ロクロ痕	C	S K375	内外面に灰被り		
	66	石製品 砧	石	長 40	幅 67	厚 10				C	S K375		
	67	赤焼土器	皿	142	60	32	5	回転糸	ロクロ痕	C	S K364		
	68	かわらけ	皿	(80)	(50)	17	5	ナデ	ナデ	C	S K364		
	69	赤焼土器	壺	70	7		回転糸	ロクロ痕	ロクロ痕	C	S K362		
第56回	70	須恵器	皿	70	60	35	5	回転糸	ロクロ痕	ロクロ痕	C	S K454	
	71	壺				10		ロクロ痕	ロクロ痕	C	S P534	内外面に灰被り	
	72	赤焼土器	壺	(130)	52	50	4	回転糸	ロクロ痕	C	S P567		
	73	土師器	甕	70	8			ハケ目	ハケ目	C	非赤ベルト	製塙土器	
	74	甕	(300)		11		ハケ目	ハケ目	C				
	75	壺	(126)	30	35	5	ヘラ・無調整	ロクロ痕	ロクロ痕	C			
	76	壺	(132)	(60)		3.5	ヘラ	ロクロ痕	ロクロ痕	C			
	77	壺	(132)	70	28	4	ヘラ・無調整	ロクロ痕	ロクロ痕	C			
	78	須恵器	壺	(136)	(60)	40	4	回転糸	ロクロ痕	ロクロ痕	C		
	79	甕	(65)	5	ヘラ		ロクロ痕	ロクロ痕	C				
第57回	80	甕	(80)		4.5	ヘラ	ロクロ痕	ロクロ痕	C				
	81	甕			10		タタキ	アテ	C				
	82	横瓶			8		タタキ	アテ	C				
	83	黒色土器	蓋		4		ロクロ痕	ロクロ痕・磨き	C	内黒			
	84	高台環	73	6		回転糸	ロクロ痕	ロクロ痕・磨き	C	内黒			
	85	赤焼土器	皿		72	7	回転糸	ロクロ痕	ロクロ痕・磨き	C	黒斑あり		
	86	甕	(172)		7		ロクロ痕	ロクロ痕	C	S P489			
	87	須恵器	甕		11		タタキ	アテ	C				
	88	甕			13		タタキ	アテ	C				
	89	中世陶器	鉢		10		ロクロ痕	ロクロ痕・鉗目	C				
第58回	90	鉢	(100)		14		ロクロ痕	ロクロ痕・鉗目	C				
	91	土製品	土鉢	長 34	幅 10		ナデ		C				
	92	石製品	砥	石 長 41	幅 52	厚 5			C				
	93	砥	石 長 74	幅 15	厚 22				C				
	94	木製品	漆桶		77	25			C				
	95	赤焼土器	甕	(65)		8.5	ロクロ痕・削り	ロクロ痕	D	S P639			
	96	かわらけ	皿	72	12	17	5	ナデ	ナデ	D	S K926		
	97	土師器	甕			8	ハケ目	ハケ目	D	S K882			
	98	須恵器	甕			7	タタキ	アテ	D				
	99	石製品	石	長 69	幅 41	厚 22			D				
第59回	100	木製品	板	板 208	幅 15	厚 32			D	S P857			
	101	板	板 268	幅 38	厚 48				D	S P850			
	102	須恵器	甕	(115)		5	ハケ目・削り	ハケ目	E	S K1090			
	103	赤焼土器	壺	(152)	(60)	62	5	回転糸	ロクロ痕	E	S P1002		
	104	壺			85	3.5	ヘラ	ロクロ痕	E				
	105	須恵器	甕	(46)		5		ロクロ痕	ロクロ痕	E			
	106	甕	(420)		13		ロクロ痕	ロクロ痕	E				
	107	甕			10		タタキ	アテ	E				
	108	赤焼土器	甕	(202)		6	ロクロ痕	ロクロ痕	E				
	109	土製品	石	長 130	幅 84	厚 18		タタキ	E				
第60回	110	木製品	柱	根 210	横 60	高 140			E	S P1005			
	111	柱	根 137	幅 135	高 150				E	S P1044			
	112	須恵器	蓋	(116)	(24)	4	ロクロ痕・ナデ	ロクロ痕	不明				
	113	石製品	砥	石 長 60	幅 89	厚 67			不明				
	114	金製品	キセル	長 35	幅 17	高 15			B				

5 まとめ

今回の調査は、県営ほ場整備事業（下川地区）の工事に先立つ記録保存のための発掘調査である。推定遺跡面積12,000m²のうち、4,800m²を調査対象とした。

調査によって得られた成果は、次のようにまとめられる。

遺構について 遺構は、調査区全体に1,000基以上が分布する。ただし、遺物を伴わずごく新しい時代の農耕等によると考えられるものも多い。

掘立柱建物跡 は5棟確認された。調査区ごとの内訳は、A区=1棟（S B95）・B区=1棟（S B300）・D区=1棟（S B956）・E区=2棟（S B1115・1116）である。

S B300は、その内部に鉄滓の塊を検出したS K298、多量の鉄滓を検出したS K190などがあり、小鍛冶の工房跡と考えられる建物である。今回の調査では、鉄滓がB区・C区を中心に合計約4.5kg、鞴の羽口の破片もB区・C区を中心に11点検出されている。このことから推測すると、ほかにも同様の工房跡が存在した可能性が高いが、その痕跡は把握できなかった。

S B956は、柱穴8基のうち7基から礎板が検出された。

S B1115は、総柱の倉庫跡と考えられる建物で、一部調査区外にかかり全容は明らかにできなかったが、周囲に雨落ち溝が巡らされている。同様に周囲に雨落ち溝を巡らせた掘立柱建物跡は、本遺跡から東方約10kmの藤島町平形遺跡跨り地区で3棟検出されており、関連性がうかがえる。

S B1116はS B1115を建て替えたと考えられる総柱の倉庫跡で、完全にS B1115と重複している。

S B1115・S B1116は本遺跡で最大の規模と、最もしっかりした造りを示しており、中心的な建物であったと考えられる。時期的には、一部の柱穴から土師器・赤焼土器の破片が検出されており、またE区から中世以降の遺物が検出されていないことから、平安時代と考えられる。

井戸跡は3基確認されている（S E296・401・420）。うち井戸枠を検出したのはS E420のみである。内部より中世の陶器片が検出されている。S E401の下層から炭化した植物遺体が出土し、分析の結果稻であることが判明している。

溝跡は比較的規模の大きいもの（S D1・2・281・561）が並行して南東から北西へ流下していたようである。また、それらに直交する形でS D288が存在している。いずれも検出された遺物は、平安時代までのものである。検出できた範囲が限られ、全容は明らかでないものの、S B95などはS D1に沿ったプランを示していることから水利用とともに何らかの集落の区画の意味をもったとも考えられる。

土壙は、A区で規模・形態の類似したものが集中している（S K12～S K17）。S K16で珠洲系の撲鉢が検出されていることから、中世の遺構としておく。S K1090の最下層から炭化した植物遺体が検出され、分析によりウシクサ族との結果を得たが、土壙としての性格は不明である。

遺物について 本遺跡から出土した遺物は、土師器・黒色土器・須恵器・赤焼土器・中世陶器などの土器・陶器類、他に土製品・石製品・木製品・金属製品などである。

土師器は、器形の明らかなものは壺のみであった。

黒色土器は6点とごくわずかで、高台壺・蓋などであった。

須恵器は、壺・高台壺・皿・甕・横瓶・壺などがあった。図化した土器の42.2%を占める。壺については、底部切り離しがヘラ切りのものと、回転糸切りのものがほぼ同数混在していた。須恵器全体としては、A区からC区にかけての出土量が多い傾向があった。

赤焼土器は、壺・皿・甕・壺などがあった。図化した土器の18.4%を占める。調査区全域から出土しているが、特にB区にやや偏るようである。赤焼土器壺の底部切り離しは、すべて回転糸切りである。甕類で全形を明らかにできたものはないが、3点の小形の甕を除いては長胴壺と考えられる。

中世陶器は、珠洲系の甕・擂鉢が限られた構造から出土している。これらは珠洲系陶器編年のV期に位置づけられ、15世紀台のものと考えられる。なお、かわらけが3点、A・C・D区から散発的に出土している。

土錆が3点出土している。いずれも小形で投網に用いたものと考えられる。

砥石がC区を中心として7点検出されている。いずれも表裏両面・側面まで磨耗が著しい。利器を大切に手入れして使用していたことが推定できる。本遺跡では製品としての鉄器は出土していないが、隣接した西谷地遺跡では鉄製の鎌・刀子が出土しており、上述の小鍛冶の存在とからめて、生産→活用の流れがうかがえる。

本遺跡出土の土器類の様相を、近隣の諸遺跡と照合すると、概ね平安時代前半（9世紀後半～10世紀）を中心とする年代が与えられる。

また、中世の遺物を含んでいたA区の土壤群、B区のSK103、C区のSE420などもあることから、中世に生活が営まれていたことも明らかである。ただし、土器の様相からすると平安時代後期から中世前期にかけて断絶があったと考えられる。

以上を総合すると、本遺跡は平安時代前半を中心とした、手工業・漁業とも係りの深い集落跡といえる。

今回の調査で明らかにできたのは、集落全体からするとごく限られた範囲であり、しかも分断された形である。分断された調査区の間や周囲への集落の広がりがあったことは確実であるが、既に水田として削平されており、全容を解明することができないのが惜しまれる。

参考文献

- 川崎利大他「平形遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書第26集」1980
- 伊藤邦弘「大槻遺跡第1次発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書第12集」1988
- 野尻 保也「東興野遺跡第2次発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書第12集」1988
- 阿部彦彦「東原遺跡第2次発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第8集」1994
- 佐藤庄一郎「五百石遺跡発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第10集」1994
- 齋藤哲士編「西谷地遺跡発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第12集」1994
- 地主砦土塁「西郷村史」西郷村史編纂委員会 1960
- 「水と緑なす大地」西郷土地改良区35周年記念誌 1988
- 「珠洲の名陶」珠洲市立珠洲焼資料館 1989

報告書抄録

ふりがな	にしやち いせきだいじ・にしおかわいせきはくつらうかほうこくしょ
書名	西谷地遺跡第2次・西ノ川遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第26集
編著者名	尾形與典 高橋敏 渡賀喜悦 飯塚稔
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301
発行年月日	西暦 1995年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしやち 西谷地	ゆまがなげん 山形県 つるおかし 鶴岡市 おおあざし・ちかわ 大字下川 あがし・や・ち 字西谷地	06203	平成3年度 登録	38度 46分 25秒	139度 46分 35秒	19940509～ 19940831	9,080	県営ば場 整備事業 (下川地区)
にしのくわ 西ノ川	ゆまがなげん 山形県 つるおかし 鶴岡市 おおあざし・ちかわ 大字下川 あがし・や・ち 字西谷地	06203	平成4年度 登録	38度 46分 31秒	139度 46分 43秒	19940509～ 19940727	4,800	県営ば場 整備事業 (下川地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西谷地	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡 井戸跡 溝跡 土壌		土師器 黒色土器 須恵器 赤焼土器 土雞、鉄製鏃、砥石	甕 壺、蓋 壺、高台壺 皿、甕、蓋 鉢、高台付皿 甕 壺 (含墨書き) 土雞、鉄製鏃、砥石	土師器高壺、ミニチュア土器の出土により、古墳時代の遺構の存在が想起される。	
西ノ川	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡 井戸跡 溝跡 土壌		土師器 黒色土器 須恵器 赤焼土器 土製品 鐵滓	甕 壺、蓋 壺、高台壺、皿 甕、蓋、横瓶 壺、甕、堀 土雞、羽口 鐵滓	鐵滓・羽口の出土により銀冶場の存在が推定できる。	
		南北朝・室町時代	井戸跡		株洲系陶器	甕、擂鉢		

図 版

西谷地遺跡

図版 1



西谷地遺跡遠景（北西から）



西谷地遺跡北区全景（空中写真）

西谷地遺跡

図版 2



西谷地遺跡東区全景（空中写真）



西谷地遺跡・西ノ川遺跡入り式（北西から）



北1区遺構確認状況（東から）



北2区遺構確認状況（西から）



東1区遺構確認状況（西から）



東2区遺構精査状況（北から）



水路敷部分全景（北から）

西谷地遺跡

図版 4



北1区調査前状況（西から）



北1区重機粗掘状況（西から）



北1区重機粗掘及び面整理状況（西から）



北1区面整理状況（南東から）



水路敷部分調査区設定状況（南から）



レクチャー状況



水路敷遺構精査状況（南から）



北2区面整理状況（西から）



北1区面整理状況（南西から）



水路敷平板測量状況



北1区排水作業状況（南東から）



水路敷引渡し状況（南西から）



ローリングタワー構築状況（北から）



北1区測図状況（北西から）



北1区遺構精査状況（南西から）



北2区SD2精査状況（南から）

西谷地遺跡

図版 6



北1区 S D 72精査状況（西から）



東区重機粗掘状況（東から）



東1区精査及び測図状況（南東から）



空撮状況（東から）



現地説明会状況（西から）



現地説明会状況（南西から）



東1区 S D 1121土層断面実測状況（東から）



搬収準備状況



北1区基本層序（北から）



北2区基本層序（南から）



東1区基本層序（南から）



東2区基本層序（南から）

西谷地遺跡

図版 8



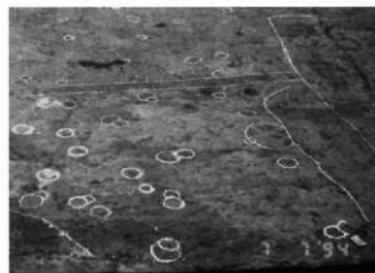
S B 901・S B 914空中写真



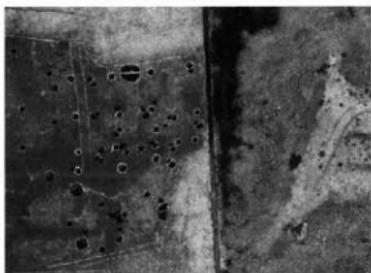
S B 901・S B 914 (西から)



S B 901・E B 911墨書き器出土状況 (南から)



S B 340確認状況 (東から)



S B 340空中写真

図版 9



SB 1059空中写真



SB 960(東から)



SB 59確認状況(西から)



SB 59完掘状況(西から)



SB 133完掘状況(南東から)



北2区建物配置状況



水路敷 S D 21確認状況(北から)



SD 21土層断面実測状況(北西から)

西谷地遺跡

図版10



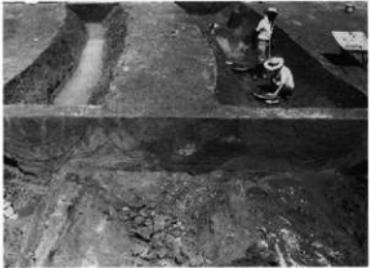
SG 96・SG 4・SG 1確認状況 (南西から)



SG 96・SG 4・SG 1精査状況 (南西から)



SG 96・SG 4・SG 1完掘状況 (南西から)



SG 96・SG 4・SG 1確認状況 (南西から)



東1区 SD 1121中央ベルト土層断面 (南から)



SD 72土層断面 (西から)



SD 1214土層断面及び遺物出土状況 (東から)



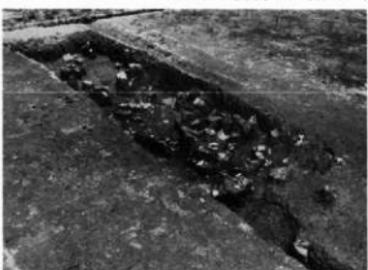
東2区 SD 2206土層断面 (東から)



S D 69確認状況（北から）



S D 69完掘状況（北東から）



S D 69W E S T 遺物出土状況（南東から）



S D 69 E A S T 遺物出土状況（南東から）



S D 69W E S T 遺物出土状況（北東から）

西谷地遺跡

図版12



水路敷 SK 26土層断面（北から）



SK 12遺物出土状況（西から）



SK 928・SK 662半裁状況（西から）



SK 928・SK 662遺物出土状況（南西から）



SK 65遺物出土状況（北西から）



SK 73遺物出土状況（東から）



SK 63・SK 64遺物出土状況（南東から）



SK 861遺物出土状況（北東から）



SK 657遺物出土状況（西から）



SK 1111遺物出土状況（南から）



SK 538遺物出土状況（南東から）



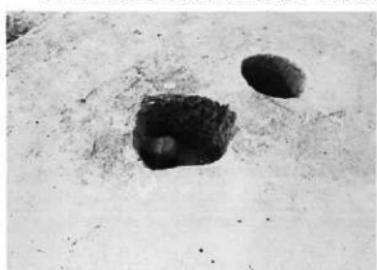
SK 1028遺物出土状況（北東から）



SK 242遺物出土状況及び土層断面（北から）



SK 2330土層断面（南から）



SP 307遺物出土状況（南から）



SP 403遺物出土状況 R P 73（東から）

西谷地遺跡

図版14



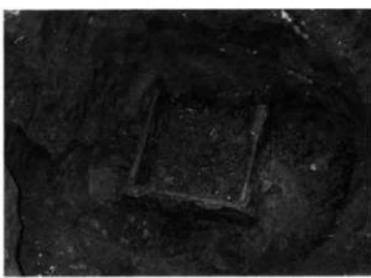
S E 2005土層断面（南から）



S E 2005完掘状況（南東から）



S E 2326土層断面（南から）



S E 2326井戸枠出土状況



S E 2326井戸眼（曲物）出土状況



RP 4出土状況（南から）



RP 24出土状況（南から）



RP 20・RP 21出土状況（南から）



RM 64鉄製鎌出土状況 S G 4より（南から）



RP 83（3個体）出土状況 S K 928より（南西から）



RP 51出土状況（南から）



RP 86出土状況（東から）



RP 82・RP 81出土状況（南から）

西谷地遺跡

図版16



R P 77・R P 78・R P 79出土状況（北から）



土錐出土状況 S D 99（南東から）



R P 76出土状況（南西から）



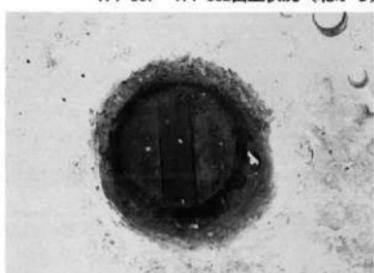
五徳型土製品出土状況（南から）



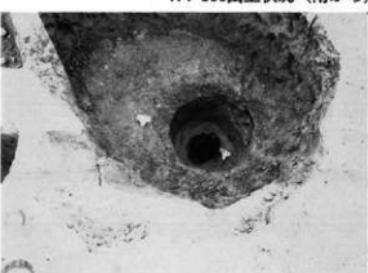
R P 107・R P 112出土状況（北から）



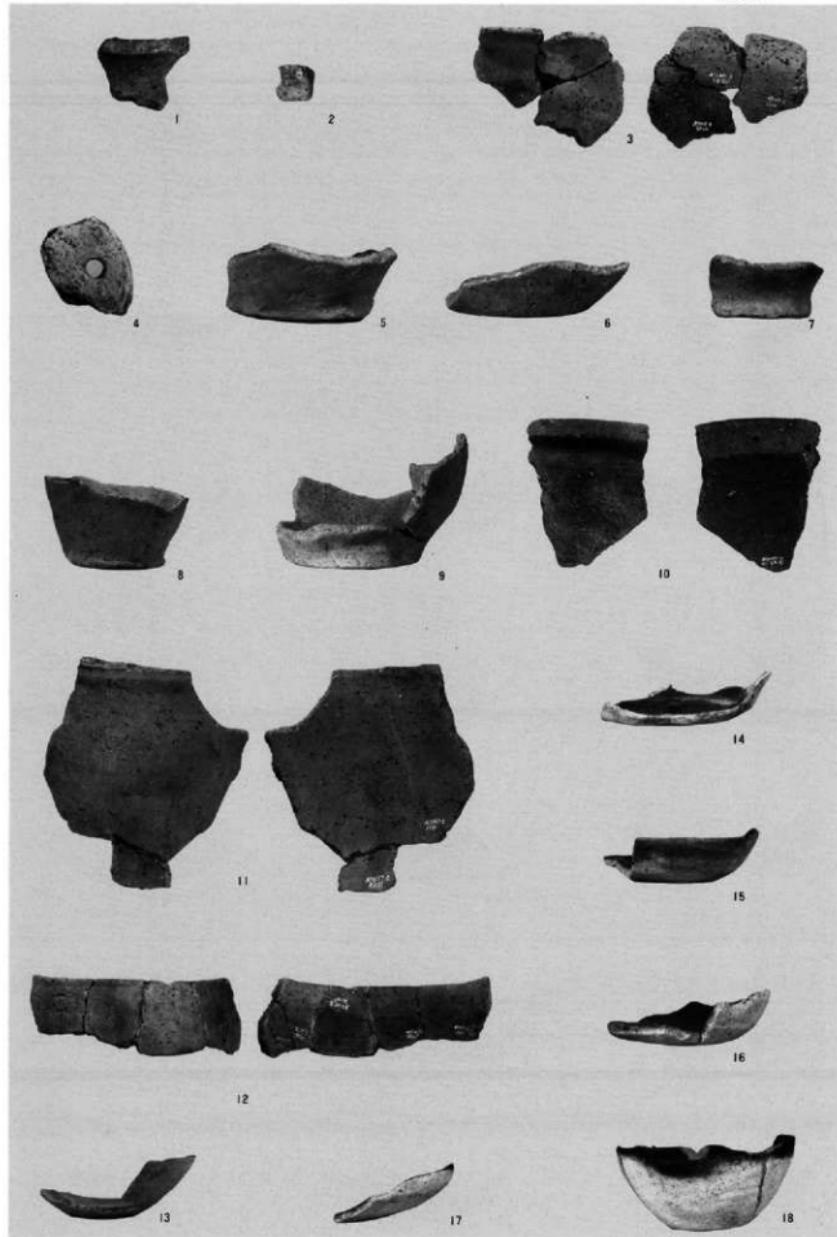
R P 301出土状況（南から）



S K 405埋設桶出土状況（北から）

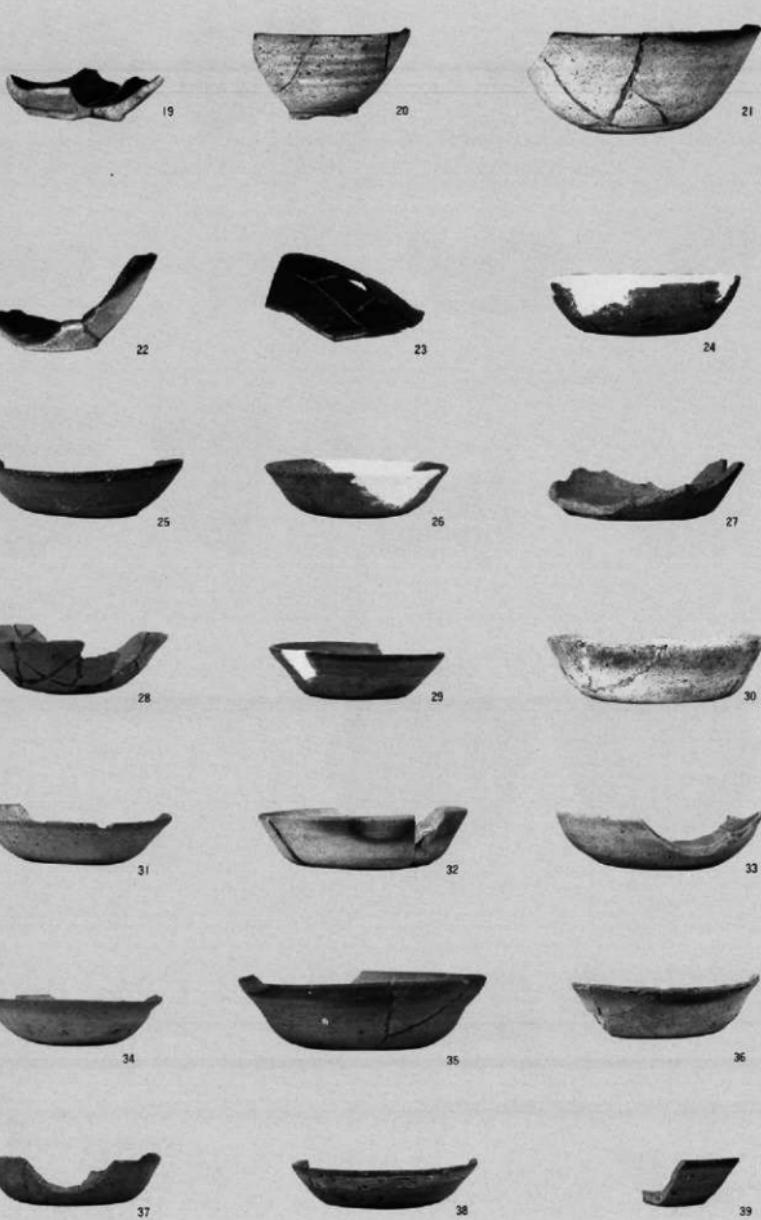


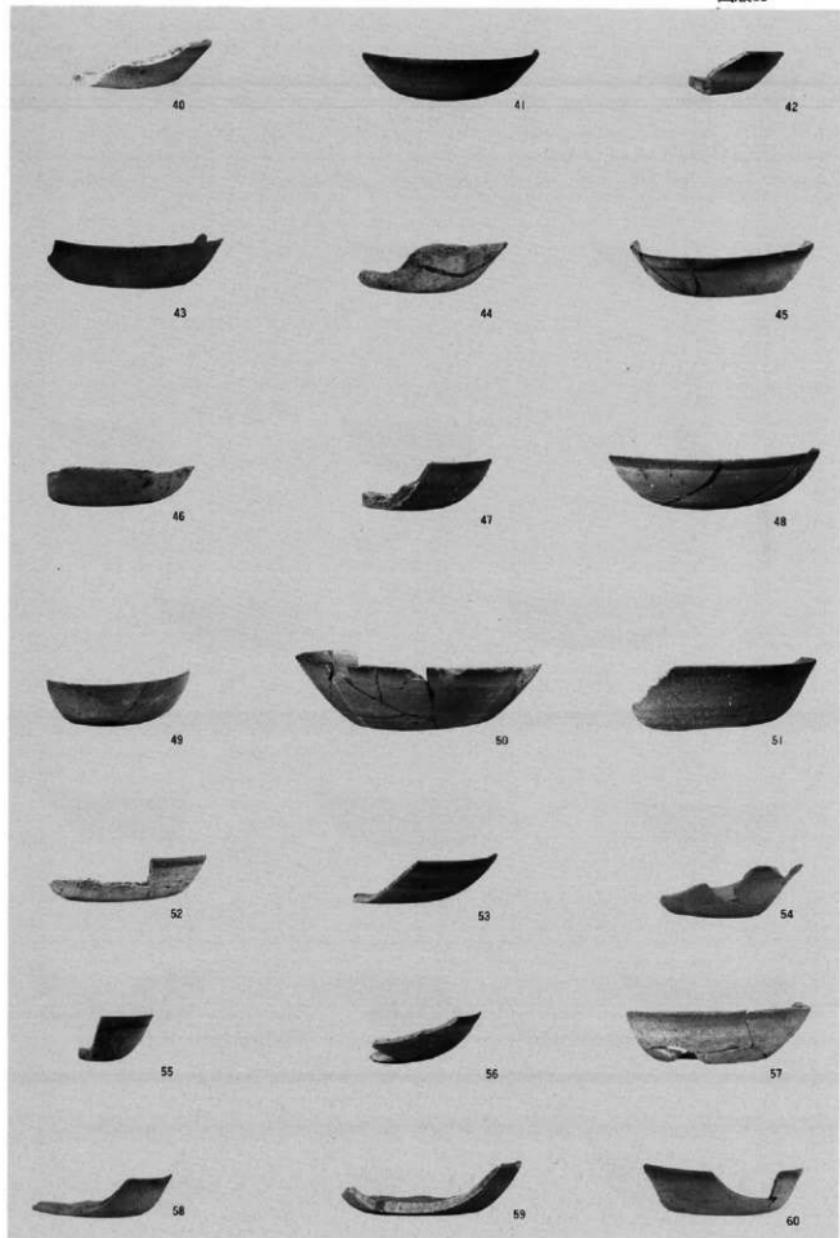
S K 1169柱根出土状況（西から）



西谷地遺跡

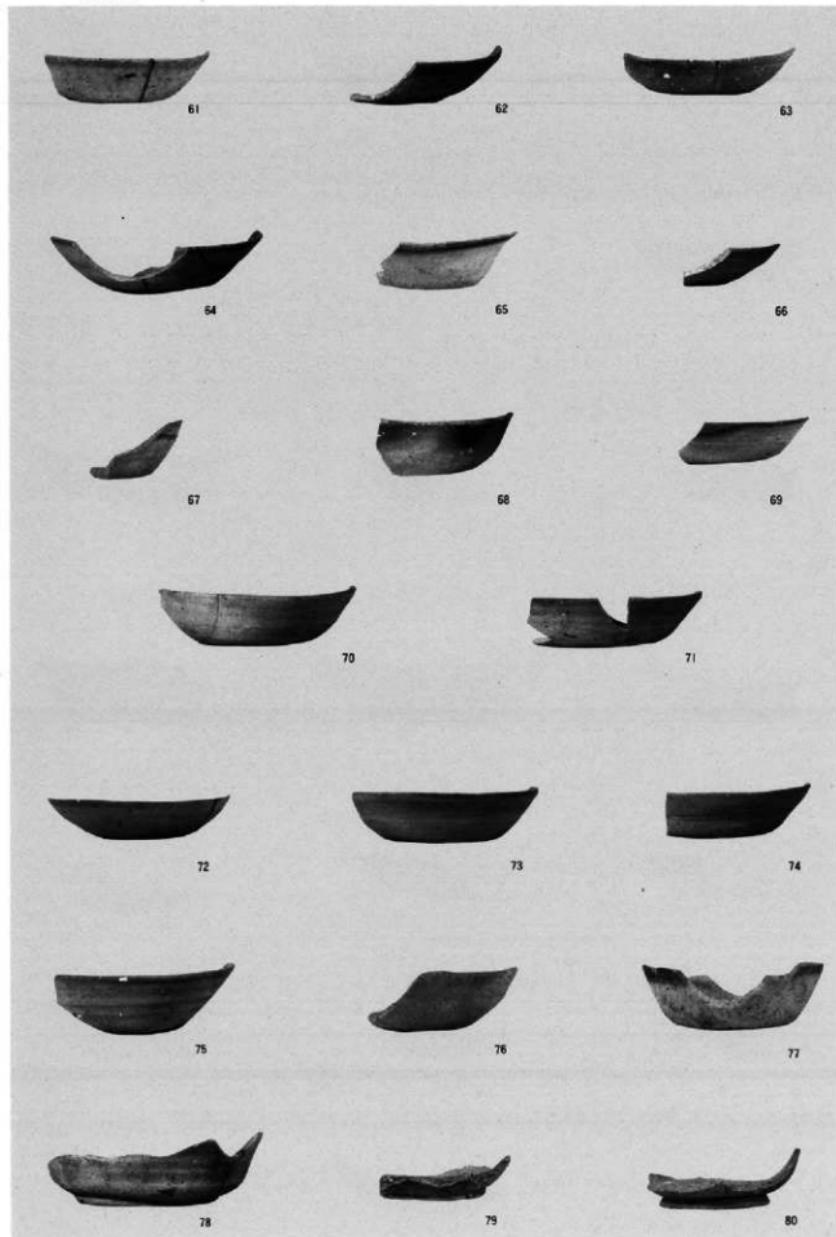
図版18

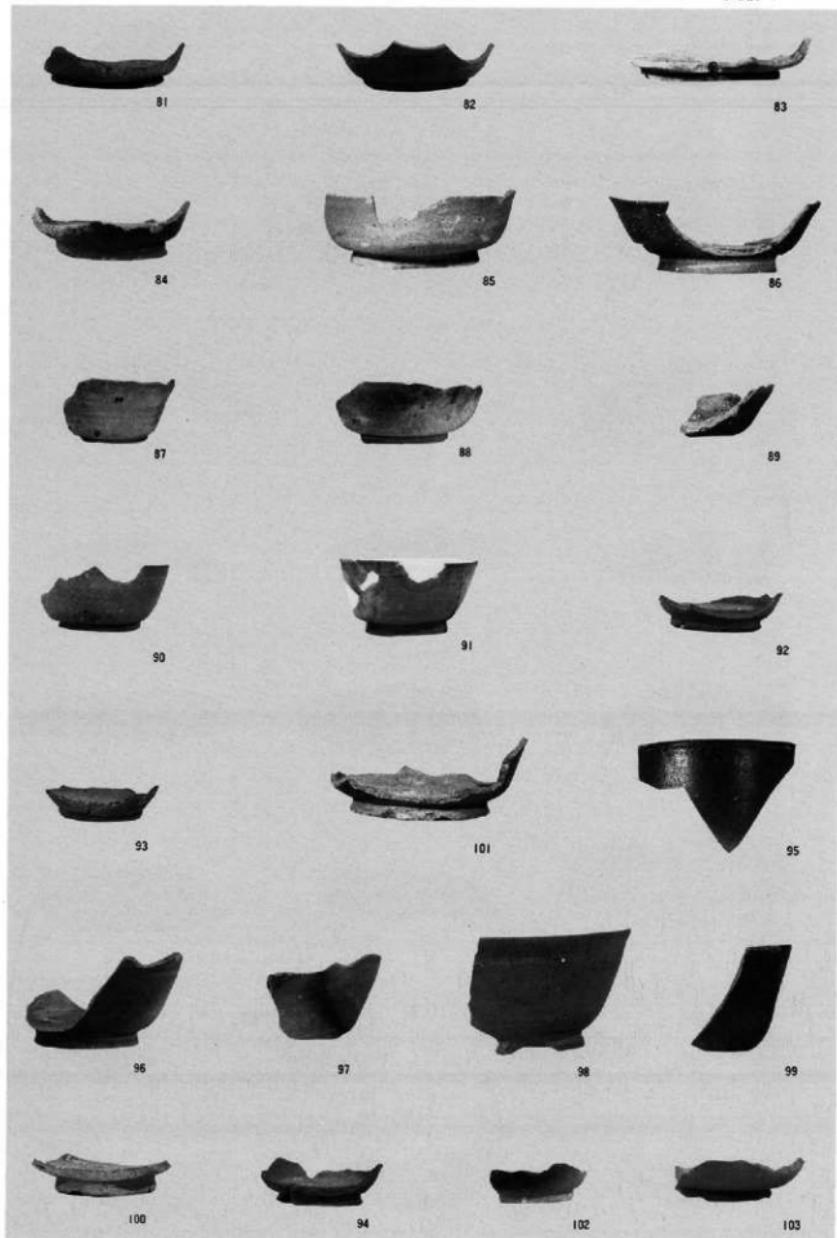




西谷地遺跡

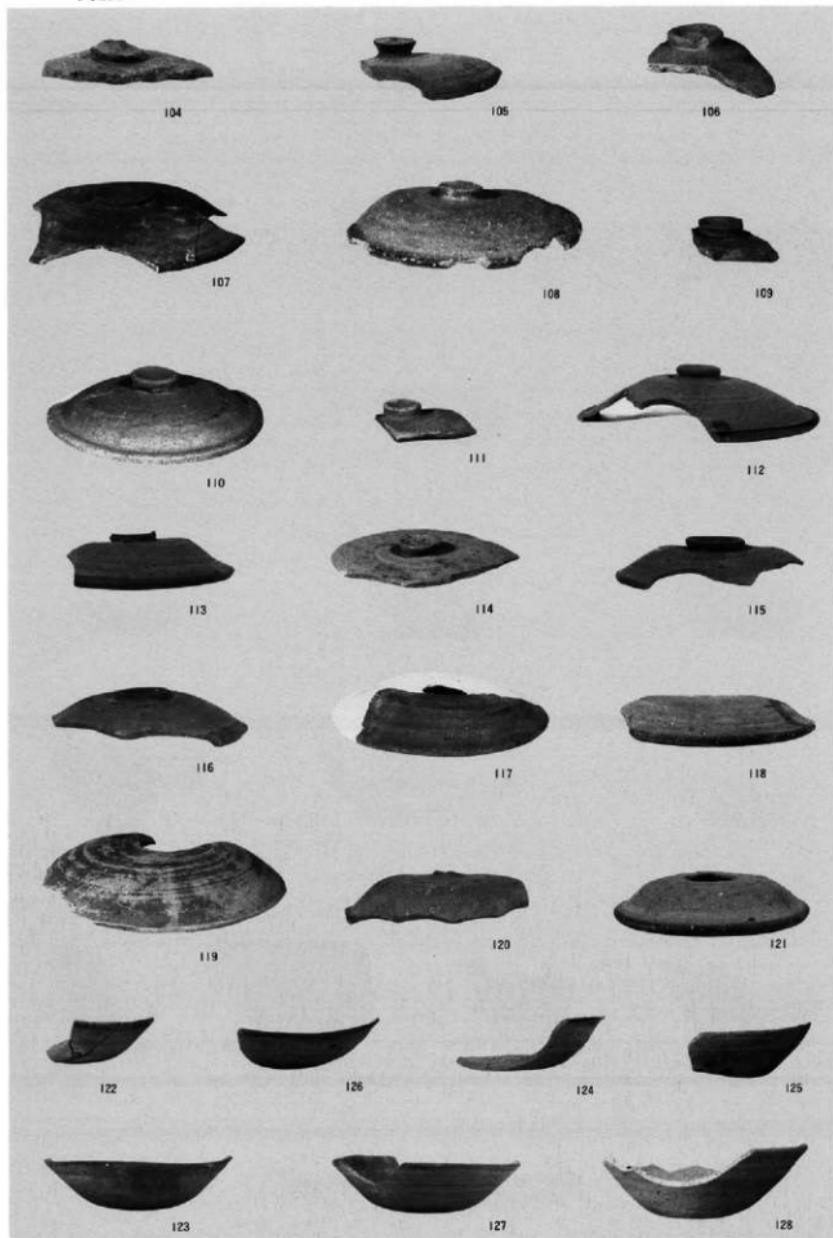
圖版20

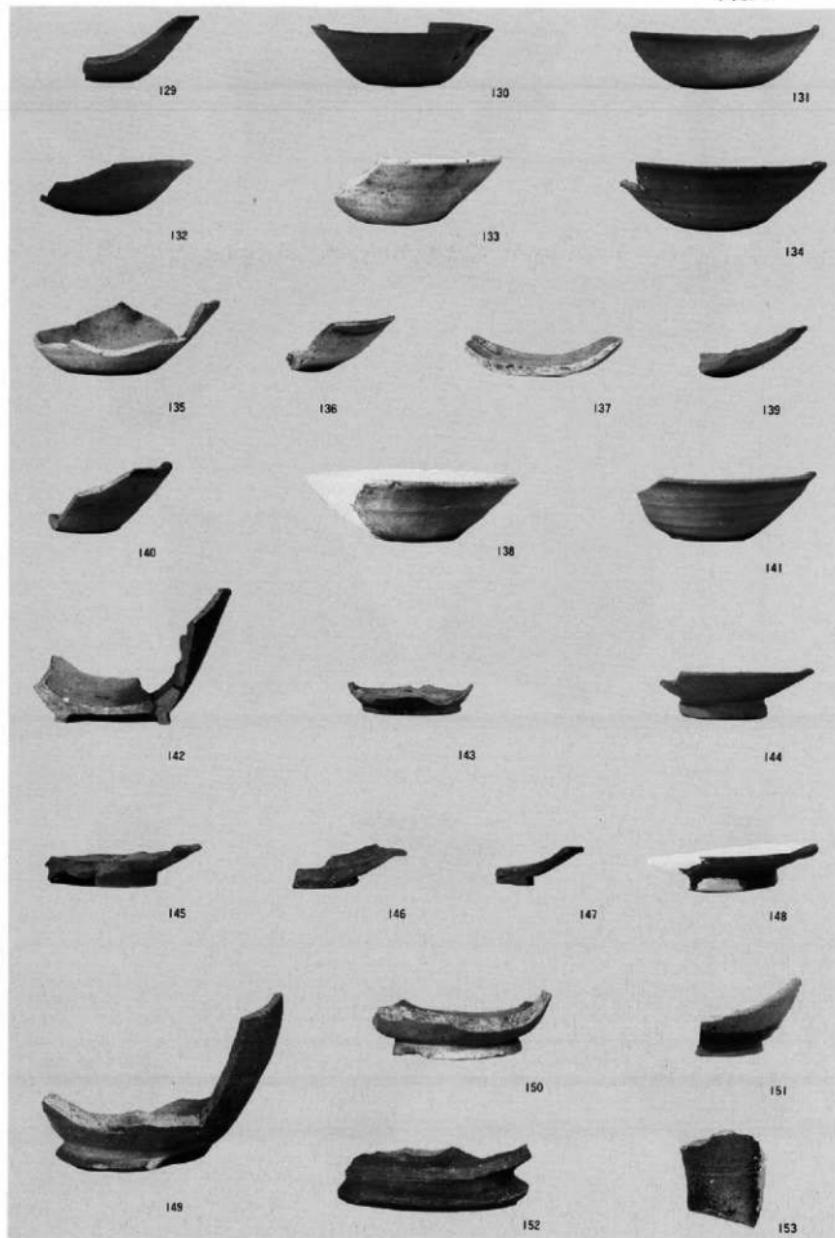




西谷地遺跡

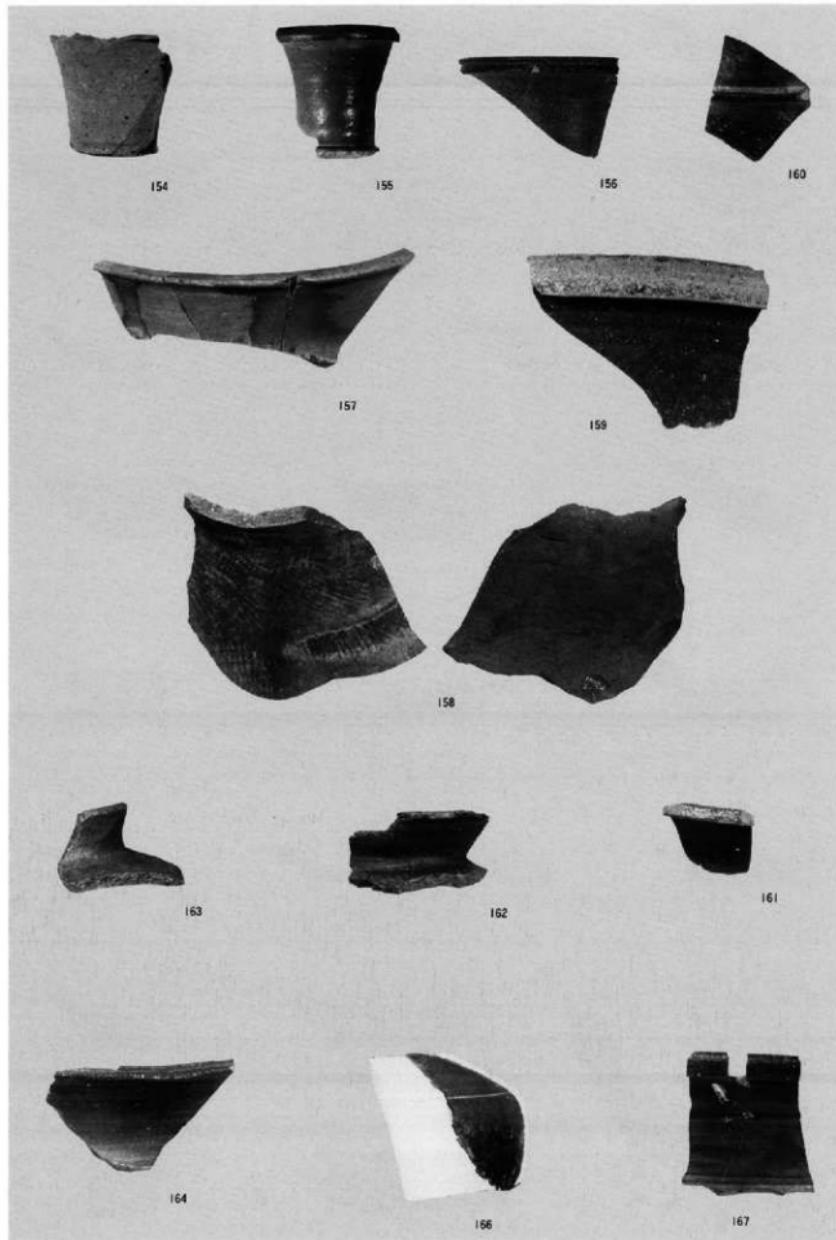
圖版22





西谷地遺跡

圖版24

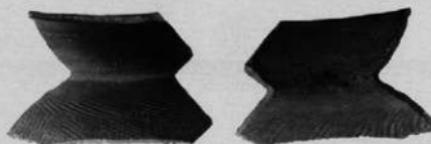




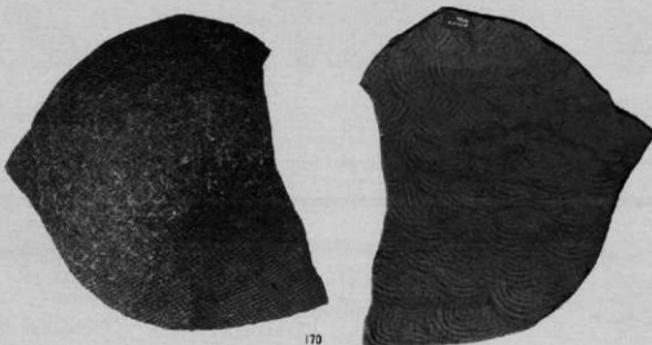
165



168



169



170

西谷地遺跡

図版26



171



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183



184



185



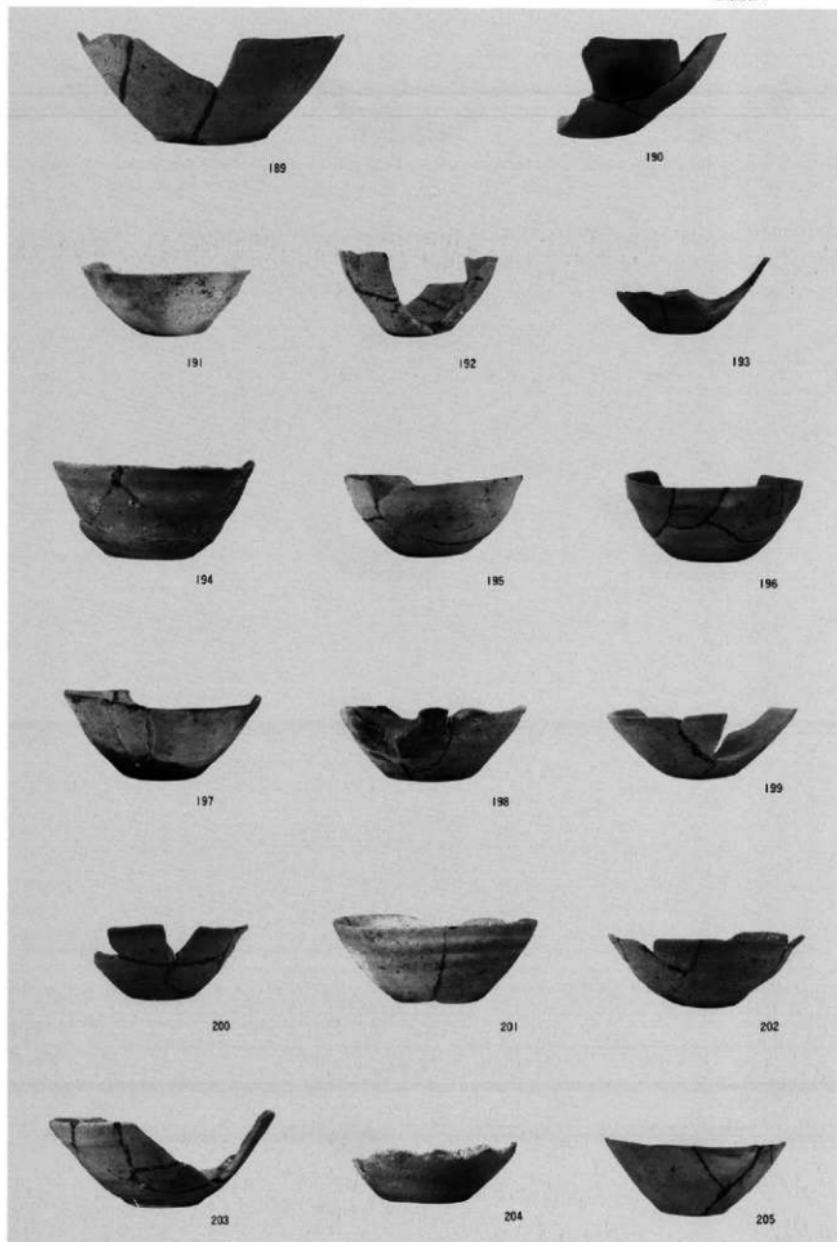
186



187



188



西谷地遺跡

図版28



206



207



208



209



210



211



212



213



214



215



216



217



218



219



220



221



222



223



224



225



226



227



228



229



230



231



232



233



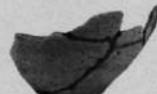
234



235



236



237



238



239



240



241

西谷地遺跡

図版30



242



243



244



245



246



247



248



249



250



251



252



253



254



255



256



257



258



259



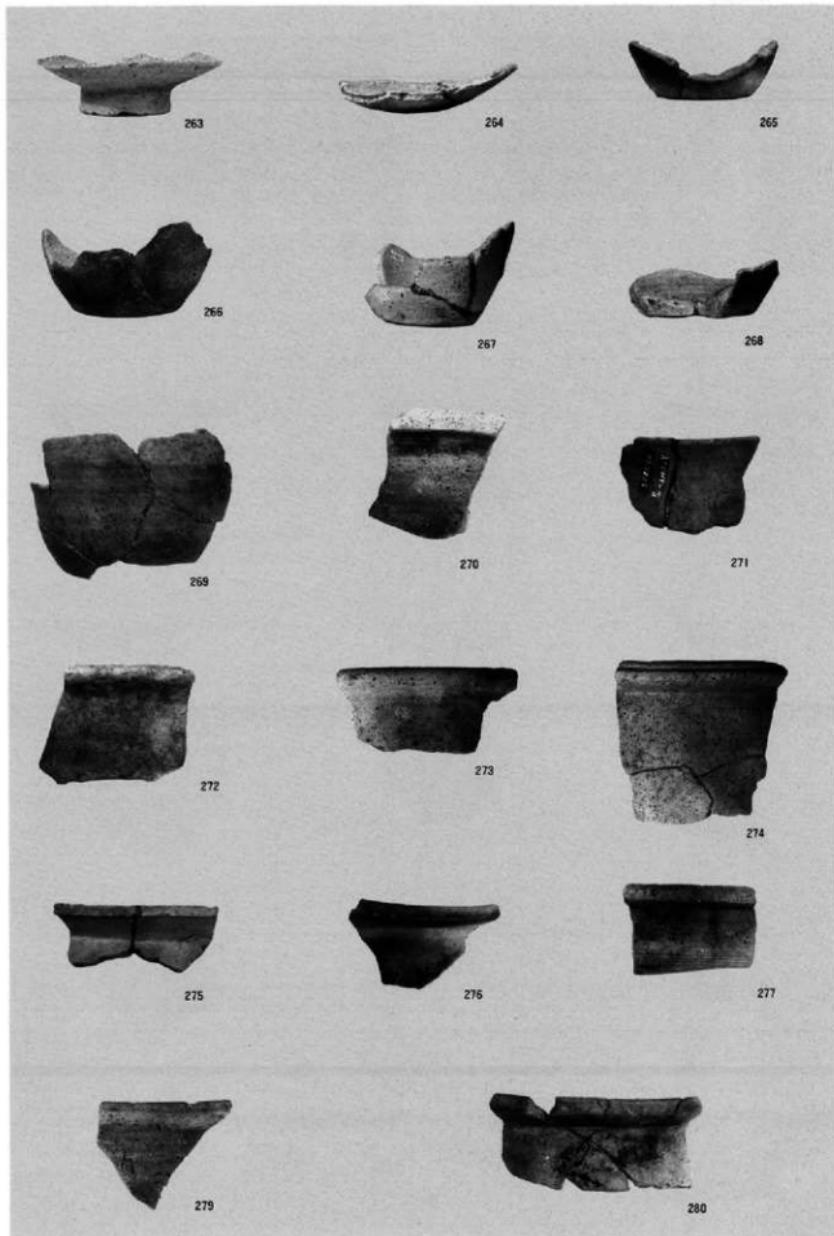
260



261



262



西谷地遺跡

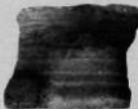
図版32



278



281



282



283



284



285



286



287



288



289



290



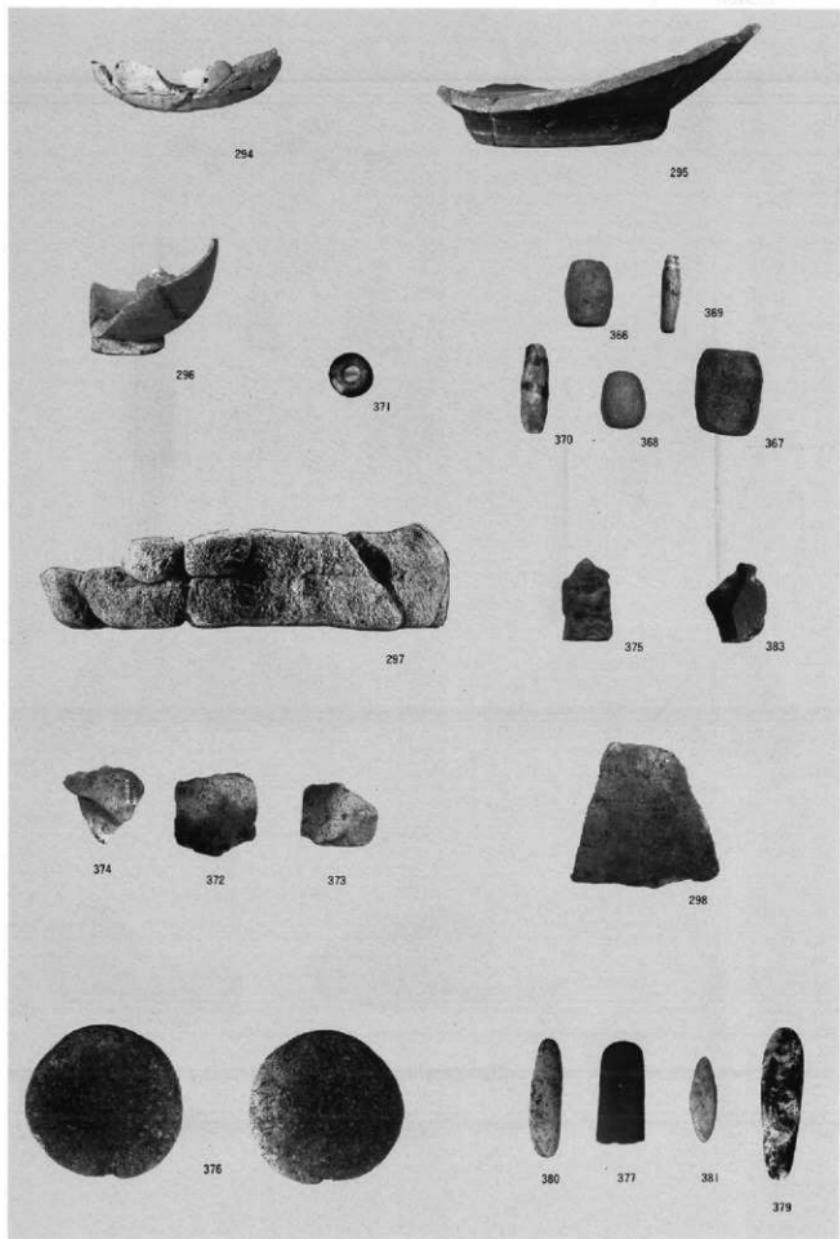
291



292

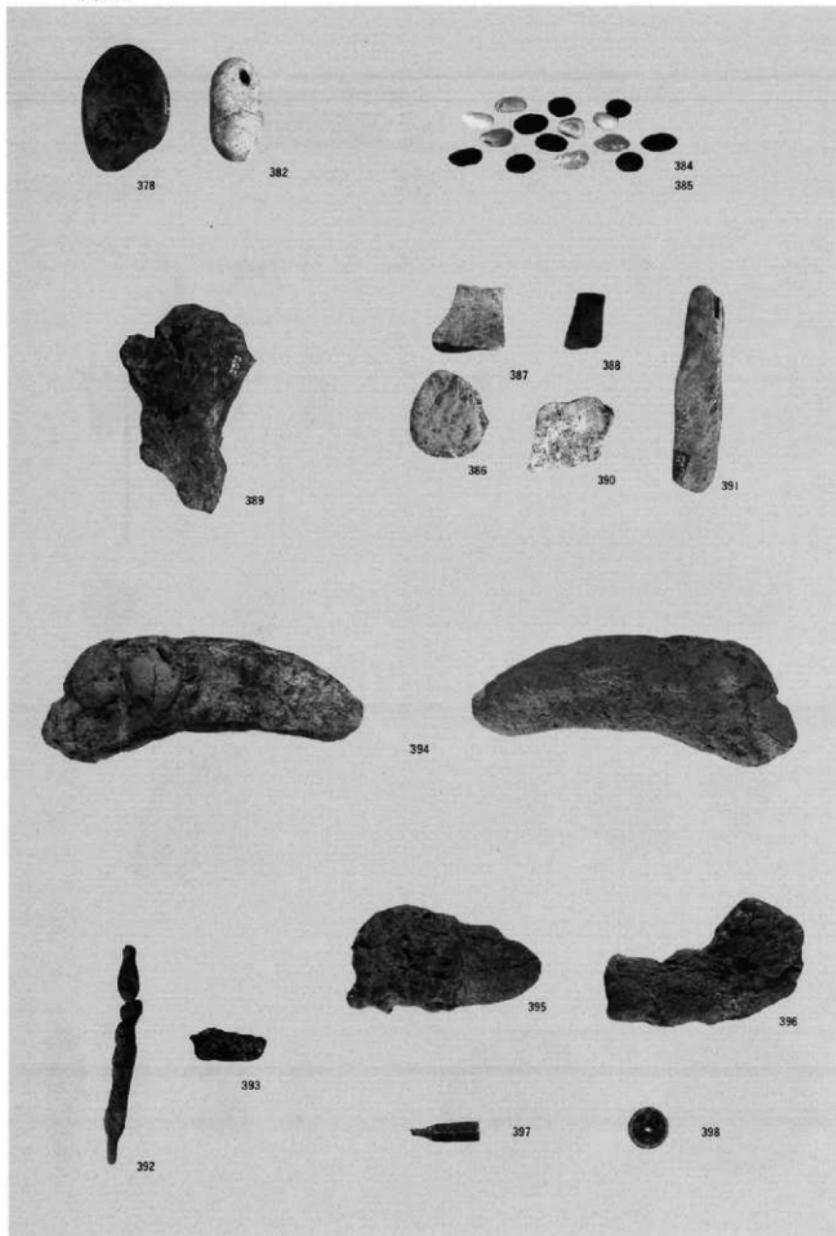


293



西谷地遺跡

図版34





S E 2326井戸枠復元状況
(南東から)
(外側の横桟は支えのための枠)



S E 2326井戸枠内部状況（北面）



S E 2326井戸眼曲物



S E 2326井戸眼曲物内部状況



S E 2326井戸眼曲物接合部状況



299



300



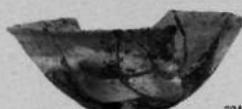
301



302



303



304



305



306



307



308



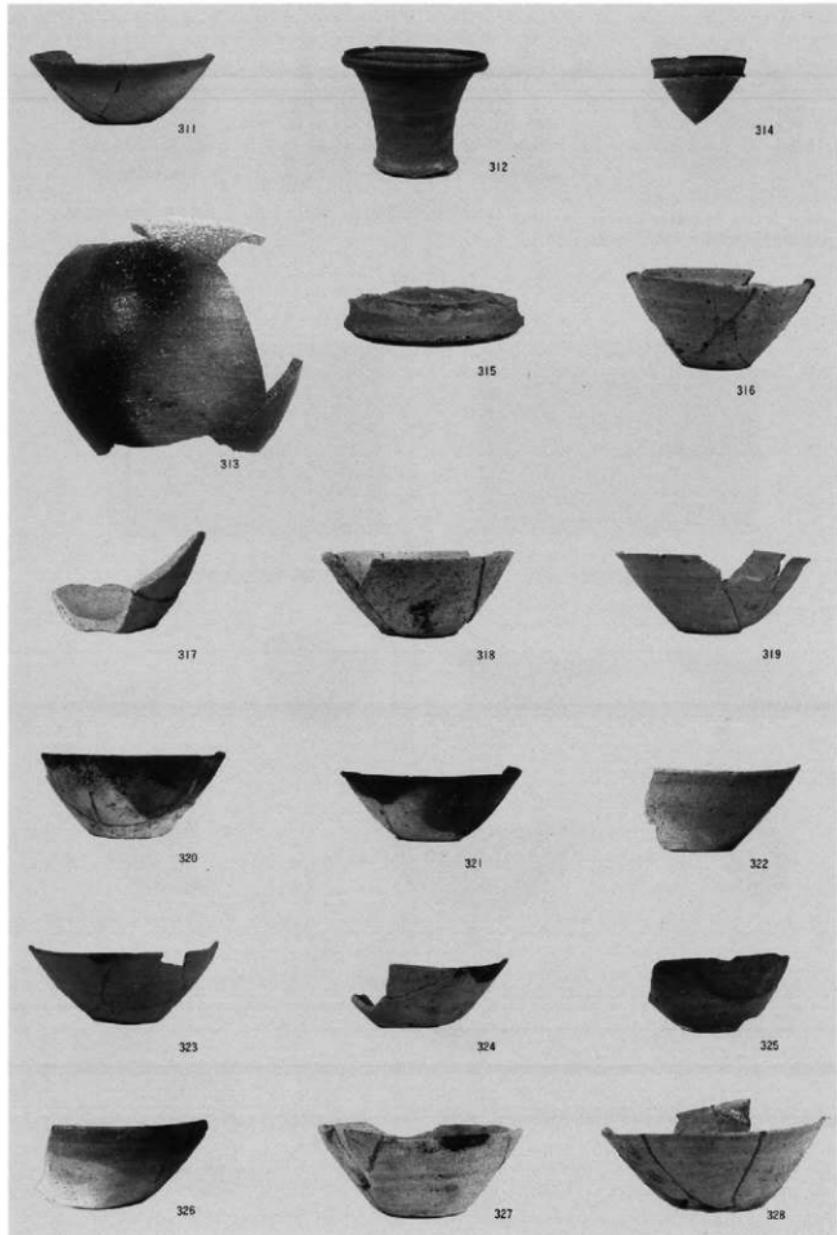
309



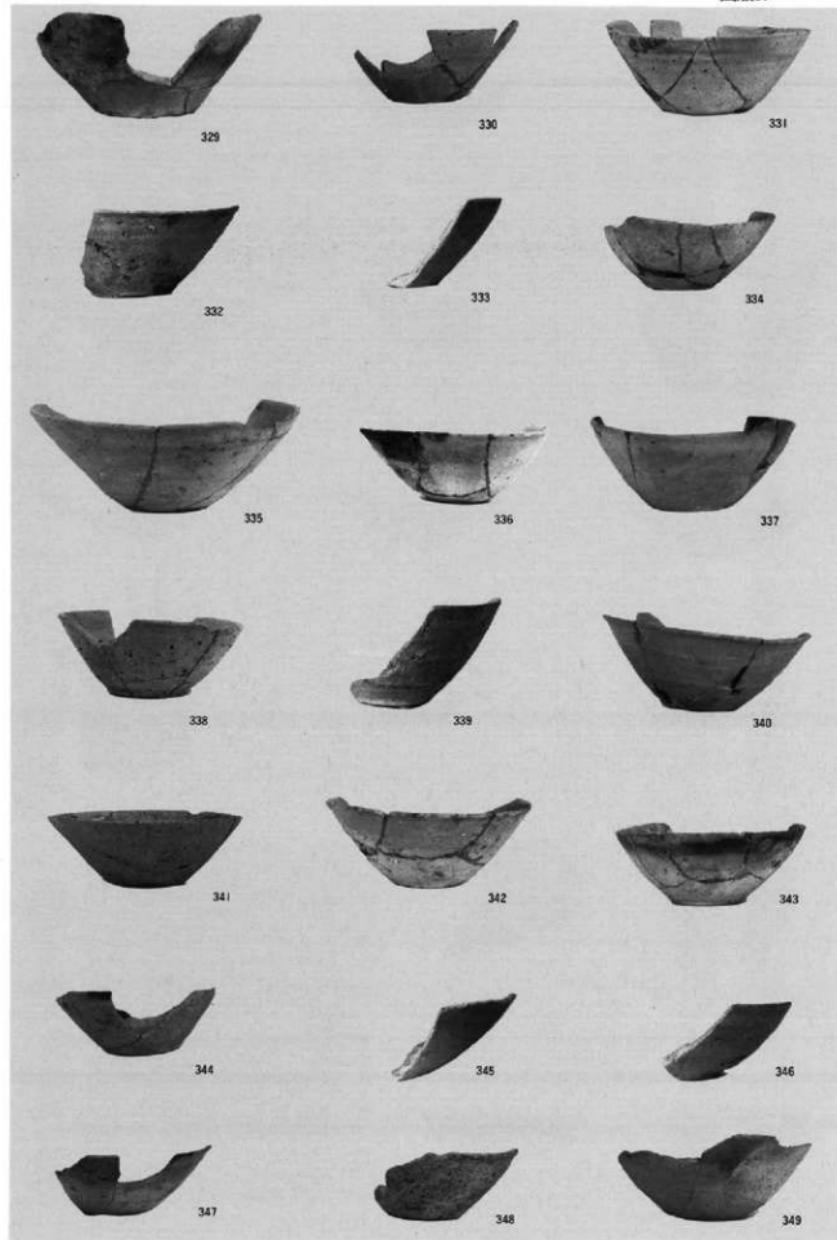
310

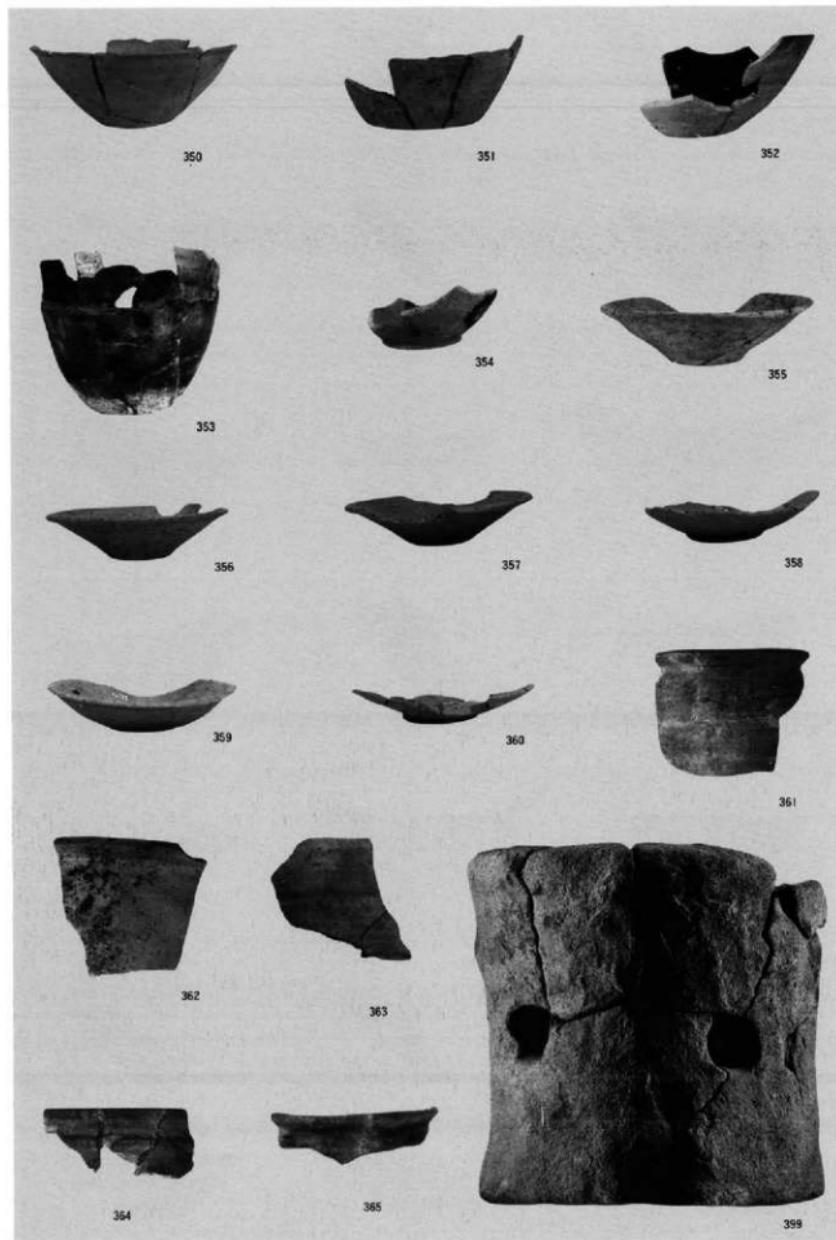
西谷地遺跡

図版36



図版37







重機による表土除去作業



基本層序（中央ベルト南辺）



面整理作業（C区）



遺構検出状況（A区、北から）



遺構精査作業（A区）



記録作業



空中写真測量撮影状況



調査説明会状況（SB 956付近）

西ノ川遺跡

図版40



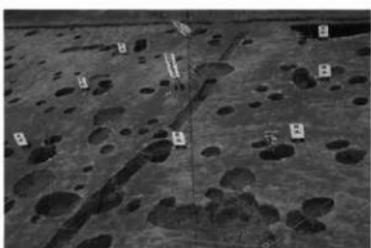
S B 95建物跡（北から）



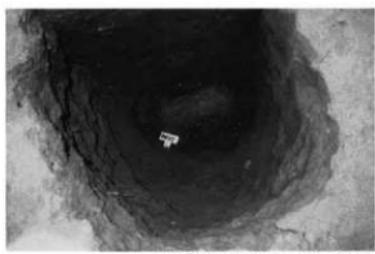
S B 300建物跡（北西から）



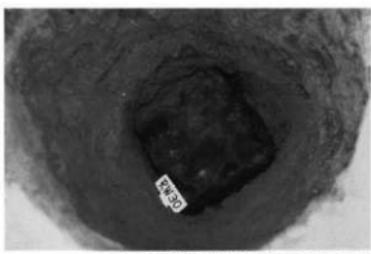
S K 298鉄滓出土状況



S B 956建物跡（南東から）



S B 956基礎板検出状況（S P 828）



S B 1116柱根検出状況（S P 1016）



S B 1115建物跡（北東から）



S B 1116建物跡（北東から）

図版41



S E 296井戸跡調査状況（南西から）



S E 401井戸跡調査状況（南西から）



S E 420井戸跡井戸幹検出状況



S D 239・240溝跡（南西から）



S D 281溝跡調査状況（西から）



S D 281溝跡遺物出土状況



S D 281溝跡遺物出土状況



S D 288溝跡（南西から）



SK 16土壤完掘状況



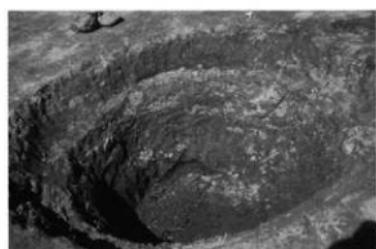
SK 16土壤遺物出土状況（中世陶器 捜鉢）



SK 103土壤調査状況



SK 700土壤調査状況



SK 888土壤調査状況



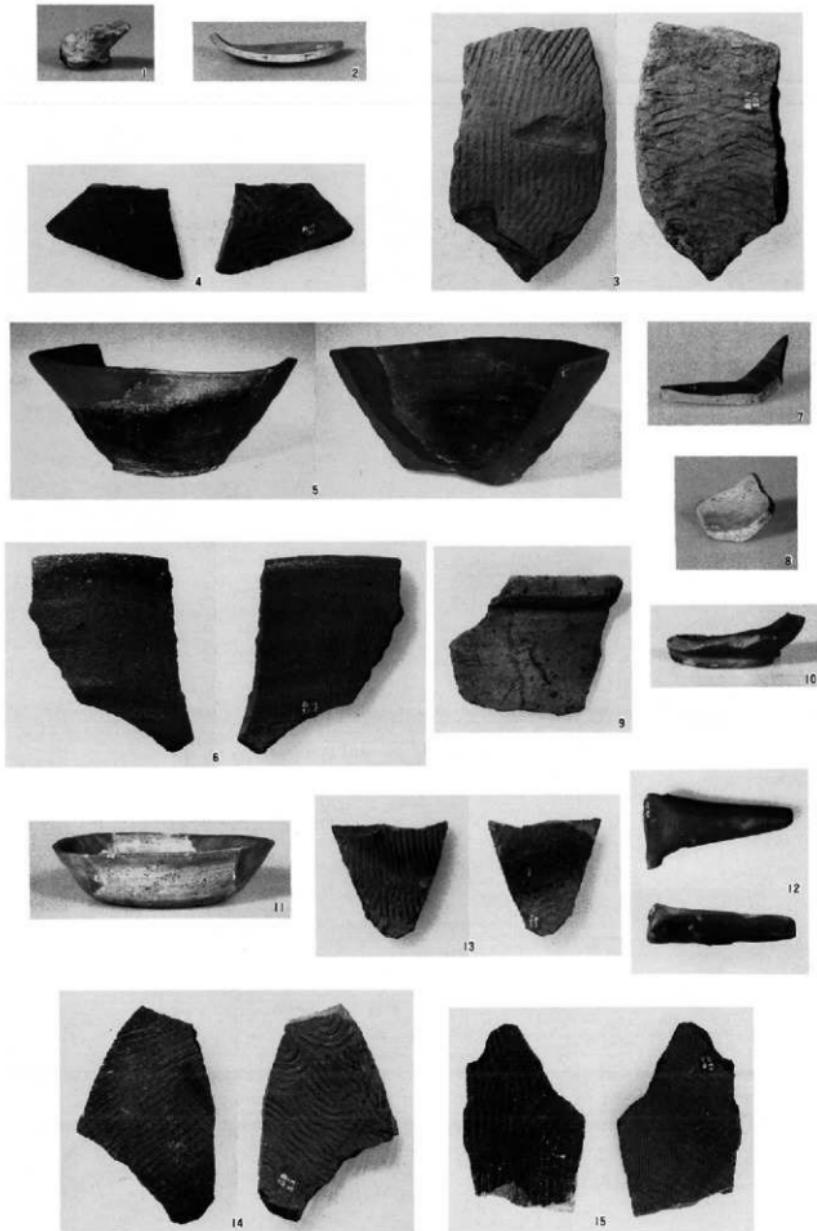
遺物出土状況（須恵器 壺）



遺物出土状況（赤焼土器 壺）

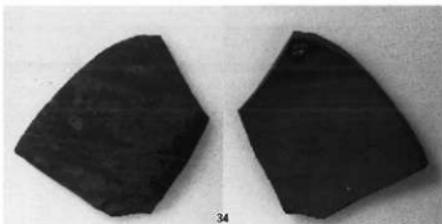
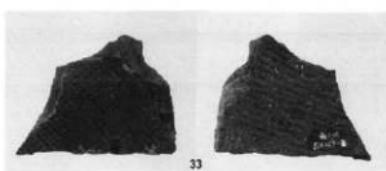
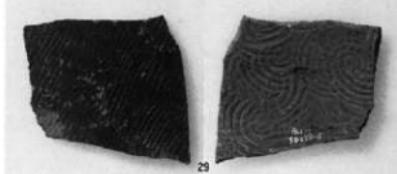
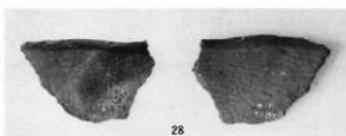
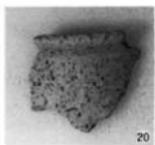
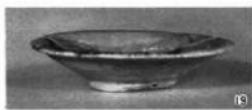
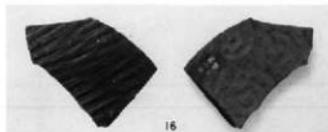


遺物出土状況（赤焼土器 壺）



西ノ川遺跡

図版44



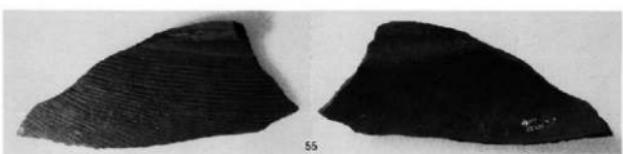


西ノ川遺跡

図版46



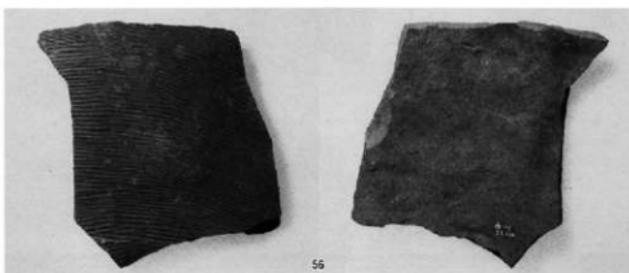
57



55



58



59



61



62



63



64



65



66



67



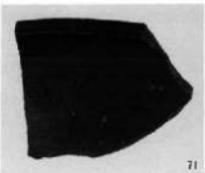
68



69



70

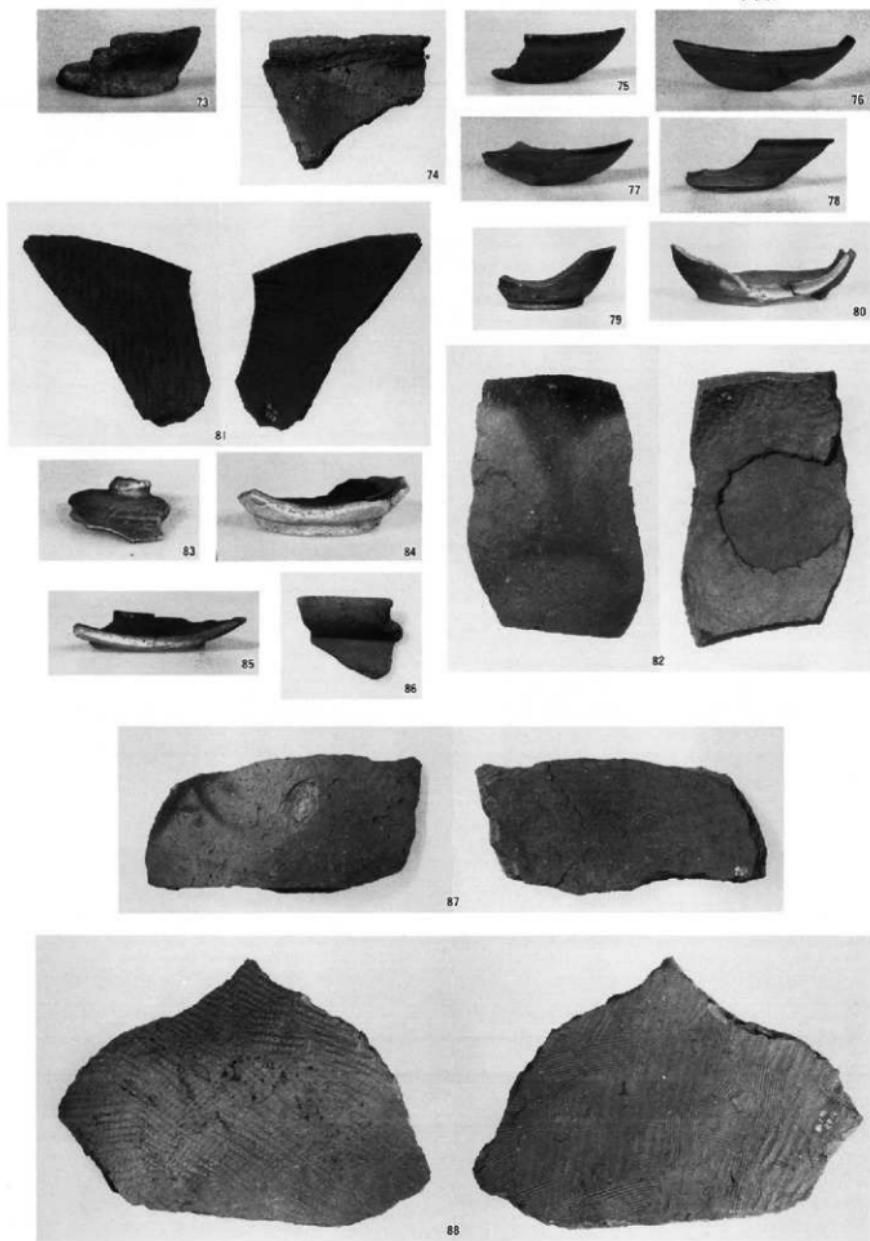


71



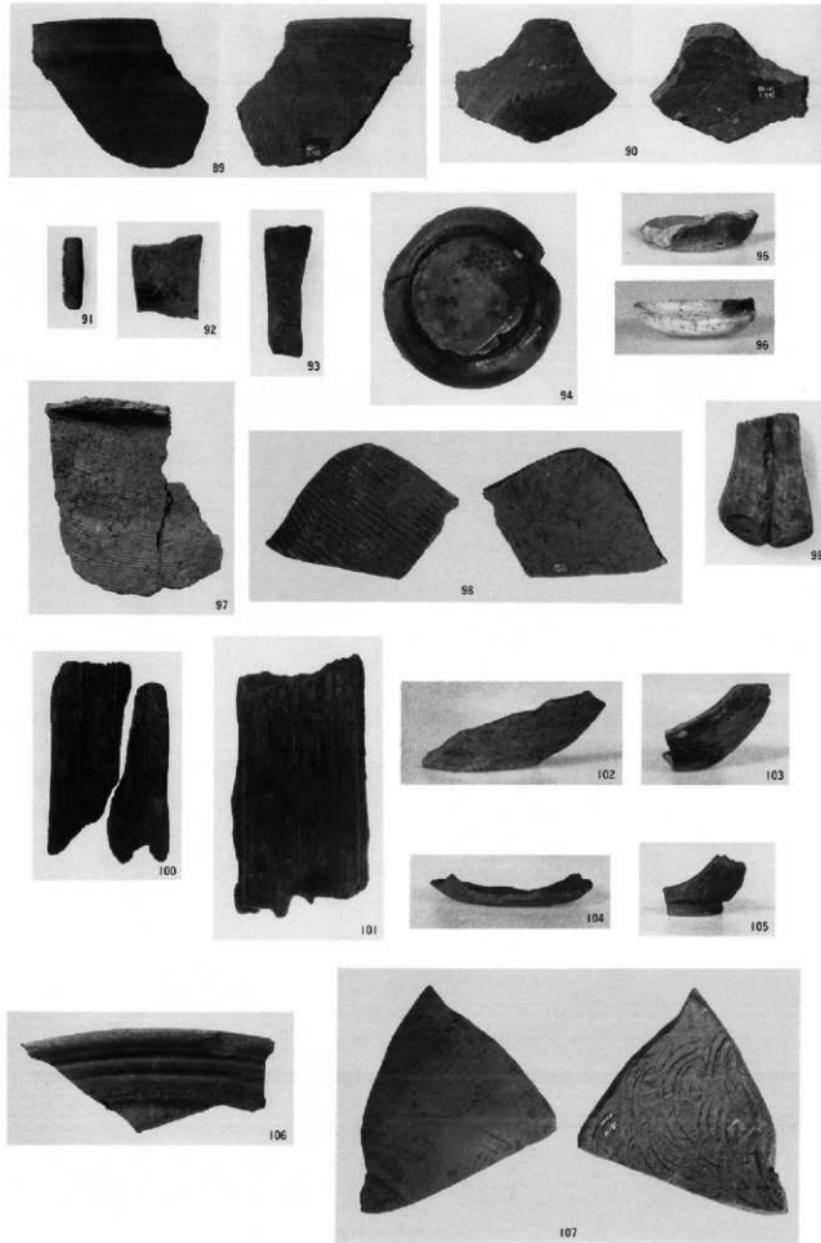
72

図版47



西ノ川遺跡

図版48





108

109

112



110



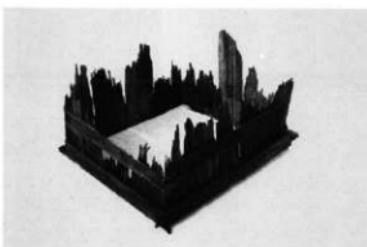
111



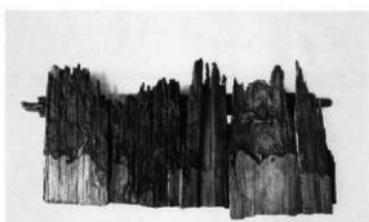
114



113



S E 420 井戸枠復元状況（南東から）



S E 420 井戸枠側板配列状況（東面 内側から）

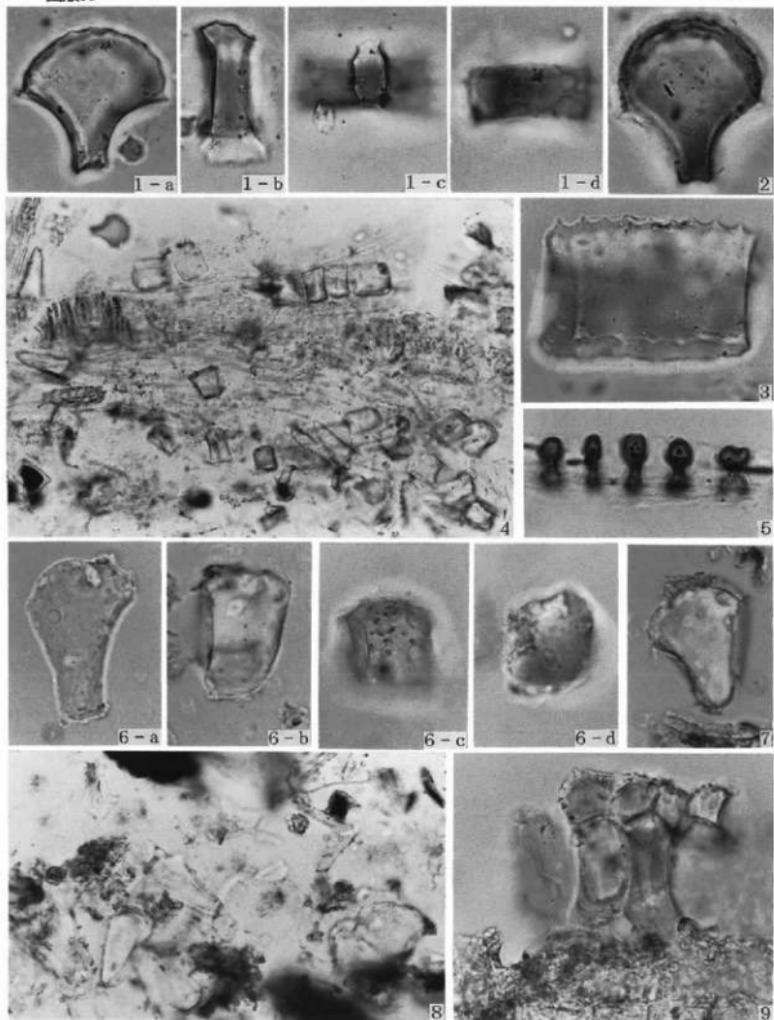


S E 420 井戸眼曲物



S E 420 井戸眼曲物内部

図版50



1~3, 6, 7, 9 : $30\mu\text{m}$ 4, 8 : $30\mu\text{m}$ 5 : $100\mu\text{m}$

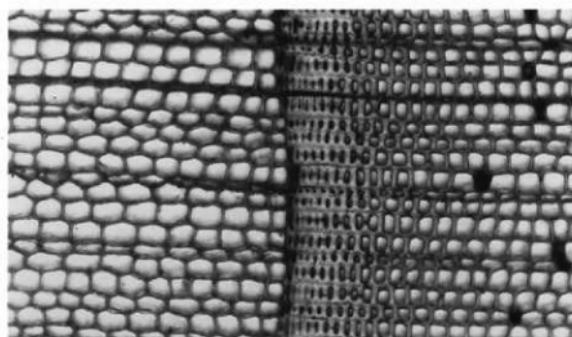
1~5 : 試料1 (イネ) 1~4 : 機動細胞珪酸体 5 : 単細胞珪酸体

1-a, 2 : 断面、1-b, 3 : 側面、1-c : 表面、1-c : 裏面

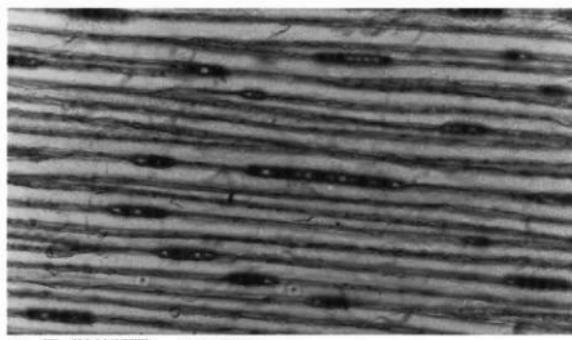
6~9 : 試料2 (ウシクサ族) 機動細胞珪酸体

6-a, 7 : 断面、6-b : 側面、6-c : 表面、6-c : 裏面

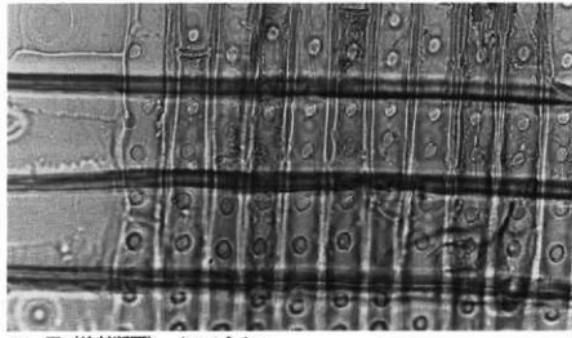
注 試料1 = S E401より出土 試料2 = S K1090より出土



1a. スギ（横断面）井戸枠最下部材 bar : 0.2mm



1b. 同（接線断面） bar : 0.2mm



1c. 同（放射断面） bar : 0.1mm

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第26集

西谷地遺跡第2次

西ノ川遺跡

発掘調査報告書

1995年3月31日 発行

発行 山形県埋蔵文化財センター

〒999-31 山形県上山市弁天2丁目15番1号

電話 0236-72-5301

印刷 大場印刷株式会社